

# ふるさと

岩原寅猪名誉教授 追悼記念号



慶応義塾大学整形外科同窓会誌





# 目次

岩原寅猪名誉教授年譜	6
ごあいさつ 同窓会長 菅野卓郎	7
「追悼の辞」 教室主任 矢部 裕	8
巻頭写真特集	11
特集 岩原名誉教授のおもいで	16
小泉 次郎 (11)	16
小柴 清定 (14)	16
左奈田 幸夫 (13)	18
白田 正雄 (9)	20
永井 隆 (22)	24
泉田 重雄 (23)	29
浅場 義一 (23)	31
田中 一雄 (24)	34
金井 司郎 (24)	39
岡田 衛生 (26)	41
菅野 卓郎 (27)	42
今井銀四郎 (28)	44
春日 秀彦 (28)	46
蕪木 初枝 (特)	47
森 雅文 (30)	49
鷺谷 澄夫 (30)	51

津布久雅男	有馬	石井	吉沢	阿久津壽一	田辺	平林	村尾	富田	藤野	野末	月村	宇井	奥村	道山	今井	榑田喜三郎	松井	木住野喜義	小林	鈴木	齊藤	小林
亨	良章	英造	(特)	硯	冽	真俊	恭弘	豊美	洋	泰治	恵治	守彦	新一	望	喜三郎	明	喜義	真杉	邦雄	正也	祥悟	
(43)	(42)	(41)	(41)	(40)	(39)	(特)	(37)	(36)	(36)	(35)	(34)	(特)	(32)	(32)	(特)	(特)	(31)	(特)	(專4)	(專4)	(專4)	
97	95	93	89	88	87	84	80	78	77	75	74	72	67	64	63	61	59	58	58	56	54	53

學術論文抄録紹介

前田賞受賞論文

昭和六十二年(大崎康正、飯島謹之助)

昭和六十三年(中川智之)

岩原賞受賞論文

昭和六十三年(添田修一)

教室だより

教室人事

留学

慶弔のお知らせ(結婚、御逝去、御開業)

フレッシュマン紹介

113 110 110 110 106 105 101





岩原寅猪名誉教授年譜

略歴

明治34年9月2日高知市弥生町にて出生

昭和2年3月 慶応義塾大学医学部卒業

昭和5年7月 同 講師

昭和9年4月 同 助教授

昭和20年12月 国立箱根療養所所長（兼任）

昭和21年10月 慶應義塾大学医学部教授

昭和25年4月 第23回日本整形外科学会会長

昭和31年10月 第15回日本脳神経外科学会会長

昭和32～33年 ロックフェラー財団フェローとして米

国、欧州へ出張

昭和34年10月 第3回日本手の外科学会会長

昭和35～36年 慶應義塾大学病院院長

昭和40年11月 第9回日本形成外科学会会長

昭和41年5月 慶應義塾大学医学部教授退職

国立村山療養所所長

昭和41年12月 慶應義塾大学名誉教授

昭和42年11月 第2回日本パラプレジア医学会会長

昭和47年7月 国立村山療養所名誉所長

昭和48年4月 勲二等瑞宝章

昭和63年3月14日御逝去 享年86歳

いあいさじ

菅野卓郎

昨年の総会において推せんを受け、不肖私が同窓会長を引き受けることになりました。伝統ある整形外科教室の同窓会長という大役はいささか荷が重いのですが、諸兄のご協力により務めを果たしたいと思っております。よろしくお願い致します。

さて故岩原名誉教授が逝かれてからすでに一年数カ月になります。少々期間が経っておりますが、本誌の発刊がその後はじめてになりますので、今回は故岩原名誉教授の追悼号とさせていただきます。

岩原先生は戦前、戦後を通じてもっとも長い期間を教室で過ごされ、とくに戦後は前田教授のあとを受けて教室を主宰されて、まさに今日の慶応整形外科を築かれた方であるといえます。その間数多くの弟子を育成され、数百人にも及ぶ同窓の方々が先生のお世話になっております。このたびは同窓の諸兄にお願いして、それぞれの時代における違った立場から先生の思い出をつづっていただきます。

ここにあらためて先生を想い、心からご冥福をお祈りしたいと思います。

## 追悼の辞

矢部 裕

恩師岩原寅猪名譽教授には、気管支肺炎のため、昭和六十三年三月十四日午前五時三十分、逝去されました。五十六年一月二十七日、脳梗塞で倒れ、七年余りにわたる臥床生活にもかかわらず、やつれはみせず、普段と同じ安らかなお顔で永久の眠りにつかれました。享年八十六歳、高暉院医明道隆大居士とられました。

昭和二十一年十月前田和三郎教授を継ぎ、四十一年五月退職にいたる二十年余、教室を主宰し、今日の隆盛を築きあげられました。年若くして、昭和二十五年には日本整形外科学会会長を、更に東日本臨牀整形外科学会、日本脳神経外科学会、日本形成外科学会、日本パラプレジア医学会の各会長をつとめられました。学内においては厚生女子学院院长、大学病院長を兼任、学外においては国立山療養所長、伊勢慶応病院理事長、塾評議員として活躍されました。その他、厚生省、総理府の各種公的委員を歴任され、四十八年四月には勲二等瑞宝章を授与されました。

脊椎、脊髄外科を専門とし、昭和十年の宿題報告「脊

髄外科」、二十四年宿題報告「脊髄損傷の後遺症と後療法」をはじめとし、ミエログラフィ、脊髄腫瘍、脊椎カリエス、脊椎・脊髄症、自身提唱された椎間板症等幾多の業績をもたらし、それらは四十一年の退職記念講演となった映画「Disc lesion - clinical entity of pathological condition of the intervertebral disc」で結実いたしました。

また骨折、骨移植、骨端線、膝関節滑膜、先天股脱、先天異常、骨腫瘍、手の外科等の研究を展開し、それぞれの部門に数多くの俊才を育て、その業績は現在にいたるまで継承されています。その薫陶を受けた弟子の數二百余名、指導した学位論文百二十六、退職記念教室業績集に掲載された業績數は九百五十を超えています。

高潔な人柄は毀譽褒貶を介さず、信ずるところに従って直言して憚らず、常に厳正をもって子弟を指導し、子弟の等しく畏敬するところでした。土佐言葉でいえば「イゴッソー」であります。（岩原先生は高知出身）。

学生時代、先生の名講義「骨医者三十年、この岩原が……」、「医者たる前に人間たれ、基礎医学へ行け。臨床へ来るなら整形へ来い。そのためには整形以外の、特に内科、外科の基礎を広く学んでおけ」に魅せられて、私が入室したのは、昭和三十三年四月でした。先生の脂

の乗り切った時代です。すべてが自信にあふれ、近寄り難い雰囲気がありました。教授回診で主治医がカルテでこづかれる、患者さんの前で「こんな手術をした医者は誰ですか」、「学会へは出ず、金稼ぎのアルバイトには喜んで行く。この乞食めが。」。とんだ所へ入室したなと思う反面、新入室者の歓迎会で、また新年や私的なことでの訪問では、目を細め、顔を皺めて歓待し、家庭においてはやさしい好爺爺に変身しておりました。植木をいじり、薔薇を咲かせ、それ以外は何一つできず、奥様がすべての頼りのようでした。ここでなぞなぞ一句「岩原寅猪とかけて何ととく」、「野球の二軍選手ととく」、「心は」、「コーチ（奥様の名前は高千）のいうがま、に動く」。同窓のKかT氏の作だったと思います。イゴッソーも慶応退職の二、三年前からは大分穏やかになられました。厚生女子学院長、病院長をなされ、また我ら悪童共が岩原先生の取り扱いのこつを会得したためかも知れません。更に外人とのつき合いに負うところもあると思います。数回に及ぶ外国への出張、外人の招待は、英語があまり堪能でないにも拘わらず、*with my heart*で多くの知己を得、われわれの留学の道をつけてくれました。このことは教室にとどまらず、今日の形成外科、リハビリテーション科の礎石となりました。

当時、岩原先生は岩原天皇とも呼ばれていました。厳しさと慈愛によって培われた美しき師弟関係の表現ともいえます。昭和四十一年五月に退職された先生は、その直後の大学紛争の嵐に巻き込まれることもなく、「年とってしあわせと思うほどしあわせなことがあるか。まったく冥加のいたりである」と、退職記念業績集のまえことばを結んでおります。

昭和五十六年一月に襲った病魔は左半身不随をもたらし、長期にわたる奥様の献身の看病にも拘らず、昭和六十三年三月十四日未明、眠るがごとくこの世を去りました。

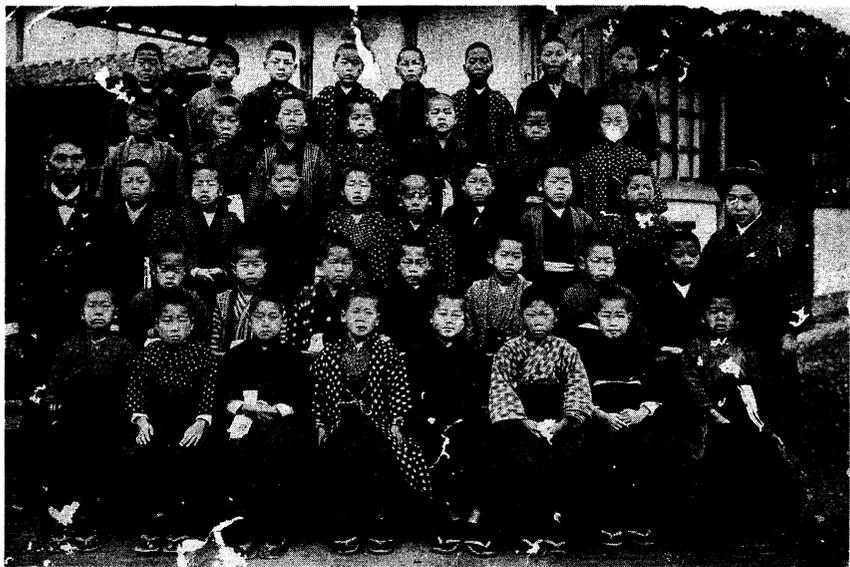
先生の教えは、鬼手仏心は、われら不肖の弟子達のみならず、われらが教え子、先生の孫達の心に宿り、大脳皮質と手に焼き付き、継承されています。

先生どうぞ安らかにお眠り下さい。  
ご冥福を御祈り申し上げます。

岩原先生の御葬儀は慶応義塾大学医学部整形外科教室葬として、昭和六十三年四月十六日、先生の愛された北里記念講堂において盛大にとり行なうことができました。生前の御偉徳をしのび、慶応義塾大学・病院関係、全国医科大学・学会関係・厚生省・総理府関係、厚生女

子学院・ナース関係、同門、同窓関係等、参列者は四百名を超えました。深い悲しみの中にも心暖まる弔辞を植村恭夫医学部長（代読・安田健次郎副医学部長）、鳥山貞宣日本整形外科学会長、友人代表天兒民和名誉教授、大内正夫同窓会会長、門下生代表泉田重雄前教授よりいただくことができました。賜った御供花、御厚志とともに厚く御礼申し上げます。

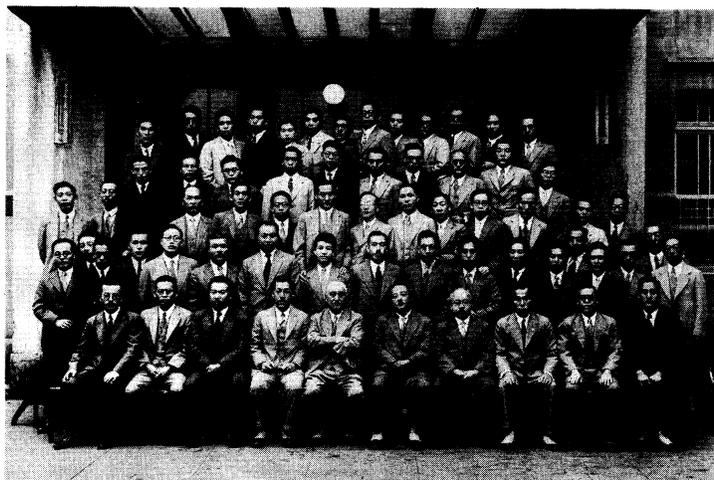
また、御遺族の申し出により、教室員の研究助成に御寄付いただきました。岩原賞を設置し、岩原先生の御偉徳を永く教室に伝えると共に、若手教室員の研究奨励に使わせていただきます。まことに有難うございました。



幼少時代の岩原先生（上より二段目、左から2人目が岩原先生。上より二段目右端は小林真杉先生）



新婚当初の岩原先生御夫妻



昭和10年6月7日 外科整形外科開局記念祭  
(前列右より3人目)



昭和22年10月、ポリクリの学生とともに  
(前列右から2人目が岩原先生、  
隣りは野口先生、後列左端は菅野先生)

箱根療養所で開かれた  
東日本臨床整形外科学会で  
小柴先生と(昭和31年)





藤田学園保健衛生大学にて  
吉沢先生と



LondonでのJoint Meetingで  
Dr. Smilieを囲んで  
(左より、石井、岩原、Smilie、  
伊勢亀の各先生、昭和48年)



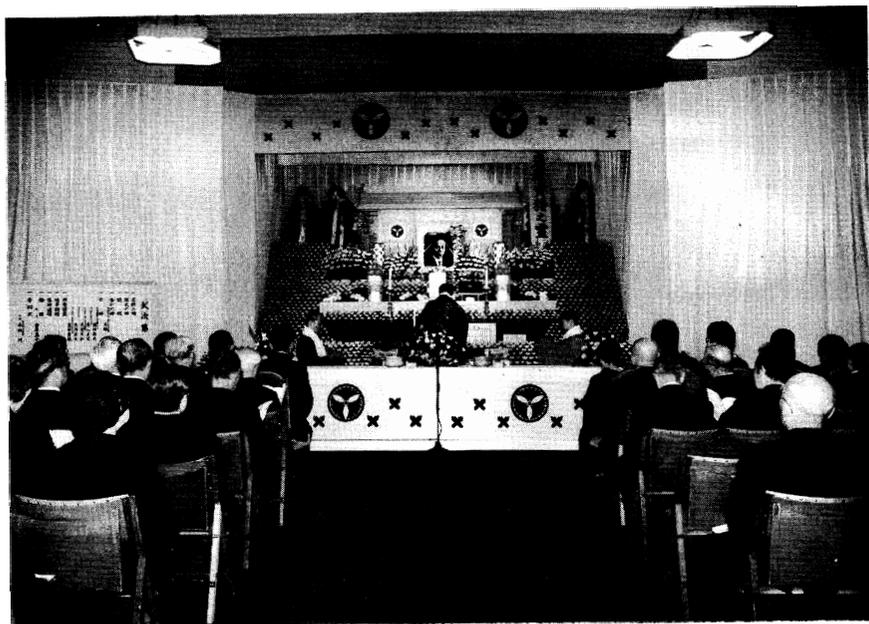
オーストラリア・シドニー大学の  
Taylor教授の自宅にて（昭和44年）



オーストラリア訪問の際Dwyer先生と共に  
ラグビーを観戦される岩原先生御夫妻(昭和44年)



阿久津先生の御自宅を御訪問された  
岩原先生御夫妻(昭和54年11月)



教室葬（昭和63年4月16日，北里記念講堂）



教室葬で御挨拶される岩原名誉教授夫人

# 特集 岩原教授のおもいで

と願うのは少々贅沢が過ぎるかも知れない。

## 痙攣性斜頸手術の想出

小泉 次郎 (11)

前田先生の御指令で、岩原助教應召御不在のため、当整形外科教室に於て、第二回目の痙攣性斜頸の手術執刀者は小泉に、と云う運びになった。

さてとなつて、関係文献の熟読は勿論の事だが、中でも岩原先生の手術所見は真に秀逸で、その描写に至つては微に入り細を穿ち、さながら手術の進行を手執り足執り眼前に髣髴たらしめる感があつた。

終始慎重に助手を務め或は又細大漏らさず仔細に見学した人達は勿論の事、手術所見熟読の者も皆百戦練磨、熟達士の免許を頂戴したかの如き感にうたれたに相違ない。

おかげ様で手術も順調に進み、その結果も良好な経過をとり軽快退院の運びになった。

出来得れば当時外科医局に在籍された斉藤博士撮影の岩原教授執刀の第一回目の一六mm映画を見せて戴きたい

## 上下を脱いだ岩原教授

小柴 清定 (14)

吾々一四回生は入局が昭和一一年である。慶應では卒業五〇年を過ぎると、毎年塾長招待の会が昔懐かしい三田の山の上である。

昨日、二回目の会が開かれ、慶應は藤沢市に九〇、〇〇坪の新学園を計画し、ニューヨークにも、在外邦人子弟目標の高校も造られることを聞き、世界に向け発展する母校に心強さを覚えた。

整形外科の発展に故岩原教授が貢献されたことは諸先生方が述べられている。私は表題の岩原先生の想出を、述べて見よう。

入局時は、前田和三郎教授、岩原助教、畠中、野崎、講師、竜野、伊藤（原）、小泉、大内、蓮江（応召中欠員）の所に一三回生の左奈田先生と吾々（富田、加納、西平、小柴）の五名が加わつた。当時は東京の大学で整形外科講座があつたのが慶應の外には東大、慈大、日医

大の三校であった。

東京の整形外科集談会が各校持廻り幹事で開かれて居た。慶應当番の時、戦災で消滅した旧本館内階段教室で行われた。約一〇〇名収容の教室の前列から三〜四段で全員が席に着けた。他の三校の整形外科教室員も概ね一〇余名位だったろうと想像出来る。

戦災で消失した旧本館の手術室の前に整形外科教授室があり、その隣に「標本室」があった。この部屋に岩原先生、伊藤、小泉、大内先輩の席が設けられていた。畠中、野崎講師は理学室の片隅を仮仕切りして仕事をされていた。

左奈田、西平、小柴の三名が前記「標本室」に配属された。従って私は入局早々から岩原先生の膝下で過ごした。「助教教授」と云うより「兄貴」のような感じであった。

一日の診療が終り、「標本室」に戻る。風呂に入り一服して、それから私の仕事に取掛る。風呂上りの岩原先生は今でも目を閉じると見えるようである。机の上にホテツた両足を挙げ、頭にタオルを乗せて窓からの涼風を楽しんで居られる。熱い番茶をフーフー音を立てながら美味しそうに飲む先生の横顔は「恵比寿様」のような笑い顔である。

昼食時になると、先生お好みの別館屋上喫茶室に時々お供した。然しパンとコーヒーでは腹が減る。終わってから食堂に廻ったが、食べたいメニューが売切れになったことによく出会った。

箱根療養所々長を兼任されて居られた頃の思い出である。吾々一四回生クラス会が伊豆であった帰途、故富田忠良君と二人で岩原先生を訪れた。

秋晴れの汗ばむ位で、空の青さが目にしみる日であった。門を入り玄關に向かう。植木屋でも入っているらしく、樹の上でチャキチャキの音がしている。突然背中から声が掛る。

「富田君、小柴君よう見えてくれたね」垣根際の庭樹の上に首にタオルを巻き仕事着の姿が岩原先生の植木屋だった。手慣れた手つきでズボンの土をポンポンとはたきながら、

「さあ、先に入って呉れ給い。オーイ富田君、小柴君が見えたよ。」  
と奥様に声を掛けて下さる。

想い出すままに上下を脱いだ岩原先生を拙文で書いて見た。

古いアルバムから昔の先生の姿を偲んで見ることにしよう。箱根療養所で東日本臨床整形が開かれたことが

あった。

昭和三十一年頃だったと思う。先生も私もこんなに若い頃もあった。懐かしく眺めている此頃である。

## 独立前後の整形外科の思い出

左奈田 幸夫 (13)

筆者は一九三六年から整形外科前田和三郎主任教授の指導を受けるようになった。岩原助教は脊椎外科の宿題報告を主導され、教室の先輩はこれに関連する論文を続々と発表し、そのオリジナリティは高く評価された。フレッシュマン教育も岩原先生が中心となって指導され、鉤の持ち方からオリエンテーションを受けた。

当時整形は茂木外科教室と医局が合同しており、外科的基本技術を修得しつつ整形外科を専攻するという未分化の時代であった。また医療界では、担当する専門診療科の決まらない医療医療も存在していたが、教室では未分化の医療や敬遠しがちのケア分野を整形外科に接続した学問分野「discipline」を導入して領域を広げようとした時代でもあった。これが骨筋関節疾患から運動器

の発生、成長、老化に亘る幅広い分野を専門領域とする診療科が誕生する遠因となって、職域も拡大する結果となったのである。

これが人の健康を最優先する健康福祉国家をめざすわが国で、整形外科専門医の必要性が強調され長寿社会の健康に寄与する成果をもたらした。

### 当時の思い出

今は改築されていないが、標本室と称する部屋が前田教授室の隣りにあって、ここを整形の医局として使用し、岩原先生をはじめ約七人が机を並べていた。前田教授の病棟回診日には、朝八時三〇分外科医局に集合待機して、教授が「回診」と声をかけると岩原先生はじめ全員が病棟に同行したのである。またフレッシュマンは外来診療にも参加し予診履歴とり、所見記録、ムンテラと手分けして分担したのである。

外来での一こま・田舎からであろう一七〜一八才の美しい娘さんが母親に付添われて来診した。主訴は知覚異常だったと思うが、先生から鼻粘液の染色を指示され、試験室で鏡見してみると立派なハンセン病菌が証明された。

この真実告知には困ったが、この母娘が待合室で泣きくずれた時どう慰めたらよいか全人的ケアサービスの中

における対人間サービスキルの重要性を味わった一こまでであった。

外科へ派遣中の一こま…我われは年に数ヵ月外科で指導を受けるが同時に外科からも同様に研修に参加する規程があった。糖尿病の外科患者を担当した時であった。やはり回診は週一回であるが、毎日の尿糖検査を指示されたので、それが検査室に尿試験管が一週間分林立する破目になるのである。

この検査はニールランデル法によって行われるのでその刺戟臭には涙はでるし、泣きの涙とはこのことであった。新人はテスト、染色鏡検など自ら行い体験するのが研修医の原則となっており重要視されていたのである。

#### 医局生活とその後

岩原先生の指導は普通土佐人にみられる代表的人物であったが、筆者らと同じ皆兄弟弟子である。雑談の中にも硬さを和らげてくれるのが先輩諸公の好意であった。筆者は、島田先生担当の宿題報告淋疾性関節炎の手伝いを命ぜられ、症例情報収集に分担努力し、お陰で島田先生は立派な学会報告も達成された。

一九三八年頃から支那事変は満州派遣軍の暴走から事変は拡大の一途を辿り、部隊増員に拍車がかかり、その

結果戦傷者及びその後遺症即ち傷痍軍人が増加し、戦地と内地ともに軍医の不足という事態がおきたのである。

医師には短期軍医という制度があり、その予備役軍医も不足し、軍医予備員という臨時召集制度ができて我われもこれに召集させられたのである。従って次第に医局員が召集されて教育関連病院などへの医師不足が起り、筆者も牛込や三田の済生会病院へ派遣された。

岩原先生も我われも次々と軍服を着るようになり、先生は東京第三陸軍病院（現国立相模原病院）へ、私は若く健康だったせいか上海派遣軍に配属され、漢口作戦にも参加し三人の連隊長が筆者の傍で戦死された。

その後戦傷者の増加もあり、厚生省に外郭団体として軍事保護院ができて、傷兵の福祉厚生に、リハビリテーションに力を入れるようになった。その後岩原先生は国立箱根療養所長となり、整形外科教授を兼職され、私は国立塩原温泉病院長として、温泉治療が整形外科の治療効果をどれだけ増幅し成果をあげるかの研究に参加したのである。

## 岩原先生の思い出

白田正雄 (9)

昭和五年、大学四年のポリクリ。当時整形外科は前田和二郎先生が着任されて三年目、整形外科診察室、教授室、図書室等々は旧病院庁舎の後に新設されて間もない頃である。そこに軍隊から帰ったばかりで、ポーズ頭でテレビで見た青年坂本竜馬を思わせる、闘志満々「いき」のいい若い助手が居った。これが若き日の岩原寅猪先生である。

岩原先生は土佐高知の産。

私はかつて二回高知桂浜で、遠く海の彼方を睨む坂本竜馬像を拝した。

又私が昭和一八年度第二艦隊旗艦愛宕の軍医長時代一年間仕えた艦長が高知藩の維新の志士中岡慎太郎に縁のあると云う中岡信喜大佐(後少将)だった。そのなされる行動には精神の籠りが感じられ、岩原先生と一脈相通ずるところがあり、この三者に於いて「土佐精神」の真髓が感得される。

因みに、中岡艦長は昭和一六年一二月のパールハーバー攻撃に、潜水隊司令として例の特攻隊員を連れて行

き、潜望鏡で状況観察中、防潜網に引っかかり、二九時間苦心の末、奇跡的にはづれ、帰還された勇士である。

昭和一八年度愛宕艦長に補せられ、一八年一月ラバウル大航空戦に於いて、艦橋の屋根の上にて対空戦指揮中腹部に受傷、治療の甲斐なく戦死された。

私はその間の私との問答や語られた言葉を中心に「艦長の最後」を発表した。ところがこの「艦長の最後」が白田正雄、佐藤裕(分隊長、塾員)の名のもとに、艦長の軍装と共に、海軍兵学校の東郷記念館に陳列され、面目をほどこした。

我々九回生は、二年の時整形外科は前田友助先生が担当されたが、三年の時前田和二郎先生と交代された。はじめは病院の階段講堂で講義されたが、後には病院玄関上の平面講堂だった。昭和六年卒業。

私は徴兵検査で甲種合格で、徴集延期中だったので、昭和六年九月海軍に入った。処がその九月二十七日満州事変が勃発。更に翌七月一月には上海事変と飛火した。正にその火中に入った。更にその翌年は連合艦隊で鍛えられる等々で海軍に残留のことになった。

それから八年、昭和一五年三月、私は海軍軍医学校選科学生を命ぜられ、母校慶大の大学院学生として整形外科を学ぶべく内命をうけた。そしてある日、久しぶり

に整形外科教室に前田和二郎先生を訪れた。潑刺たる青年教授も八年を経て、前髪中央から半分だけ白髪となられ、貫祿に威圧を感じた。かくてその四月から教室員として御指導をうけた次第である。

当時岩原先生は陸軍に応召され、第一陸軍病院で脊髄損傷患者を担当されていたが、時々教室にこられて、海軍から派遣された私に非常に期待され、何かと御指導、御助言を賜った。

岩原先生は陸軍病院時代しばしば天児少尉について話された。そして其の後も親交をつづけられ生涯の親友であられた。天児民和先生は目下日本整形外科学会の最長老として活躍され、今回の第六十二回日本整形外科学会にも出席されお顔を拝した。

その頃野崎寛三君は都立大久保病院、伊藤原、大内正夫、左奈田幸夫、小柴清定、富田忠良、西新助等々の諸君は陸軍に応召され、教室では前田教授のもので、小泉次郎、講師を中心に森田正朗、蓮江信行外若手の諸君が留守番をして居り、時々教室で歓迎会、送別会、壮行会等々いろいろの会が催されて、岩原中尉をはじめ軍服姿のお歴々が集られ、盛会を極めた。当時は教室で「脊髄外科」の宿題を担当された後のこととて、各々の諸君は何れもその一部を担当し研究された誇をもって、活気に

あふれ、あれやこれや、さまざまな怪(?) 気焰をうかがったものである。

やがて私は前田教授から「脊髄硬膜」のテーマを頂いた。宿題担当当時に使われたホルマリン漬の脊椎が二〇〜三〇本あった。これに私が新に病理学教室にお願いして、回してもらった数体の屍体から脊椎だけを取り出した。同じ屍体でも脊椎のないものは、いやはや何と表現していいか、恐らくこの世の中の「グロの絶頂」と思った。これも貴重な医学の研究の為と手を合わせた。

或日我々は横浜医大での整形外科集談会への途中、前田先生が「演説をする時は、その原稿はすぐ印刷に出せるようにしておくことだね」と申された。科学の厳肅を強く教えられた。

昭和一六年新潟大学における第一六回整形外科学会。それは小さい階段講堂で、会員四、五〇名だったように思うが、そこで今迄の研究発表の機会を与えられた。ついこの間、古びた整形外科学会雑誌に当時の記録を発見し、感無量だった。

昭和一六年二月、日米関係は悪化の一路をたどった。そして一月二〇日附で私は呉海軍病院部に補せられ、同院の整形外科を受持った。出発に先立って送別会を開いて頂いたが、その際は私が海軍の水交社に御案内して

行うことになった。歴代海軍大臣の肖像がかかけられた食堂で、岩原中尉以下の皆さんと思う存分歓談出来て、感一入だった。

私の慶大大学院の予定は一七年三月迄だった。然るに一月二〇日附で呉海軍病院行を命ぜられたので、「いよいよ戦争が始まるわい」と直感した。果たせる哉、一月八日の開戦となった。後の調べで連合艦隊の千島カムラン湾集結が一月二三日、出撃が一月二六日、そして「新高山上げ」の発令が二月二日。かくて二月八日にパールハーバー攻撃となった次第である。

呉海軍病院は我が国三軍港（横須賀、呉、佐世保）中一番安全地帯であり、大戦争後は連合艦隊がいつも帰投した。早速一二月の暮にはハワイの戦傷者、翌年五月には珊瑚海海戦の、そして六月にはミッドウエー、更に七月には第一ソロモン海戦等々の六七百名のなまなましい戦傷者を収容処理した。その間山本連合艦隊司令長官が二度患者慰問に来院され、説明役をつとめた。特に多数の骨折患者に前田式牽引装置を使用していたので特にその点を強調して申し上げておいた。ミッドウエー患者、それは特に極秘患者だった。その時丁度陸軍の西新助軍医大尉（後の東邦医大教授）が私の病室を訪ねられたが、御案内出来なかった。今でも恐縮に思っている。

戦傷者治療のかたわら、学位論文をまとめた。その跡始末について、岩原助教に大変御厄介になった。論文の通過したのは昭和一八年愛宕時代であるが、その間、昭和一七年八月には、ミッドウエー海戦の戦後新編成された機動部の三番艦空母龍驤軍医長に転出したが、呉軍港出撃後九日目八月二十四日の第二ソロモン海戦で爆沈された。つづいて一八年度には、第二艦隊旗艦愛宕の軍医長になり、その一月前記のラバウル大航空戦にぶつかった次第である。論文通過の報を受けたのはこの直前である。あらためて前田、岩原両先生に感謝を捧げたい。

その後間もなく再び呉海軍病院に戻ったが、池田亀夫教授が医学部を卒業し、新進軍医中尉として呉病院に着任したのはこの頃である。

昭和二〇年三月以降、呉軍港も敵機の空襲を受けるようになったので、急遽鳥取県の三朝温泉旅館を接收して一、二〇〇ベットの呉海軍病院分院を開設し、私が分院長として移った。そしてそこで八月一五日の終戦を迎えた。

戦後呉海軍病院は広島県大竹の海軍潜水学校跡に移転を余儀なくされ、昭和二〇年二月、国立大竹病院として再出発した。

かくて多数の海外の戦場に残されていた戦傷病兵の処

理にあたったが、その間、副院長格で病院の整理、整頓も大変だった。兎も角一応国立病院としての体勢も整ってきた。

かくて、私は昭和二十二年厚生技官を辞し、二十三年小諸にて開業した。

その頃岩原先生は整形外科教授となられ、陸軍病院時代の脊髄損傷患者を収容した箱根療養所長を兼務された。

昭和二十四年頃と思う。療養所長会議の途次、私の家を訪ねて下さった。海軍病院時代の戦傷者のX線写真を中心に、いろいろ御教示を受け、御高説を拝聴したが、お帰りの時、「これは日本一の病院だ」と申された。

戦後のドサクサ時代、生地に近い小諸に開業場所を探したところ、ぶつかつたのがこの家である。大きい茅ぶきの元家老屋敷。間数はあるが、中廊下のない昔流の間取り、左右に仲間が居たという長屋つきの門があった。チャンバラ映画に出て来るあの門だ。ここで当時の最新医療(?)をやるうというのである。成程「日本一」であろう。

思えば、その前年に熊ノ平事件が起こった。碓氷峠の熊ノ平駅で土砂崩があつて、二名死亡、重傷者十九名が軽井沢病院に収容された。そこへ我々小諸医師会員が召集され、応急手当をした。時こそ来たれりと、海軍仕込

みで大いに腕をふるった。大腿骨折その他の重症者が八名あった。当時軽井沢病院は夏だけで、内科の院長只一人。さてあとどうするかは、我々の権限外で、そのまま帰った。旭が翌日、MDの救急車が古色蒼然たる私の家の門前にとまった。件の患者をつれて来たのである。青い目の兵隊さん、車から降りて目をパチクリさせて、あたりを見回していた。日本の感想や如何と思わず、くすぐったかった。

国鉄職員の負傷者と云うことで、一高の先輩の加賀山鉄道院総裁が、この門長屋の病室に見舞に来られたのもその後間もない頃である。

昭和二十九年、新築の病棟が出来上り、現在の場所に移って一応病院らしく態勢が整った。この頃から更生、育成医療法が発足したが、この指定病院は長野県では、たまたま同窓の井上雅夫君が勤めていた関係で、国立松本病院だけで、これが最初である。信州大学には未だ整形外科は無かった。

長野県で整形外科を標榜して開業したのは私が最初である。従つて昭和二十三年開業以来「整形外科とは何か」のPRが大変だった。病棟が出来たのを機会に、岩原先生のお勧めに従つて、更生育成医療機関の申請をした。審査会にて東大教授の高木会長の付添として出席して居

た佐藤孝三君（日大教授、当時東大助教、元呉海軍病院副官）の証言もあって、無事通過したと後に御通知を受けて感激した。

昭和三十六年岩原先生は慶応病院長に就任された。当時は病院再興の重大時期であり、大変な役目であった。大内君が「男と生れて慶応に学び、教授となり、病院長となる。これを男子の本懐……」とずばり祝辞を述べられたのが印象にのこる。負け戦でも艦隊司令長官を誰かがせねばならない。その心境を読んだことがあって、之に関連して何か祝辞を申し上げ、万歳三唱の音頭をとったのが記憶にのこる。

世の中で、意地のわるいものは①天気、②患者、そして③病気である。切角いい計画で予定していた行事がとかく天気が悪く実行不能になる。急用で又すぐ出掛けようとして居る時に急患が来る。これでやっと安泰に生計が立つようになったと思っている時急に病気になる。

私は先に病棟の新築が出来、さてこれからという開業して一〇年目、昭和三十二年頃から両手が荒れて来た。

結局、先の戦争中、呉海軍病院時代、骨折治療や弾丸、弾片の摘出手術の際X線を受ける機会が多かった為とわかった。そして、昭和三十四年遂に入院手術を要することになって、早速岩原先生に相談した。先ずマッサージ

師のお世話と留守番に医局員の派遣をお願いした。一週間位と軽く思っていたところ、「君そんなことじゃだめだよ」と、結局二週間つづ四名の方にお世話になった。その後も、こんな風で三十七年、三十九年、四十九年と三回にわたってお世話になった。いつも「見殺しにはしないよ」と励まされ、地獄で仏に逢った思いである。

この間、第一回の松井明君から、今を時めく平林冽君、花岡英弥君、内西兼一郎君等々のお歴々、十九名が派遣名簿に名を連ねておられる。思えば豪勢な御後援を頂いて恐縮すると共に、岩原先生の御人徳のもと、教室各位の純真なる御好意に対し感謝感激に堪えない次第であります。

前田先生、岩原先生共に御他界された今、ここに往時をしのび、当時を記録し、更めて御礼申し上げます。

### 岩原先生のごとく

永井 隆 (22)

私が岩原先生を知ったのは整形外科の各論の講義を聞くようになってからである。おそらく本科（今の専門課

程)二年の時、昭和一六年であったと記憶する。当時は戦時中で軍国主義がはなやかな時代であり、我々学生は制服制帽を着用して登校し、先生方はカーキ色の国民服に戦闘帽をかぶって病院に来られるのが普通であった。岩原先生も同じであり、陸軍病院にも行って居られたので、時には陸軍の軍服で来られることがあったが、それが先生には良くお似合いになった。講義は黒板に病名や症状などを簡条書きに書かれ、几帳面に口述されるだけで、決して面白いものではなかった。必ず講義中に「日本一のこの岩原が……」、「日本一は世界一である……」という言葉が出たものである。講義の出欠はとらなかつたので、講義によると十人足らずの学生しか出席しないようなこともあったが、先生の講義にはみんな良く出席したのは、そのような先生が学生に何となく魅力があったのであろう。当時は軍事教練に力が入れられており、時に信濃町から日吉までの行軍や徒競走(マラソン)があったが、先生はよくその先頭に立って皆を引っばって行かれたものである。

私は昭和一八年九月に卒業して一〇月に陸軍軍医として入隊し、二十一年二月に復員して教室に戻ったのであるが、その頃、前田教授はまだ復員されて居らず、先輩の先生方も戻って居られなかったので、教室員は二十三

回生の泉田重雄君、上牧恭一君、木城卓二君、野間清邦君、二十四回生の金井司郎君、田中一雄君、山口義臣君、それに岡部千賀子さん(現在野間夫人)などが主力であり、その中に私も仲間入りしたわけである。先生が岡部さんをととても可愛がられたのは言うまでもない。また先生は東京女子医専(今の東京女子医大)に週一回講義に行かれたが、その時はここにこしてお出掛けになり、帰って来られると今日はどうこうであったという話をさされ、とても楽しそうであった。

当時岩原先生は蓮田の埼玉国立療養所(今の東埼玉病院)の官舎にお住まいで、食料難の時代であったので、さつまいもを沢山作って居られた。収穫期に「いも会」があり、官舎まで皆で出掛けて行ったが、蓮田駅から徒歩一時間位、帰りは列車の時間に合うように駅までかけ足で来たものである。先生は毎日その距離を歩いて病院に通って居られたのであるが、お疲れの影も見られなかった。

前田先生が復員されて間もなく、外科教授として転科されて、昭和二十一年九月に教授になられたわけであるが、国立箱根療養所(現在の箱根病院)の所長を兼任されていた。所長官舎にお住まいになるようになってから、さつまいもを食べる「いも会」はなくなったが、「いも

会」はその後も引続いて行われ、先生がご病気で倒れるまで、先生ご夫妻をお招きして夕食を共にしたり、先生のお宅にお呼ばれして奥様お手製のご馳走を頂いたりしたことであり、先生は言いたい放題の悪童どものこの集まりを大変に楽しみにしておられた。

箱根にうつられてから、先生は毎年、大量の沢庵を漬けられた。ご自慢の沢庵で療養所の入所患者にもご馳走したというお話であるから、大変な量であったことがうかがえる。沢庵が漬かった頃にお宅にお伺いすると、おみやげに下さった。奥様が嚴重に嚴重にも包んで下さるのであるが、電車の乗るとぶんぶんと臭って来るのには閉口したものである。

箱根から世田谷の家に移られてからは、植木の手入れとバラ作りに精を出されたことは多くの方がご存知のことと思う。先生は「Anno」を自認され、日曜日の午後などにお尋ねしても、日が落ちかけてその日の予定の仕事が終わるまでは遠くからお仕事振りを拝見しているのがあった。奥様は気が気でないご様子なので、そういうことが分かってからは、夜にお尋ねするようにしたものである。軍袴（陸軍の演習用ズボン）をはかれ、足袋はだしの百姓姿は先生の得意のもので、十六mm映画に残っているはずである。

私が教室に在籍したのは昭和二十七年六月に東京医大に赴任するまでの五年半足らずであった。先生の総回診はあっさりしたもので、患者についてどうしなさい、こうしなさいというような事は殆ど言われなかった。時折、その患者の疾患について、診断の根拠はこうあるべきであるとか、鑑別診断のポイントはこういう点であるとか言われた。しかもそれは臨床症状についてに限られており、補助診断や治療についてはあまり触れられることはなかった。これはそれらはもう分り切ったことであり、知っているのが当り前であるという事のようであった。

事実、うっかり質問をすると「そんな事は知っていると申っていた」と言われるだけであった。したがって、自分が入院させた患者については、回診を待たなくても手術も行ってしまい、手術の翌日か回診の時に、手術をしてこういう所見でありましたと報告すれば良かった。このような事から、自分で勉強し、自分で判断し、自分で責任をもって何事でも積極的に前進しなさいというのが先生の教育方針であったのであろうことが、折にふれて先生が「独立自尊」を口に出された事と相まって伺える。私は先生の総回診の時には自分の受持の患者の時だけでなく、なるべく先生のそばにくっついていて、先生の言われることを聞くようにした。先生が依頼された医学

雑誌の原稿を書くようにいわれたことが何回かある。その時には回診の時に先生の口から聞き覚えた事柄を、それが相当する箇所に書いて提出した。先生は「君は僕が書きたいと思っていることを書く」と不思議そうな顔をされたけれども、その理由はこのような所にある。

先生の外来診察の時には多くの教室員が傍で見学しているところ機嫌が良い。先生は初診の患者を診察すると、時々「診断は？」と聞かれる。答がご自分の診断と当てていると、例の大声で「ご名答！」と叫ばれてますますここにこされるが、患者の方はびっくりしてしまうようなことがあった。そして外来診察が一番ためになつて面白いと常々言つて居られた。私もそうありたいと願つて、今でも外来診察は楽しくするように心掛けています。

私が東京医大に赴任してから、薬理学の原教授から岩原先生は偉い先生だといふ次のような話を何十回と聞かされた。野崎教授は昭和二十年に東京医専(当時は医専)に教授として招かれて第二外科を担当したが、患者があまり来ないため、野崎先生はいや気がさして来たといふことで原教授が岩原先生に相談に行かれた。原教授は慶應医学部薬理学教室の阿部教授のお世話で学位をとられたといふ関係で行かれたといふことである。その時に岩原先生が第二外科にしておくからいけない。整形外科に

すれば良い。そうすれば必ず患者は多くなる。来なければ慶應病院の患者をどんどん送ると言われたというのである。東京医専は大学に昇格し、昭和二十四年に整形外科教室が開設され、野崎先生が教授となり、助教授として二十回生の井上雅夫君が赴任された。井上助教授が退職されたあと私が助教授として赴任したわけである。

その時に私の給料は慶應の講師のその三分の二位であった。私は独身であったから良かったが、野崎先生は経済的にかなり苦しいともらされていた。第三者に聞いたことであるが、その事を訴えられた岩原先生はご自分が頼まれたある病院の整形外科の顧問を野崎先生にゆづられたといふことであり、野崎先生はその病院の顧問を続けられていた。このような事があったので、野崎先生は長く教授をつとめられ、東京医大整形外科はその後の発展を見たのである。

私が知る範囲で岩原先生が最大限に喜ばれたのは、昭和二十四年の日本整形外科学会の宿題報告「脊髄損傷の後遺症と後療法」が前の年の評議員会で決まった時と、昭和二十五年の第二十四回日本整形外科学会の会長が決まった時である。それこそ童心にかえられたように喜ばれ、早速に主だった教室員を集めて、宿題報告についての計画、会長としての抱負などを話されたことである。

私は一教室員として宿題報告、日整会総会のお手伝いが出来たことを今でも幸せであったと思っている。

その総会の開会の辞か閉会の辞の中で、先生が「内外科に整形外科に似て非なるものあり、内は外科医、外は接骨師である」ということを言われたのを覚えていた。当時、日整会会員の中には多くの外科医がおり、評議員にも選ばれていた。当時、評議員は現在と異なり会長が委嘱していたのであるが、先生はご自分が会長の時に外科医の評議員を無くしてしまわれたのであり、正に先生ならではの大英断であったと思う。

これは私しか知らない事と思うが、先生が宿題報告を担当された頃、或る泌尿科医が脊髄損傷患者の泌尿科的研究を研究生となつて箱根療養所でしたいと先生に相談に来たことがある。その時私は何故か同席をおおせつかった。先生はその医師に色々質問され、その医師は初対面の教授と話しをするのであるから、暑い日でもあったので顔面に汗をかきかき、それこそ一生懸命に答えていた。その中、先生が署名して下さった論文の別冊を両手で筒状にまるめ出したのである。私にはその興奮状態が良く分かるのであるが、先生はいやな顔をされているのがありありと分かった。その医師が帰ると先生は即座に私に、「テーマは色々あるけれども、貴重な論文

を粗末にあつかうような医者は駄目だ」とおっしゃった。その後、その医師は研究生として採用されることはなかったのである。

先生が昭和四十一年に教授を退職されて国立村山療養所（今の国立療養所村山病院）所長になられたあと、お目にかかった時に何回もお聞きしたことは、教授をやめた今、さびしい事は学生の講義が出来ないことであるということであつた。先生は学生の教育についても非常に熱心であられた事がうかがえる。そう言えば、私が学生の時の先生のポリクリは学生に次々と質問され、またクルズス是他の先生より時間が長く、それでいて先生は楽しそうに話しをされた。

ずっと後のことになるが、先生がたしか喜寿を迎えられた時に、例の「いも会」でお祝いの会食をしようという事になったのであるが、どうせやるなら、なるべく多くの人に声をかけようということになり、先生に学位論文の指導を受けた人達に呼びかけようと勝手に決めてしまった。早速に田中君などが会場（たしか赤坂東急ホテル）の手配をし、発起人一同ということで通知を出したわけである。当日は私たちの予想を上まわつて殆どの人が遠くからも出席され、会場が狭くなり先生ご夫妻にも出席された方々にも大変にご迷惑をかけてしまうことに

なってしまった。お帰りに先生は私に「今日のご馳走を一口も食べられなかった。こんなに大勢来てくれて、一人一人、全部の人と話すことが出来た。それが何よりのご馳走であった」と話された。田中君が特別注文して作らせた超特大のケーキのおみやげを大事そうにかかえられてお帰りになられた。「いも会」の連中はこんなに先生に喜んで頂くことができて本当に良かったと胸をなでおろしたことである。ささやかな記念として、これも田中君が懇意にしている写真屋に当夜のスナップ写真を沢山とってもらい、アルバムとして後日、田中君等が先生にお届けした時も、先生は何よりのものだ大変に喜ばれたということである。

先生はご病気になる前から、あんなに勢いの良かった先生がと思われる位、非常に涙もろくなられたことは皆様がご承知の事であろう。私が東京医大を退職し、協力者を得て七年前に都内で初めての本格的リハビリテーション部門を持つ病院を開設した時に、出来上がった病院のパンフレットを持って慶應病院の病室に報告に行った時も、先生は私の手をとって「永井君しか出来ない事をやってくれた」とオイオイ泣かれて喜ばれたのが、つい此の間のように思える。先生はよく「自分の事をこわいと言う人は怠けている人だ。自分はやさしいのだ」と

いう意味のことを言われた。あの涙もろい先生が本当の先生のお姿であるような気がする。

思いつくままに筆を運んだが、先生の思い出はつきつぎと際限なく脳裏をかすめて行く。先生は今、安らかにおやすみになって居られることであろう。先生はスマートフォンでおしゃべりなKOボーイであると自認して居られた。話しの折にはめ言葉として「やっぱり慶應だ」「さすがKOボーイだ」という言葉をよく使われた。この言葉が出る時はご機嫌がすこぶる良かった。それにつけても整形外科教室が、そして慶應義塾がますます発展して行かなければならない。

## 思い出

泉 田 重 雄  
(23)

先生が逝かれても早一年半が過ぎようとしているとは思じ難い程に先生の印象は私にとっては鮮烈である。思い出の一、二を綴っておく。

## 手術と助手

私は随分先生の手術の助手を務めさせていたゞいた。

このことは私生涯の幸であつたと思つている。昭和三〇年代、略十年に亙つて先生が為された大きい手術の大半は私が第一助手をさせていたゞいたと云つてもよいかもしれない。国立小児病院赴任後も「大槽部脊髓腫瘍の手術をするから手伝いに来る様に」と云われて勇んで出掛けたこともあつた。

「手術の助手が十分務まる様ならば、その人はその手術が立派に出来る筈だ」とは先生が折りに触れて云われた詞であつた。

他でも書いたが「手術の助手は術者を助ける助手である。術者を助けてその技倆を十分に發揮させるのが任務であつて、假初にも術者の手術遂行の妨げになつてはならない」と言葉で教えて下さつた方は別に居られたが、実践の上で骨身に伝えて体得出来たのは先生の助手をさせただけのお陰である。どうしたら先生の助手が満足に務まるかだけを考えていたので自然にそうなつた。

当時先生がなされた手術の最も多かつたのは椎弓切除であつた。大きな手で、前田岩原式円鑿鉗子を握つてサツサと手早く手術を進められる。先生の手術にはリズムがあつた。その助手として、息を切らせて手術を追うこと

はじめ真実大変であつた。幾度かお相手を務めるうちに悟つたことは、この手術を餅搗に譬えれば術者と第一助手とは搗き手と返し手の関係で、返し手は搗き手のリズムを呑み込んで、これに合せて、手術をすゝめなければならぬと云うことであつた。杵を振上げて待つては、いられない。先生のリズムに合せて手術を進めるには、手術野を無血にしなければならぬ、それにはガーゼを適当な大きさ、硬さに纏めて手術野に入れて血を吸い取り、先生が次の所作のために構えられた瞬間を見計らつて、サツとガーゼを取除く、これが遅れてはリズムが乱れる。早過ぎれば血が湧いて来る。硬膜が見えて来たら、脊髓に外傷を与えない様に、鉗子の尖端の置き場所も考え、ガーゼを戻す力も微妙に調整しなければならぬ。

縫合も同じである。先生が前の糸を通し終り、新しい持針器をうけて構えられる迄に前の糸結びが終り新しい糸の糸尻を持っていなければならない。あの頃、私は糸結びの練習を再度行つた。片手結びはその頃からである。手術で先生に叱られた記憶はない。こんな風に私の助手を努めてくれた人は何人いたろうか。

## 総廻診

週に二回総廻診がある。整形外科の大名行列として有

名であった。他の受持の患者をも見て自分の肥にしように思えば斯うする他ない。私は後になってもこの方式を改めなかった、出発点ははじめ外来、後病棟廊下の入口であった。先駆するのは近くの病室に受持患者をもつ若い医局員である。行列の先頭は岩原先生、三、四番目に私が続く、助教は遙後方末尾に近い。

張切っておられたあの当時、総廻診毎に雷の二つや三つ落ちない方が稀であった。お叱りは勿論教育のためであり、尤至極のことであったが時には強烈なアクセサリーが付随する。「君はそれでも外科医か」とか「愚の骨頂」とか、「こんな姿にされて、お、可愛そうに、可愛そうに」と云った類である。

しかし先生とても神様ではない、時には誤解もあり、関係ない人が叱られる場合もあった。言訳で事態は必ずしも改善されない、病室内で時には困惑したこともあったが、患者に慰められたこともないではなかった。

そのうちに風向きが変わって来た、傍に居た私に雷が集中落下する様になった、避雷針である。或いは誰かが、いみしくも譬えていった「サンドバッグ」であったであらう。然し私は平気であった。叱責は肥料と考えていた。肥をたっぷり吸ったことになる。又少々叱られた位で、私がへこたれるものではないことは先生がよく御存知で

あった。つまりこれは先生と私との間の教室員の教育のための暗黙の馴合劇であったことに賢明な諸彦は疾に氣付いておられたことであらうが。

先生の思い出を綴るつもりが、「先生と私」の思い出になってしまったことをお許し願いたい、嗜好や世相についてはよく語られた先生であったが、仕事の面では行為で示されることが多かった。いきおい私の解説が多くなった次第である。

慎んで先生の御冥福をお祈りする。合掌  
(平成元年七月三一日)

### 岩原名誉教授追悼号に寄せて

浅葉義一 (23)

このたびふるさと「岩原名誉教授追悼号」の原稿の依頼がありました。岩原先生には大学を卒業してから四十年の長い間公私にわたり大変お世話になり、いろいろとご指導を受けておりますので、是非生前における思い出を率直に述べさせていただきます。先生のご冥福をお祈

りしたいと思いました。

実はふるさとの前号で「四十年を顧みて思うこと」と題して国立埼玉療養所（現国立療養所東埼玉病院、以下埼玉療養と略す）と国立塩原温泉病院の思い出をすでに述べましたので、今回は岩原先生ご自身のことを中心に述べさせていただきます、先生のお気持ちを少しでも教室の若い先生方にお伝えすることが出来ればと存じております。

岩原先生は埼玉療養が創設された当初の所長心得として同門の大内正夫先生と隣り合せの官舎に居られました。私は先生のご指示によって太平洋戦争が終結する一カ月前の昭和二十年七月はじめに埼玉療養へ参りました。時には両先生宅へお邪魔して夕食をご馳走になったり、また夜陰に乗じて近くの松林に入って大木を切り倒しては薪をつくり燃料としました。戦後間もない頃は想像に絶する食料難でしたので、我々官舎の住人達は埼玉療養から割当てられた土地を耕して、茄子、胡瓜、トマトをはじめ馬鈴薯や芋などを精出して作りました。当時うまかったのは白くて甘い芋（砂糖は配給でした）を例の松の薪でふかしく薄く切って天日に干した乾燥芋でした。この干芋を炭火で一才焼いて夜食に供しながら夜遅くまでいろいろと有益なお話を伺いました。

その頃のエピソードで今でもはっきりとよく覚えてい

ることは大内先生宅へ伺っている時のことです。夕方の薄暗い頃であったと思いますが、岩原先生の家から「コウチヨ」、「コウチヨ」と呼ぶ先生の大きな声が聞こえて参りました。私ははじめ「コウチヨ」という言葉の意味が全くわからずに先生が呼ばれているお声を注意して聴いておりました。何回となく呼ばれているのに返事がきこえてまいりません、或は家の中で聞こえなかったのかも知れませんが、このようなことが何度かありました。そしてある時忽然と「コウチヨ」というのは、先生の奥様のお名前である高千によをつけられて「高千よ」と呼ばれていたことがわかりました（もし間違いましたら私だけの推量です）。私はそれ以来、先生の「高千よ」というお声を思い出す度にそれまで全く感じなかった先生の奥様に対する愛情の深さを知ることが出来たのではないかとひそかに思っております。この直感は二十年后に私が塩原へ移りましてから、春の新緑・秋の紅葉の頃に先生ご夫妻が泊まりがけでお見えになられた時にも、折にふれてその片鱗を直視しましたので、多分間違いないものと存じます。

塩原へはいつも昼前に来られて午後は病院で診療の直接指導をお願い致し、夜は先生ご夫妻を囲んで医局の先生方一同と共に、夜の更けるのも忘れて教室の昔話や研

究のきびしさ・面白さなど、先生からでなければおきき出来ない興味深いお話を伺うことが出来ました。とくに若い医局の先生方とのお話し合いを好かれていたように感じました。翌日は観光地を巡り、弟子達が頑張っている病院や診療所へ立ち寄られては、楽しそうに会談されておりました。たしか先生が七十九才の五月の新緑の頃であったと思いますが、湯西川温泉へご案内いたしました。平家の落武者達の史跡になり、昼食に鹿の肉を囲炉の炭火で焼いていただきましたながら、「湯西川温泉は初めて来た。鹿の肉はうまい」と例の健啖ぶりを發揮して奥様と大変よろこんで下さいました。その後、病気で床に就かれてしまいましたので、湯西川温泉が栃木県での最後の観光となりました。

次に岩原先生のご業績に関連して述べさせていただきます。私が存じあげている事は先生のご業績全体のほんの一部ですが、それにもかかわらずこの機会には是非述べさせていただきたいとの気持ちで致しますので敢えて記録にとどめる次第です。

岩原先生は前田和三郎教授から教室を受け継がれましたが、その当時の我が国は苦悩に満ちた廃墟同然の状況であり、国民は心身共に虚脱状態で所謂「どん底生活」の連続でありました。このような戦後の極めて困難な時

代を乗り越えられて教室の研究・教育の再建という大切なお仕事に精進され、診療の充実・向上に努力されました。更に医学部内外においても先生持前の粉骨碎身の精神をもって、前進に次ぐ前進と頑張り通されたのでございます。そして教授在職中に今日の大教室へと発展する基盤となった診療・教育・研究のためのハードウェアとソフトウェアを開拓・整備されました。この他にも形成外科の新設やリハビリテーション科の前身であったリハビリテーション・センターの新設にも早期から力を注がれました。このような先生の貴重なご業績は、教室のみならず塾医学部の歴史において特筆に値する史実として銘記すべきではないかと存じます。整形外科教室の基本理念は前田教授の「信愛の精神」であることはいうまでもございませんが、岩原先生が遺されました開拓者精神、困苦欠乏にもめげずに積極的に時代に挑戦して行く強烈なエネルギーは、戦後における教室を一段も二段も発展させた原動力であったし、更に将来にわたっても若い教室員達によってしっかりと受け継いでほしい学問探究のエネルギーの源泉であると思います。

ここで岩原教授のあとを継がれました池田亀夫教授のことについて述べたいと存じます。池田先生が教授に就任された当初、栃木県下の教室関連病院整形外科医長の

先生方が相計りまして池田教授就任祝賀会を塩原温泉で開きました。その席上で池田教授は、「これからの教室の研究は教室関連病院の整形外科の二〇〇〇床を一丸としたシステムのもとに進めてゆきたい」とその抱負をご挨拶の開口一番に提示されました。新任早々に教授からこのような思い切った教室運営の方針を伺って、我々一同は頼もしく、やる気充分の気魄を強く感じた次第です。

しかし不幸にして丁度その当時に発生した我が国の大学学園紛争の厳しい渦流に遭遇して、この池田教授の貴重なご構想はついに陽の目を見ることなく過ぎ去り、まことに残念でなりませんでした。更に遺憾なことにこの大学紛争に巻き込まれた塾医学部は、創立以来の伝統であった初代医学部長北里柴三郎先生のヒューマンウェアに基づいた学問尊重の精神が長い間にわたり大きく揺らぎつつありました。このような不幸な状態から一日も早く立ち上がるために、医学部は教授会を中心に全教職員が渾身の努力を傾注して一步一步前進して現在に至っております。

さて矢部裕教授は就任されて早くも三年が経過いたしました。この辺で池田名誉教授のお言葉ではございませぬが、教室関連病院の整形外科ベット三〇〇〇床(泉田重雄教授の時代に一〇〇〇床増えたとのこと)を

一丸とした医学・医療の研究・教育システムを確立されますことを特に要望いたします。

すでに栄光の丘への道は開かれています。矢部教授を中心に教室関係者一同が力を合わせて教室並びに整形外科の進歩・発展を目指してまいります。ご健闘あらんことを祈念して筆を置きます。

### 想いでの数々

田 中 一 雄  
(24)

今、目をつぶって亡き岩原先生の事を回想すると、昭和二十年から四五五年、つまり終戦前後のことが思い出される。十九年から二十年にかけてB29の空襲が熾烈になるにつれて戦争は急速に終局に向かっていった。学部四年生だった我々は四六時中、スフ(ステープルファイバー)という今の化学繊維の原型)の教練服にゲートルを巻いていた。その上に白衣をまとうて最後に臨床実習にまわった所が整形外科だった。晩年の先生の顔は寂しかったが、当時の先生は「天下の岩原」(イワハラの「イワ」に強いアクセントがある)で誠に意気軒昂たるもの

だった。若い先生が皆応召し、ロートルの大先生ばかりの中では際だってお元気だった。それやこれやで何となく教室に出入りしていた。

私は海軍の委託学生であったが、終戦後するずると入局することになって、以来教えを受け曲がりなりにも整形外科（現在は整形内科）医として生活していられるのも先生のおかげと今更に感謝している。その頃のいろいろの想い出を脳裏に浮かぶままに断片的に書いてみる。

○ レントゲンフィルムと電気メスの脚。教室の大事なレントゲンフィルムを疎開しておこうというのは学生ながら納得出来たのでお手伝いすることになり、二三人でリュックサックに一杯つめて担いでいった。非常に重かった。ところが電気メスの脚には参った。本体を疎開しようとするのならわかるが、脚だけもっていったって何にもならないのに。でも仕方なかった。疎開でござるかえす上野だったか、日暮里だったかともかく混んで混んで苦労したのを覚えている。東北線蓮田の埼玉療養所へ持っていった筈だが結局どうなったんだろうか。

○ 昭和二十年四月十四日、海軍に入隊する仲間が信濃町の病院のご門の突き当たり、「い号」病棟の前に集まり、揃って戸塚の衛生学校（その頃はもう軍医学校とは云わなかった。）に行くことにしていたのだ。在京の者

だけだったので何人でもなかった。小泉信三塾長が送りに来て下さったように覚えている。元気のいい松枝張君が軍刀を抜いて張切っていた。彼も数年前に亡くなった。競走部において運動をしていた私には、海軍の訓練はつくはなかった。此処から岩原先生に書いた葉書に、お忙しいところご返事をもらって本当に感激したものだ。力強い、癖のある字で書かれてあった。惜しい事に戦後のごたごたで紛失してしまった。そういえば教室にお世話

話になってから見た先生のカルテに書く診断名は、さながら「南無妙法蓮華経」のひげ文字のドイツ語であった。○ 海軍の職業軍人になるつもりでいた私は卒業前に、入る教室を決めていなかった。舞鶴から帰って信濃町の駅をおりてみた母校の様子は惨憺たるものだった。木造の本館跡は瓦礫の原、別館と北里講堂がポツンと焼け残っている。一番先に顔を出したのが整形の岩原先生のところだった。何となく惹かれたのだった。何時とはなくお世話になることになった。整形外科は別館の中央廊下の中ほどの右側に診察室と研究室の二部屋、その左側に少し広い部屋が医局になっていた。いずれも神経科の病室で研究室以外は畳敷だった。患者さんは靴を脱いで裸足だ。先生は元氣よく診察なさっていた。お昼になると診察机の上をかたづけ向き合っけて弁当箱をあげる。

見るとはなしに目に入るのだが先生は何時も米の飯だった。私は多くの場合「いも」。奥さんが随分と御苦労なさっていたのだろう。服装はと言えばカーキ色の軍服まがいのもの、先生は陸軍の、私は海軍のだからしないものだった。

○ 午後は手術とギブスだった。（横文字ではGipsだ）が日本語になるとギブス、面白い。）手術室は北里講堂寄りの二階にあった。ギブスは大変だった。昼休みに医局の片隅でお粗末な電熱器の上に何処から買ってきたのか大きな支那鍋を乗せて風邪をひいたギブス粉を煎って湿気をととり、これまた患者さんが持って来た古い寝巻や蚊帳をきりつないで粉をまぶした。尤もほとんどは看護婦諸君がやったのだが、結構手伝ったものだ。さて巻く場所は何処だったか、結構手伝ったものだ。さて巻くのを覚えてる。日がたつにつれて次第に先輩が復員してくる。何時まで経っても新兵だ。おまけに次の年からは卒業後一年間インターンをやってから国家試験を受けることになった。ところが我々の次の二十五回生が入局しない。つまりまる二年お茶くみと黒板拭きをやったわけだ。別にどうってことはなかった。三四会館横の裏門？の真ん前の教会で臨時医專一回合の講義の時の黒板拭きと、信濃町から四谷塩町（今の四谷三丁目）、河田町迄

一面の焼け野原をとつとこ、とつとこ脚ばやの先生のお供して女子医專（現女子医大）に行つて黒板拭きをしたのが忘れられない。終戦直後、ほんの一時期の誰も経験しないささやかなお手伝いが無性に懐かしく思われる。

○ 当時先生は東北線蓮田の国立埼玉療養所の官舎に住んでおられた。ある時、朝教室へ行ったら、蓮田の駅に「さつまいも」が置いてあるからとつてきてくれとのこと託宣。先生、増えた医局員に食べさせようとされたのだと解釈して、（確かに当時まとめて「さつまいも」など手に入れることは大変だった。）同級の誰かととりに行つた。駅にあつたのか、お宅までとりに行つたのか定かではない。ともかく二人「やみや」よろしく混んだ電車で担いで帰つた。二時過ぎだった。やれやれと一息ついてると、冷たい先輩が洗つてふかせという。いい気なもんだ。併しふかし上つた「いも」を真ん中に車座になつて、ひとくさり先生のいも談義を聞いて皆で「うめえ、うめえ」その後が事件だった。余つた「いも」を乾燥薯にしようと薄く切つて干しておいたのが翌日無くなつてしまつたのだ。妙な空気が二三日つづいたがどうってことはなかった。つまらぬ歴史の一こま。

○ 戦後まもなく先生は箱根の国立箱根療養所の官舎に移られた。昭和二十四年の福岡の学会で「脊髄損傷」の

宿題報告をされることになり、大変ご苦労なさっておられた。我々は従来の吊り下げ式の表をやめて、現在のスライドのフィルムを長尺のまま幻灯機にかけ、先生の演説に合わせて一コマ一コマ回していくやりかたを採用した。

当時淀橋にあった六桜社に材料を持込んで長尺フィルムを作ってもらった。さあ、ハースルだ。その頃の幻灯機は今から見れば誠にチャチなもので、少し長く同じ所を写しているとフィルムが焼けてしまう。また電球も一時間以上つけていると切れやすいものだった。先生の演説は二時間近いものだったので、たしか同じフィルム、幻灯機も二台用意して相棒の誰れかと呼吸を合わせて電球をとりかえる練習などしたものだった。福岡の学会場では大成功だった。会場の者に流石に慶應だという印象を与えたものと自負した。確かにあの年、宿題報告は三校が担当した。我々以外にもう一校幻灯機を使っていたが、出来栄えは問題なく我々の方が上だった。もう一校は従来通りの吊り下げ式のものだった。先生もさぞ気分をよくされたことだろうと思う。それにしてもあの頃福岡迄何時間位かかったんだろう。

○ 昭和二十五年には先生が学大会を主催されることになった。焼け跡には新しい病院も出来、医局員も充実に慶應ならではの意気を示したものだ。学大会を機会に

日本全国県別の整形外科医の数を調査した。六二四人だったと記憶している。大きな掛け軸にして展示した。その後多くの大学で整形外科の教室が新設されるようになった。

○ 先生の宿題報告に関係して脊髄損傷患者の皮膚毛細血管の研究を命ぜられ、教えを乞うべく銀座の教文館ビルで開業されていた武見太郎先生に紹介状を書いて下さった。武見先生には顕微鏡をお借りしたほか、文献その他のいろいろの事をお教え頂いた。非常にお忙しかった先生に今もって感謝している。ある時、武見先生が岩原先生をお呼びしようといわれ、築地の料亭にお供する事になった。あるところにはあるもんだとびっくりする程の料理だった。おいしかった。それよりも、武見先生は酒もタバコもやらない、徳利にはサイダーを入れてあるのだそう。岩原先生もタバコはやらない。何のことはない私だけが両方、女中さんにすすめられるままにいい気になってあれもこれも頂いたが、両先生の前では参った、参った。武見先生も数年前他界された。

○ 箱根に根を下ろされた先生は閑をみては野菜造りを楽しまれていた。何しろ近所のお百姓の指導で懸命になってやられるのだからカボチャもキャベツでも大きい事。お宅に伺った医局の先生達はお土産に頂いてきたも

のだ。休みの日に畠仕事を楽しまれておられるときの訪問客には迷惑されていたようだ。ある時、お邪魔したら先輩のK先生がすでに来ていた。「もう二時間待っているんだよ」と笑っていた。奥さんだけが気をもんでいた。

○ その頃は論文の仕事で療養所の本館の二階の或る部屋に泊まることになった。何回目の時だったろうか、それとも初めての時だったろうか、何かで夜中に目を覚まして仰天した。シッケイの白壁に大きな「くも」、手のひらいっぱい二十cm位のがびたりと貼りついている。小さい電気をつけておいたのだ。目が馴れるに従って、あっちにも、こっちにも。恐ろしかった。なにしろ「くも」なんでもものはせいぜい5cm位より大きいものなんが見たこともない。恐怖の一夜を明かして、金井先生にもう駄目だと相談すると、あの「くも」はなにもしないという。しかし次の時からは彼のお宅に泊めてもらう事にした。そのため彼の亡きお母さんに大変お世話になったことは忘れられない。

○ 先生のお宅の前は西瓜畠になった。例によって完ぺきな出来るだけ大きなものを造るのに頑張っておられたようだ。ある時、この先生が大事に、大事にしていた西瓜畠にのら犬が入り込んだそうだ。見ていた先生、烈火の如く激怒してかたわらの棍棒を手にするや追っ掛け回

したそうだ。何しろ、虎と猪に追っ掛けられたらなら犬如きひとたまりもない。キャン、キャンと二声退散霧消したそうだ。以来、療養所の周囲にはのら犬は近づかなかったとか？それについても西瓜畠と隣り合わせになっていた金井先生の家の方に勢いよく延びてくる「西瓜のつる」が怖くて仕方ないとお母さんは冗談交じりに話しておられた。

○ 或る晴れた日曜日にお邪魔すると先輩のK先生が西瓜畠の縁で先生と立話していた。先生はもうこれ以上細くならない位目を細めてにこにこしている。無理もない、足もとには径三〇cm位の見事な西瓜が鎮座しているではないか。先生は大得意だったに違いない。そのうちにK先輩やおら屈んで八百屋の店先の西瓜を触るようなつもりで手を出そうとすると「触っちゃいかん」と大喝一声。皮の表面の「うぶ毛」が新鮮さをあらわしているのだそう。K先輩小声で「また怒られちゃった」。この西瓜ではなかったが、一度完熟したおいしいのをご馳走になった。

○ 金井先生の家に泊めてもらう。ある夜、先生の二人の娘さん、ちのさん、むつ子さん（宮本夫人）が先生のお宅でマージャンをしようという。妙な気持だったが始めることにした。何となくポンド、チーだとジャラジャ

ラやっているうちに、隣の部屋からウツフン、エヘンと先生の咳払いが耳に入る。あまりご機嫌のよくない時のサインだ。「ねえ、あの咳払いどうにかならない？」と上の娘さんのちのさん、「お父さん！変な声だささないでよ！」以後変な声は聞こえなかった。流石に天下の岩原先生も娘さんには甘かった。それにしても先生のお宅でマージャンしたのは後にも金井先生と私だけではないだろうか。

想い出されるままに書き綴ったが、何ぶん四〇年以上も前のことである。数字はもとより内容も不確かな点多く、また失礼な言辞もあったことと思う。ご寛恕願いたい。

最後に改めて亡き先生のご冥福をお祈りします。

## 岩原先生との出逢い

金井 司郎 (24)

若しもあの戦争がなかったら、私は恐らく岩原先生のお世話になることは無く、従って整形外科で開業することはなかったと思います。というのは、学生時代は整

形外科を勉強する意志が全く無く、関心は別のところにあったからです。終戦になって、何となく卒業し、卒業証書も自分の手に入らぬまま、さてどうしようか、ということになりました。

それ以前、学生の時にグループ(当時はグルッペといった)に分れて各科を廻って実習をした時、何のはずみか整形外科を二回も廻ることになったのです。山口義臣一人を除いては、整形外科が好きだという者は誰もいなかったと思うのですが、之が運命の別れ途というものでしょうか。整形外科を二度も実習するという、それだけでも岩原先生にとっては、御機嫌の良いなる材料だったと思うのです。その上、岩原先生が外来診察中、ヒョイと後ろを向いて学生に何か質問する。大体に於いてそんな質問に答えられる筈の無いのが普通だと思うのです。ところが我々のグルッペには優秀な者がいました。我々の仲間が誰と誰だったか、今は覚えてもいませんが、山口義臣と田中一雄と不肖の私が整形外科に入ったのです。岩原先生が診察中、後ろを向きそうになると、サッと山口を前に押し出す。そういう時の勘の鋭さは田中が一番です。それから、他の者は安心してのんびりしている。山口は学生の時から、将来は整形外科に行く決めていて、生意気にも当時の多分「神中整形外科」をよく読んでいた。

だから岩原先生が学生に質問する位のことは、ごく簡単  
に答えられたわけです。そうすると、岩原先生は単純だ  
から、単純でなくとも学生一人一人の顔を覚えているわ  
けはないので、いつも山口が答えているとは知らず、す  
べての学生が順番に答えたと思ひ込んでしまった。その  
結果、このグルッペは実に良く勉強をしておる、という  
印象に連がるわけで、我々のグルッペのすべての者が、  
整形外科は多分「A」だったと思うのです。尤も、入局  
してからは、間もなく、田中、金井、の化の皮は剥がれ  
ることになるわけです。しかし、岩原先生は、(多分多  
くの教授がそうだろうと思うのですが)「始め良ければ、  
すべて良し」で、始めにつまずくと、あとまでウダツが  
上がらないという現象は良く見られることで、私は今で  
も、山田、田中の両君に深く感謝をしている次第です。

何しろ、当時は前田和三郎先生がビルマに行っておら  
れ、岩原先生が大将で(中尉ではない)、医局員も少な  
く、尤も中には大内先生のようにオッカナイ、実にオッ  
カナイ先生もおられたが、学生の我々にも医局に入り込  
んで、赤犬をつかまえて喰べたとかいう伝説(多分に針  
小棒大に伝わっている)とか、教室の医療器械をリュッ  
クにつめて、当時の埼玉療養所に、超満員の列車のデッ  
キにぶら下がりながら疎開した話、これらは以前に、田

中らしい人物が「ふるさと」に書いてあるので省略。

さて終戦になって、どうしようか、と考えることは、  
先ず如何にして食べてゆくかということで、既に父を  
失っていた私は、僅かの貯えから毎月多分百円しか引出  
せず、良くも当時をどうやって凌いだか、今思ひ出して  
もゾツとするのです。何としてでも、又少しでも給料を  
得なければならぬ立場に追い込まれた私は、岩原先生  
のところへ相談に参りました。当時の私は、今の様に教  
授が雲の上の存在だとは全く考えず(当時先生は助教授  
でしたが)ごく気軽に、本当のところは切端つまった重  
い気持で、岩原先生のところへ参りました。先生は開口  
一番「整形外科に来れば、食べられる様にしてやるよ」。

その一言で、今の私が決まったのです。整形外科が好き  
だの、嫌いだのと言っていられない。それしか道がなかっ  
たのです。だから申しわけないことながら、整形外科が  
本当には好きになれずに、今日迄来てしまいました。岩  
原先生には全く申しわけないと思っております。しかし、  
整形外科のお陰で今日こうしていられることを思えば、  
岩原先生は私の今迄の人生の三分の二以上に影響を与え  
た存在です。私は岩原先生に大分口答えをしたり、ハン  
タイイなどと申したことがありましたが、本当は、心の  
底では、文字通り命の恩人と思っております。誰が何と

言おうとも。

## 岩原先生の追憶「寸題」

岡田 衛生 (26)

ふるさと六号（岩原教授退職記念号）の冒頭に、岩原先生の座右の銘としての「医たるもの」即ち

患者の信頼を得る事は、患者を把握する事につながる。よく患者を把握して医道をまっとうする事に歩みたい。

との教訓は日進月歩の現代の医療に携わる我々にとつて、特に心掛けるべき事でしょう。

切々と恩師の語るや春想う

同号の記事に、伊藤盛爾先生の「ハイキングの思い出」として、岩原先生の箱根金時山コースの健脚ぶりが興味深く書かれているが、私の教室入局時の、昭和二十四年十一月三日に、秋晴れの箱根外輪山コースにて医局主催のハイキングが催された。

故、久保義信医局長以下医局員十名、外来婦長、黒田嬢（当時）等看護婦五名も加わり、無人の箱根の山径を

踏破し、岩原先生が得意の「湯の街エレジー」を口づさみつつ、秋の風情を楽しみ、終着地は箱根療養所にて接待をうけた事が思い出となっている。

（古いアルバムより）

ふりむけば 別れし人の 勇姿かな

岩原先生が風祭の国立箱根療養所所長を兼任し、慶應（信濃町）へ通勤されていた昭和二十年代後半には、正月三日は「箱根参り」と称して医局員全員が正午に、風祭の岩原邸に参上して、先生御自慢の銘酒「サカタ錦」や、白菜株の清汁、山海の珍味で、痛飲、鯨飲、はては高歌放声に、夫々の得意芸を披露し、深夜に東京に帰宅したものであった。

特に、春日秀彦君、藤原由利夫君、故、飛驒清英君のかくし芸は語り伝えておきたいものの一つであろう。

花びらの 静かに流れ 初春惜しむ

昭和三十五年十月、岩原教授の指令にて、共済組合立川病院より、栃木県東北の大田原赤十字病院に一人医長で赴任し、開拓精神に燃えて孤軍奮闘中に、当時の県北は骨関節結核、脊椎カリエスの宝庫といわれ、岩原教授は隔月一回、遠路御来院し、回診、手術に御指導を給わ

り、次いで池田亀夫先生に引きつがれ多数の椎体病巣廓清固定術が行われた。

昭和四十年頃には、毎年五月上旬の新緑の頃になると、岩原先生御指名の西山運転手（国立塩原温泉病院）の運転で、新緑に萌える塩原溪谷の木の芽、若葉を採勝しに塩原訪問があり、県北の同窓生数名が宿泊先の和泉屋旅館に集まり、先生の植物学の講義を拝聴しながら、タラボの天麩羅、胡麻あえの御相伴にあづかった。

俳人松尾芭蕉の「おくの細道」のゆかりの地である、大田原、黒羽街道の歴史も岩原先生には来院時に興味を示された。

人の世のはかなさをみつめつつ、その現実の中で一期一会のさまざまな出会いを描く、人生の喜びも悲しみも、結局人と人との交流の中にこそある。

所詮「芭蕉の哲学」も現代の世相に通ずるものと信ずる。

環りなき 旅立ちにしてひさめふる

ふるさと（六〇周年記念号）に小生が記録した如く、昭和二十五年四月、北里講堂での岩原教授会長の整形外科学会総会で、会場内に在局三年以上の全国会員分布図には六二〇名の赤ピンの日の丸の表示がなされた。且講

演にスライド幻灯撮影が初めて取り上げられたという歴史的な事実がある。

約四〇年後の平成元年四月の現状は、会員数一萬四千余と報告され、各部門別学会にても夫々飛躍的進歩が示され、同時に慶大整形外科同窓会会員名簿も六〇〇台に成長した。

矢部教授の統率のもとに、慶大整形外科の伝統を守り、親和と団結により、各班の研究、学問の飛躍と我々同窓一門の成長を、岩原先生は地下にてみまもっておられる事でしょう。

平成と云う語 馴れしや六月立つ。

### 私の整形外科入局まで

菅野卓郎 (27)

今回、「ふるさと」を故岩原教授の追悼号にするということなので筆をとりました。

同窓の先輩、後輩の先生方はそれぞれの時代に教室で過され、岩原先生についての忘れることのできない思い出が数々あるうと思えます。私もまた私なりに、いろいろ

ろな場面での先生のお姿が臉に浮かんで参ります。ここではそのなかでもとくに私の生涯を決定したともいえる一時期についての回想を記してみたいと思います。すなわち私が整形外科医になったのはひとえに岩原先生がおられたからであります。

私どもは医学部三年の整形外科臨床講義を岩原先生から受けましたが、先生はたしか私どもの一年上のクラスから講義をなさったのだと思います。

先生の講義はまことに魅力的でした。非常に明解で、学生である私たちにとって整形外科というものがこんなに面白く、分かりやすいものかと思われました。定型の骨折の講義などは今でもその句調そのままが印象的に思い出されます。またその講義のなかで、「日本の岩原が……」という言葉がしばしば聞かれ、授業は当時戦災を免れた別館の臨床講堂で行われていましたが、先生は軍隊から帰ってこられたばかりで、まだ四十才代だったでしょう。階級章のない軍服を着て張り切っておられました。

その当時（昭和二十一、二年頃）はまだ大学でも整形外科の講座のないところがあちこちにあるほどで、一般には外科の一部と考えられるぐらい、整形外科に対する認識が低い時代でした。したがって学生である私も、と

くに整形外科関係の知人もなく、いわば特殊と考えられた整形外科に入局しようという考えはもっていませんでした。

学部四年のポリクリの一番最初に回ったのが整形でした。当時外来診療は別館一、二階のみという狭いところで全科が行われていましたが、整形は中央一階の真中あたりのところでした。今では想像もできないことですが、雨の日など患者の数も少なく診察の切れ目ができたため、その合間に先生のクルズスを聞いたことを覚えています。ポリクリの最初であったということもあり、みんな熱心に出席して先生の話を聞き、質問も致しました。それが先生のお気に召したようで、グルッペ全員が試問なしで整形外科をパスさせてもらい感激いたしました。こんなことは最初で最後のことなので、いまだに忘れることができます。

卒業後、インターンとして編成がすっかり変わり各科に配属になりましたが、私は今度も偶然に整形外科が最初の科でした。そのようなわけで、私にとって整形外科と岩原先生には特別に強い印象と愛着をもちました。しかし私は、漠然と外科系志望ということは考えてはいたものの、さきに申し上げたような時代のため、何となく外科の一部としての整形外科という考えがぬぐい切れない

いでいました。結局入局が決まらないままインターンの一年も終わりに近づき、最終的に専攻科目を決めなければならぬ時期になりました。

私には、学生およびインターンの期間に受けた岩原先生の整形外科の印象がきわめて強く、整形外科入局へと気持ち傾いておりました。しかし新たな心配は、整形外科をやるには体力が要るのではないかということでした。岩原先生はじめ当時の整形の先生方をみると皆体格のよい方ばかりでしたので、自分のような小柄で非力なものがやっていけるだろうか、ついに岩原先生のところにご相談に参りました。先生は、「きみ、整形外科に力が必要だよ。むしろ細かいところまで行きとどく緻密さの方が必要だよ。先代の東大教授、高木憲次先生をみてごらんさい。あのような体の方でも立派な整形外科医になっておられるんだよ。」と入局をすすめてくれました。私は高木先生という方がどんな方かその頃全く知りませんでした。そのような方にいわれるのであれば大丈夫だろうと今までの心配は吹きとんでしまい、ついに最終的なタイムリミットで整形外科入局を決めました。

今、現在私は整形外科医になったことに満足しており、ましてその道を開いて下さった岩原先生に感謝しております。

## 箱根の頃

今 井 銀四郎 (28)

私にとって岩原先生といえば国立箱根療養所——脊髄損傷とすぐ結びついてくる。岩原所長の箱根療養所に私が勤務したのは昭和三十年十月一日から昭和三十三年十二月十六日のわずか三年余りであったが、とてもそんな短い期間であったとは思えない。もっとも私は先生が去られた後も、昭和四十六年三月末日まで箱根療養所に勤務し、その間は勿論、その後も何かと脊髄損傷のことで先生の御指導を受けたのであるから、長かったと思うのは当然かも知れない。

今、三十数年前の所長としての岩原先生を偲ぶと、いろいろなことが思い出されてくる。

箱根勤務の医師は週に一度は慶応病院に行き、先生の外来診察を見学し、帰りは先生のお供をして信濃町——東京——小田原と帰ることになっていた。夕方のラッシュ時であるから東京発の湘南電車は相当混雑していたが、私の場合、何時も二人分の座席を確保するのは先生であった。電車のドアが開くと、サッと車内に入り、真中の方で手を挙げて待っておられた。席取りは早いもの

勝ちとはいえ、毎度恐縮していたことである。

箱根の所長室は本館の二階にあり、その階段の上り口の近くに医局があった。先生の御出勤は足音と口笛ですぐわかった。それから数分経って医局に電話があり、恐る恐る所長室に何うと依頼原稿の清書でホツとするのであった。ただ、清書中に字が読めないからと何うことは許されなかった。某先輩がそれを行ったところ、この字が読めませんかと一喝されて二度とその先輩には頼まなかったという伝説?を聞いていたからである。先生の字体は御存知の通り独特のものであったが、私には幸によって読めない字はなかった。むしろ清書をするることによって先生の文章の綾を知り、論文の書き方を教わったと思っている。先生原稿の下書きは何時も何方かの手紙の便箋の裏に書かれてあった。勿論、表は読んだことはない。

箱根では某団体が主催して、毎年一度園遊会が行われていた。確か初秋の頃であったと記憶しているが、その日はすし券、おでん券、抹茶券、それにビール券(他にもあったかも知れない)各一枚が職員、患者全員に配られ、楽しい一時を過ごしたものである。先生も勿論出席され、患者と歓談されるのであるが、ある時ふだんあまり飲まれないビールを召し上がり機嫌よくなられたので

あろう(その時は療養所内の立派な娯楽室の庭で、患者や患者の家族が一緒であった)、突然「今井君、ダンスを教えて下さい」と言われ、私もビールを飲んでいたせいで「ハイ」と返事をしてしまった。私とて人に教える程の腕前はなかったが、とにかくダンスの初歩であるボックスだけを手解きした。やがて「君は女になりなさい」ということで遂に風変わりなペアが出来上がってしまった。音楽も何もないただ単純なステップを繰り返すだけである。それも何回も何回も。そのうち先生も自信がついたのであろう、「歌でもあれば少しは良いでしょう。私が歌うから」ということになった。歌は、伊豆の山々月淡く……という「湯の町エレジー」。パートナーが患者の家族に交替し、私は開放されたが、気がついた時にはあたりはもう真っ暗であった。そのうち先生もお疲れになったのか、娯楽室の縁側で眠ってしまった。先生は湯の町エレジーを愛唱されていた。私にとっても伊豆の山々は忘れられない歌となっている。今でも時々口遊むことがある。その度にダンスのことが思い出される。

療養所では時々所長以下幹部職員と患者との懇談会が行われていた。患者は療友会という組織を作っており、会長が代表して患者の要望を所側に説明し、所側がこれ

に答えるという形式であった。先生は常に是は是、非は非、出来るものは実行する、出来ないものは出来ないとはっきり返事され、職員に対しても時には相当厳しい発言をされ、私達をハラハラさせた場面もあった。所長を含めた幹部職員と患者が、こういう形で意思の疎通をはかるというのは他に例はないと思うが、それだけ先生は脊髄損傷に対する愛情が深かったのだと思う。

先生が所長を辞任されてから、私は十数年箱根に留まっていたわけであるが、私の脊髄損傷に対する対応は先生の日頃のお考え以外の何ものでもなかったと思う。十六年間の箱根の生活に何の後悔もない。

先生、御指導有難うございました。心から御冥福をお祈り申し上げます。

## ひとつの思い出ばなしから

春日秀彦 (28)

私は、教室の三奇人の一人で、当時教室一のきかん坊とされていたようです。岩原天皇に口答えしたのは開局以来私が最初だそうです。そんな私ですから、岩原先生

についての思い出は四十年間に山程あります。思い起こせば、総てが傑作、珍妙で、それだけに懐かしく感じられます。今ここにそれらのひとつひとつを具体的に述べれば大変な量であるし、先生亡き後、私が一方的に書くのは申し訳ないし、思い出を語るといことは、しみじみとしたムードで、語り手独自の演出のある方がベターとの私の配慮から、具体的に述べることは控え、どうしてもお聞きになりたい方は私の所へお出かけ下されば、ふさわしいムードで申し上げます。そこで抽象的に申すなら、すべての思い出が、温かく、優しく、親が子を思うような愛情のこもった、先生をオヤジと呼ぶにふさわしいものだったことを感じさせます。以前の私は先生から、目をつけられている、と感じていましたが、今になってみると、その反対で、目をかけられていた、と思えます。特に可愛がって戴いたのに御恩返しもせず、申し訳なく思っています。一つだけ、これは前にも本誌に書いたのでそのことに触れますと、ある時先生は、『岩原、今日あるは〇〇先生がチャンスを与えたからだ。岩原は春日君にチャンスをあげよう』と申されました。教授室へ行くと、当時のひばり学園（現在、こども福祉医療センター）へ勤めるように言われました。以来二十五年、先生の言われたチャンスとは、医学的大仕事達成と考え

ていましたが、私の無能と難問の脳性麻痺が相手で、与えられたチャンスをも物にし得ず赤面の至りです。ところが五年程前にクモ膜下出血——手術——左片麻痺となり、独学で油彩画を始めたことがチャンスを生かすことになりうとは……。上野、銀座の美術展に連続出品し、今年はニューヨークのロイヤルストリートギャラリー・モリーナで開かれる日本の美展に日本代表の一人として出品を依頼されました。又、茨城県内に脳性麻痺者を中心とする重度障害者の生き甲斐対策として総合芸術クラブを創り、その代表となりました。これらは岩原先生のお陰で私が茨城県の肢体不自由児施設で働いていたことと、難波副センター長の助力の結果と思えます。障害児母子の療育指導にも絵画を利用していますが、芸術と療育、障害者の生き甲斐対策を結びつけることの出来るチャンスをお与え下さった先生に感謝すると共に、それを私のライフワークとして今後も努力する覚悟です。以上で、想い出ばなしから現在の心境まで述べさせて戴き、責を果たしたつもりと致します。恩師、岩原先生の御冥福と、御遺族の方々の御多幸を心からお祈り致します。

## 岩原先生のこと

蕪木初枝（特）

岩原先生が他界なさって、早いもので一年余り過ぎました。お年だったから仕方無いことと、言えば言えるけれど、でも先生の温情あふれる優しいお目に、もうふれることがないのは何と云っても淋しいことです。

先生は勉強家で努力型、教室では厳しい面もお有りだったけれど、先輩諸氏のお話では「女医サンには優しい……」由で、成る程私もあまり先生に吐られた記憶がありません。ただ一度だけ、きつと申し渡されたことがあります。それは論文を見て頂く時でした。

今から二十年位前、論文は皆殆ど手書きでした。私は字が下手なので、論文書きは本当に苦手でした。先輩後輩の皆様方の中にも、同様にして苦手の方はおいでだった、と思うのですが、その皆様方の大部分の方は奥様の助力を受けていらっしゃいました。女性の水茎のあとと麗しい文字が二〇×二〇の原稿用紙にびっしりと並んで、それが分厚く重なって綴じてあるのを、やや羨ましく眺めながら、私は乱筆乱文さながらの原稿を恐る恐る差し出したものです。

先生は2Bの太字で丁寧になおして下さいました。いつも一番最後の一枚に大きな字で何箇条かの指摘があり、その中に必ず「文字は丁寧に書くこと」というのが一行ありました。私はその度に胸にキュン!と来るのですが、次の時はまた同じような乱筆です。或る時とうとう原稿を頂きに伺った時、「下手は下手なりに丁寧に書きなさい」と言われてしまいました。叱られた、という程の事ではないかも知れませんが、そして字は相変わらず一向に上手くなりませんが、この先生のお言葉は原稿用紙を前にする度に思い出します。只今、年にもめげず、ワープロに取り組んで苦労しているのも、そんな思い出のせいでしょか。

先生に言われたことは、もう一つあります。先生が村山病院へ赴任なさってしばらく後のことでした。院長室で仕事のことやその他、色々お話ししていた時にふと初枝さん、女は仕事よりもやっぱり家庭じゃ。家のことは女がきちんとせにゃいかん。ぢゃから、仕事も大事だが、何かの時は家のことを先にきちんとやりなさい」と言われました。これは先生の持論です。女性論かもしれませんが、ところが勉強も家事も苦手な私は仕事という言葉で勉強に、家庭という言葉で「お遊び」にすり替えて聴いてしまい、現在に至っているような気がします。

先生にとつてはまことに不肖の弟子でした。もし先生が村山病院に赴任してみえなければ、こんなに身近に先生のお優しさに振れることもなく、過ぎてしまったかも知れません。私は「村山に居てよかった」と心から思っています。

でも、先生にとつて村山病院の業務は、随分繁鎖でいらいと、うとうしい面もお有りだったのではないかと想像しています。

当時、村山病院の結核患者定数は七〇〇床位で久保義信先輩の努力で二七〇床は骨関節結核患者となっていました。肺結核患者は年々減少して行く傾向にあり、その穴埋めに脊髄損傷の患者を入れる話しは随分早くからありました。骨関節結核患者数も肺結核の減少と行を共にしていたからです。脊髄損傷の治療スタッフとして、岩原先生のお名が出て、私達は心強く思いましたが、結核の患者同盟やその治療スタッフ達は反対でした。

当時の医局会で久保先生・小坂医務課長と、その他の先生方との間で何度か白熱の議論が沸きました。岩原先生のお名が強力であればある程、反対も強力にならざるを得なかったのではないでしょうか。それだけに風当たりも強く、新しい医療の理念をもって先生方が赴任して来られると、赤旗が翻ったり、院長室の内外に患者が座

り込みをしたり、落ち着かない状態が随分長い間続きま  
した。

これらのことは、慢性運動器疾患のリハビリテーシ  
ョンの基幹療養所に村山病院の全容が移り変わって行く、  
その始まりに起きた嵐みたいなものでした。そんななか  
で、岩原先生のお力は無くてはならないものでした。先  
生の御苦労は大変なものだった、と拝察しています。

先生は村山病院では多忙な院長業務の合間に、よくリ  
ハビリテーション棟へみえて、患者さん達を励ましてお  
いででした。脊損の患者さんのみでなく、年輩の片麻痺  
の患者さん達にも、よく通る声で、残存機能訓練の細か  
い説明などをなさっておいででした。週一回の院長回診  
も、何時もピーンと姿勢よく張り切ってなさって居られ  
ました。

そんな先生が倒れてびっくりしました。

慶応病院へお見舞いに伺ったら「初枝さん、わしもなっ  
てしまったよ……。」と言われてしまい、一瞬胸を衝かれ、  
言葉が有りませんでした。それから、長い先生の闘病生  
活がはじまりました。リハビリテーション、何度かの入  
退院、先生も、また奥様はじめご家族の方々も根限りの  
努力をなさって居られました。同窓会の各先生方のご努  
力で、ようやく、お家では車椅子で皆様とご一緒のテー

ブルに付いてお食事も出来るようになっていたのに。  
先生の御終えんは、あっという間に眠るように静であ  
られたと伺いました。努力に努力を重ねた末の生の終わ  
りは、清らかであったかも知れません。でも、私はやっ  
ぱり寂しいのです。その先生の最後の努力の場として、  
村山病院が一度もお役に立てなかった事が残念であります。  
せん。これは、村山病院のスタッフ全員の嘆きなのです。  
何時になっても先生のご指導に沿えず、最後までお役  
にも立てなかった、駄目弟子の、練り言をずらずらと述  
べてしまいました。

貴重な紙面を多々使わせて頂きありがとうございます。  
た。

心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 岩原先生の笑顔

森 雅 文 (30)

恩師岩原先生が亡くなられて、はや一年が過ぎ去りま  
した。振り返りますと、私には先生の想い出が沢山ござ  
います。今般「故郷」に寄稿するに際し、静かに眼をつ

ぶって先生のことを思いますと、先生の優しい笑顔が浮かんでまいりました。

独立自尊をモットーとする父親の母校に学びたいことと、父のひどい喘息を治してあげようと志して医学部に入ったものの、当時は喘息に関しては進展のみられない時代でありましたので、卒業後は如何なる道に進むべきかを考え始めた頃のことでございます。

別館の臨床講堂で、軍服姿に相応しい端正な姿勢と独特の話し方で、先ず自己紹介から始まった岩原先生の整形外科臨床講義は、私にとって非常なインパクトでございました。

その時期の岩原先生の脊髄外科は、まさに満開で、学生の私の心をしっかり捕らえてしまったのでございます。昭和二十七年、先生の門下生にさせていただいた頃は、教室は長幼序ありて、礼節を尊び、三尺さがって師の影を踏まずというよき時代でございました。

入局してまもなくの頃、私は京橋に住み、東京から信濃町まで中央線で通っておりまして。

ある朝、何気なく快速の先頭車両に乗りますと、なんと先生が端然とした姿勢で座席に腰掛けて本を読んでいたらしやいるではありませんか。

小田原から通っておられますことは何っておりまして

が、まさかこのような場所でお会いするとは思ひもかけぬことで、おおいに驚きまして、フレッシュマンがこんな所でお話してもよいのかと、一瞬躊躇いたしました。が恐る恐るご挨拶いたしますと、読んでおられた本から眼を上げられ、「やあ、あなたもこれで通っていますか、これから一緒に通いましょう」と、笑顔で仰言ました。眼を細めてにっこりされる先生のお顔はまことに素晴らしい笑顔でございました。

この時、私は初めて先生の笑顔を拝見したように思いました。

というのも、それまでは周囲の雰囲気からしても神の如き存在でありましたので、先生の笑顔のことなど考える余裕もなかったからでございます。臨床講義の先生に次いで、この時が二度目の強い印象でございました。

その後先生の笑顔は何度も拝見いたしております。

とりわけ真岡、清水などの出張病院の報告に参りましたときなど、厳しいばかりでなく、おいしいお茶を煎じてくださりながら、時折微笑まれる先生のお顔を拝見して、お伺いしてよかったと思うことが何度もございました。私達の間では先生の話になると、しばしば如何に先生が怖かったかということが出てまいります。たしかに先生は私たちにとって怖い先生でした。しかし嘗て先生

から、「教室員のことを考えると、夜なかなか眠れないことがある」と伺ったことがあります。「適材適所、家庭、生活にわたってまで考える」とのことでありました。このお話から、職務上は厳しいけれども、本当の先生は優しい方に違いないと思うようになりました。

そのようなことから、眼を閉じれば、怖い先生よりもまず眼を細めて微笑んでおられるあの素晴らしい先生のお顔が浮かんでくるのでしょうか。しかしもう臉でしかお目にかかれなれないのです。そのお顔も涙でかすんでしまいました。

ご冥福を祈っております。

## 思い出語録

鷲 谷 澄 夫 (30)

「一般外科的素養を整形外科医は等閑にしてはいけません」

小生等が、入局した当初、先生は機会ある毎にこう云っておられた。そして自らフレッシュマンの我々に一般外科のレクチアをされた。

「糸結びに習熟して貰いたい。出血は指先で止め、矢鱈ガーゼに頼るな。手術は出血との戦である」

先生は次々と生々しい体験を衝撃的に語って我々を魅了した。

「岩原が育つ頃の外科の医局はあまり学問を志向する環境ではなかった。その代わりといつては何だが酒豪が奔りまわっていた」

先生は土佐っぼのくせ酒は強い方ではなかった。勉強するものが主流をなさない医局を批判していた。

「金はあるところから無いところに流れ下る。学問する身で金の虜になってはいけない」

金の力を否定はしないが、金への接し方には厳しい注文があった。

「オーソドックスを踏みはずしてはいけない。骨折治療は保存療法が基本だ。異物はあく迄異物だ。出来るだけ体内に用いぬよう」

先生は薬も好きではなかった。そのせいか同窓で薬に明るい人を知らない。

「脊損の女性が妊娠した。まつこと女は受動的で、男は能動的である、ハハハ」

こんな事をいう時は機嫌がもっとも良い時だったと思ふ。

小生は入局後数年間入院係をしていた。整形外科は昭和二十九年頃爆発的に隆盛し他科の病室を占領し始めていた。教授回診の都度先生はニコニコして他科の病室を訪れ、

「malignant infiltrationですわね」

と、満足そうな表情をされていた。

「先輩が小便したテーマだけど、君にやってもらいたい」

入局三年で私達はそれぞれハウプトを頂いた。

「出張は家族を連れて行き給え。土地に住んで足を地につけて仕事をしなさい」

先生は単身赴任を大変嫌った。健全な家庭が仕事の基本だと自ら教訓を示されていた。

「学問するものは貧乏する。名譽税を払うつもりで覚悟してやり給え」

・学問しようと医局に復帰したとき、先生はこう説いた。小生は間もなくそれを裏切った。当時のことが今でも生々しく相馬灯の様に脳裡をよぎる。

民間病院に赴任を命ぜられた後、先生と私は何度か書簡を交換した。

「自信を持って堂々と生きおし給え！」

先生の力強い一文が、萎えた私の神経を蘇生させた。

私は再び明日あるを信じて論文を作り続けた。

入局後十年、永住することになる宇都宮の要職に小生を推挙された。勇猛心に駆られて私は九年間その席であられた。

「腹の痛めぬ子」と云われながらも、私は先生に出来る限りなつこうとした。

カンファランスでの教授の結語は震える程魅力があった。往復五時間をいとわず大学のカンファランスに通ったのもそのためであった。

「遂に花が咲かなかったか」

私の開業を聞いて、先生はこう云ってなげかれた。

「開業してヘルニアを千例やりたいと思っています」

「数を上げるばかりが能ではない」

先生とこんなやりとりをして開業してから十八年経った。

「勉強が忘れられないと見える」

開業してからある研究会で顔を合わせた折先生は始め驚いた表情でこう仰せられ、それから「一緒に掛けよう」と並んで席をとられた。

勉強を大切にする先生の姿勢を身近に感じながら、それはまことにたのしい想い出である。

先生の関心事は慶応整形の将来であり、日本の脊椎脊

随外科の未来であつたらう。

先生はおびただしい活きた言葉で、数多くの弟子や研究者の中に生き続けている。

私も私の中の岩原像を掘りおこしてみた。そして、もう小生自身になり切つて分離出来ない性癖になっている事柄の多いことに驚いて首をすくめている。

高知訛りなどもなつかしい。

「まつことエルスバーグちゅうは、えらかこつ」

先生はこうは云われなかったけど、エルスバーグと神中正一先生を尊敬しておられた。そしてそのことを誇りとされていた。学問への真摯さをその事から私は汲みとっていた。つまり、偉大なものを理解し敬うことに何のためらいもなかったのである。

真の学者であり、得難い指導者だった、師を思い、己の幸せを噛みしめている。

不埒の病となった脳血栓で慶応病院に入院した折、あまりにも元気な様子に、

「一過性のもんですね。暫時ご休養もよろしいでしょう」と、申したところ、照れた顔を歪められて無言で頷かれた。私は本当にそう信じて疑わなかった。

岩原教授が現職を退いてからは、一層視野を展げて、

日本の整形外科を気にされ関心は一慶応に止まらなかった。そのため些かの寂しさも同窓間にはあつたし、それが時には変形した感情のしこりにもなった。

しかし、時に出席される脊椎カンファランスでも、コメントは相変わらず誰よりも勇敢で切れ味う失わなかった。

今、目を閉じて恩師の像を心に浮かべるとき、こわさが三分、やさしさが四分、湧き上がる勇猛心が三分と率直に云える。

そして師事したこと縁の深さをしみじみと感じるのである。

### 恩師岩原教授の思い出

小林 祥 悟 (専4)

昭和二十七年に入局致しましたが、三十四年迄の医局生活で思い出す俣を書いてみたいとおもいます。確か二十八年に日本脳神経外科学会の会長を担当なされ、私は学会の懇親会の係を言いつけられました。現在とは違い資金も少なく神宮外苑の結婚式場においてBUFFET

STYLEの懇親会を開催致しました。確か会費も五百円だったと記憶しております。何しろ当時はBUFFE STYLEに馴染みの無い方々ばかりですから可なり大変でした。椅子が殆ど有りませんので可なり混乱致しました。その上料理や飲み物も少なく、お偉方が立った俵ですので岩原教授も聊か御機嫌斜めの御様子でした。然し会場の直ぐ外に日本庭園があり、その内に皆さんは三々五々散策されたり其処で御歓談されて居りましたので聊かホット致しました。而も学会の会場は北里講堂ですから参加者もそんなに多くはなかった訳です。

岩原教授は小田原市風祭の箱根療養所長をされていた頃ですが、恒例で正月二日に教授宅にて新年会がありました。医局員が御馳走になりました。秋には教授自身が潰込まれた御自慢の沢庵も並んで居りました。誠に美味で驚谷先生が盛んに褒めたものですから是非お土産にとゆう事になりました。当時はビニールもなく新聞紙包みでしたので、帰りの小田急電車の中で凄く臭って回りの乗客に大変ひんしゅくをかった思い出があります。

又先生は、物資の少ない戦中戦後を過ごして来られましたので、無駄をささげず物を大変大切にされました。ある日教授室に呼び出しがありました。お伺い致しました。処論文のテーマを頂きましたが何と使用済の封筒を開いた

その裏に書いてあるのには驚きました。内心私共にとってはこんな重大な記念すべき事ですから、もうすこし立派な紙で頂きたかったと思いました。小千谷には何度かお出で頂きましたが昭和五十五年に御来駕頂いたその時が、お元気なお姿の最後に成りました。

## 恩師の思い出

齊藤 正也（専四）

恩師 岩原寅猪先生に関する数々の思い出は、年と共に鮮烈に蘇ってきます。

先生についての印象は、一言で言い盡せるものではありませんが、今でも脳裡に強く焼き付いているのは、秋霜烈日な厳しい半面と、時々見せられた慈父の様な温かい眼差しの面影が交錯するお姿です。

私が入局したのは昭和二十七年でしたが、その頃の先生は若者を凌ぐ程に張り切っておられました。

不肖の弟子であった私には失敗談も多く、人並以上に先生から叱責を受けたような気がします。後日談になっ

て、その当時のことに話題が及ぶと、先生が決まっていたことは「君は得をしたよ、肝に銘じて同じ失敗を繰り返さないだろうからな」という内容のものでした。

果して、結果がその通りになったかどうかについては全く自信はありませんが、似た様な局面に遭遇した時には、ふと先生の顔が浮んでくるのは事実です。

私にとって最も印象深かった思い出は、昭和三四年二月頃のことです。当時、学位論文の仕事を了えて都立台東病院に出張中でしたが、先生から突然の呼び出しがあり、「何事ならん」と押っ取り刀で教授室に伺いますと、先生は何時になくご気嫌の態で、「まあ坐り給え」と言われ、あの大きな手で急須を廻しながらお茶を振舞って頂いたのが、昨日のように想起されます。

その折、先生の話された内容を要約すると、「これからの時代は、リハビリテーション医学という新しい学問が重要になる筈だから、君はその方面に進んでみてはどうか、丁度ハウプトの仕事も終わった所だから真剣に考えなさい、ついては、その領域の勉強するには国立塩原温泉病院が最適と思うので行ってみてはどうか、熟慮の上返答しなさい」というものでした。

意外な話の展開に呆然自失し、血の気のひく思いだったのを今でも憶えています。

「俺は、整形外科医として失格なのかな」とか、「希望者の少ない塩原への赴任を強要するための口実に過ぎない」など、支離滅裂に暫くは疑心暗鬼の心理状態に置かれました。

返答を渋ること四ヶ月、その間に二度の催促を受けましたが、先生は実に忍耐強く待ってくれました。当時の状況下では、如何なる理由があろうと、教室員が主任教授の命令に服さないなどということは有り得ない時代であったことを思えば、誠に汗顔の至りでした。

塩原の話が出て、実際に赴任したのは六ヶ月後のことでしたが、先生には実に寛大に対応して頂いたことを、唯々感謝するのみです。

リハビリテーション医学に対する先生の先見性と情熱は、その後様々な形で具現化していることで実証されていますので省略しますが、昭和四〇年四月に第三回汎太平洋リハビリテーション会議が東京で開催された折、アメリカのハワード・A・ラスク教授やヘンリー・H・ケスラー博士ご夫妻を杏林大学の松田理事長が自宅に招待されましたが、その際、岩原先生や池田先生に随行同席し、眩いばかりの席上で、先生から数々のご高配を頂いたことが夢の様です。

その席上において、先生から言われたことは、「君も

アメリカへ勉強しに是非共行きたまえ」ということでしたが、諸般の事情で今だに実現していないのは慚愧の極みです。

塩原在職の七年半と韭山温泉病院の五年間は整形外科とリハビリテーションの二足のワラジを履いていたようなものでしたが、その後の琉球大学の四年間はリハビリテーション一本の時代で、昭和四九年には岩原先生が医療事故裁判の証人として来沖された折、私の教室にもお立寄り頂きましたが、「頑張っているようだな」と、慰問と激励を頂いたことを懐かしく思い出します。

私が、月が瀬に来て一三年になりますが、先生は当センターの将来について大きな関心を寄せておられました。顔を合わせる度に各種のご助言を頂きましたが、昭和五六年一月末に先生が慶應病院に入院されたとの知らせを受けて顎然としました。

脳硬塞による軽い左片麻痺とのことでしたが、何分にも七九才とご高令ゆえに心配なことでしたが、四ヶ月後にリハビリテーションのために当センターに転院してこられ、再び間近かに先生に接することができました。

在院期間は四ヶ月間でしたが、先生自ら情熱を注がれたりハビリテーション医療をどの様に感じられたか、ついでお聴きすることは出来ませんでした。いつも背筋

をピンと伸ばして歩かれたゴマ塩頭の後姿や、ご気嫌の良い時は歩行中に軽く口笛を吹かれていた姿、再建期にあった慶應病院長時代のご心労の様子、手術中に先生の周辺に漂う清々しい緊張感や、学会などにおける存在感の重さ、リハビリ訓練中の苦痛に耐えられた姿などを、深い感動を以て忘れることができません。

## 岩原先生の想い出

鈴木邦雄（専4）

昨今、世の中はグルメブいておりますが、北陸と岩原先生を結びつけるのも、やはり日本海のカニや魚などのグルメと、もう一つは本年5月に逝去された明治生まれの堀高岡市長ではなかったかと思えます。堀市長は柔道できたえた偉丈夫な方で四十年近く市政にたづさわられ、伊井彦根市長ともども長寿市長としても有名でした。岩原先生とはどこか相い通ずるところがあり、来高されたときには、市長さんと歓談されることを楽しみにされておられました。

昭和四十三年の初夏だったと思います。市長さんのお

招きで、高岡の東を流れる庄川上流の川金という鮎料理屋に岩原先生御夫妻のお供したときのことですが、市長自慢の御料理でもあり、鮎のあらいいに出合った時の先生は目を細められ、塩焼き、田楽なども美味しそうに召し上がっておられました。あとで指折りかぞえながら二十匹近く召し上がったと告白され、その満足されたお顔が今だに想い浮かびます。

不肖な弟子だったと思いますが、岩原先生の想い出となると、何時も美味しんぼがかかわっている印象です。富山は海の幸、山の幸の豊富な所ですが、先生から塩原で食べたコゴミが美味しいものと伺い、一度は出合ってみたいと思い八方手をつくしてみましたが入れることが出来ませんでした。しかし最近は山菜取りが盛んとなりこちらでも少しはとれることがわかりました。そのうちに全国的な自然食ブームとなり、昨今は出生地の良くわからないコゴミがわらび、ぜんまいと同列にデパート、スーパーで手に入る様になってしまい有難みがなくなってしまいました。食べ物にも流行があることを思い知らされます。

富山では山菜取りのシーズンが終わりとなる五月末から六月にかけて定置網に入る百軒瓦余りの本鮪の季節となります。最近は数がめっきり少なくなりましたが、朝、

浜にあがった鮪がその日のうちのお膳にあがったときは幸なこと、プリプリした赤身の刺身は絶品です。しかしとうとう先生には食べていただくことが出来なかったのは本当に残念でした。

高岡では前田家の菩提寺の瑞龍寺と古城公園を見ていただくだけで散策する所もないまま、能登めぐりをし輪島までお供し、輪島塗の現代作家の繊細な金時絵に接し深く感激されていたことを覚えております。

学会で最後に金沢においてになった時は湯涌温泉にお泊りになり、学会中奥様だけ小松の森田先生の御世話で家内と丸谷焼の八十吉窯を見学し、御帰京の日は岩原先生御夫妻の御供を家内にたくし、白山比咩神社、東尋坊を通り永平寺を参観し、福井で開業されている辻先生の所にお寄りになり、小松空港からお帰りになりましたが、金沢には古き良き時代の遺跡が多くありますが、私自信良くわからず御案内出来ませんでした。

最近に加賀温泉駅前に金色の観音像、福井大野に大佛など新しい名所が生まれましたが、北陸はやはり静かな山居村のたたずまいと、ズワイガニ（松葉蟹）、ブリ、タラなどに代表される海の幸だと思えます。

とうとう行くことが出来ませんでした、初冬に室堂から新雪に覆われた雄山（立山）を眺めるのを楽しみに

されておられました。

私達夫婦も最近十一月下旬に数十糶つもった雪の室堂で白銀かがやく雄山を臨んだ時、やはりなんとかして先生をお連れすればよかったとくやまれました。

## 偉大なる幼な友達

小林 真杉 (特)

小生故岩原君と同じ土佐下知の出身です。彼は豪農の二男か三男坊で大変恵まれていました。彼と私は同年生まれで下知尋常小学校から高知一中と進みました。其後岩原先生は慶応義塾大学へ入学され輝かしい将来を約束されました。次に私は大阪大学に進みました。終戦後二女の病気で慶応病院に行き先生に大変お世話になりました。其後岩原教授の御指導でおくれながら学位を取らせて戴きました。其御恩は一生忘れられません、有難うございました。後日御病氣になられ慶応病院に御見舞いに伺った時は奥様にもお目にかかり、まだお元気で昔話しに先生は熱が入りましたが時折り涙声になって、親子で寝て居るよと泣かれました。それでも後は立派に育って

いるから心配ないよと云われ安堵の気配でした。さぞかし心中残念な思いでいられたこと推察されました。最高の医術の甲斐もなく昨年御逝去されてより早一年余りすぎました。衷心より故岩原名誉教授の御冥福をお祈りする次第です。

合掌

## ある手術の思い出

木住野 喜 義 (31)

昭和三十年の初期は岩原先生が己に日整会の会長を主催され、教室は正に順風満帆の航海に船出した当初で、入局者は年毎に増加し、出張病院もそれにつれて急増した時代であった。岩原教授の下に池田助教授、泉田講師あり、吾々同期はこれら先生方の薫陶をうけて、充実した医局生活を送れた事を感謝している。

年は流れて、今吾々の二世達が入局し、同じ心境で勉強診療に励んで居られる事である。

入局して四、五年目であったと記憶している。当時は脊髄の手術は専ら岩原教授が執刀され、泉田講師が第一

助手、お兄さん方が第二助手で、主治医は第三助手をするのが大原則であった。どういいういささつから、私が光栄の術者に選ばれたかを思い出せないが、馬尾神経腫瘍の手術で、岩原先生が第一助手をして下さった事である。未だ局麻で手術が行われた時代であり、丹念に局麻を行って、先生が手洗いを終えられるのを待って、やおらふるえる手で加刀し、無言の内に何とか椎弓列の展開まで終えて、いよいよ椎弓切除の段になり、ここで先生は手術野を無血に保つことの大切さと、脊髓手術の安全は、かかって椎弓切除の上手下手にある事を諭された。ついで椎弓切除の突破口を作る「こつ」を話され、それには骨鉗子を開いて、その一方を切除骨縁の下にくい込ませて咬合せ、椎管外に持ち上げる様に力を加える方法を自ら示され、(蚕が桑を食む様にと表現された)この方法が鉗子をすべらせて脊髓を損傷させないこつであり、これがお家芸の手術操作であった。(今の電動式手術器械では考えられない)。特に硬膜内の操作でゾンデを使って腫瘍(ノイリノーム)をころりと硬膜外に引出す方法を教えられ、これが脊髓腫瘍摘出の「快感」であると、正にこの快感を味あわせて頂いたわけである。二重三重の見学者に囲まれての手術、大汗をかいて無事終了した時の感激は未だ忘れられない。

手術場を去られる先生は「室まで手術記事を持って来なさい」との一言を残して帰室された。早速克明に手術記事を書いて持参した所、例の論文校正の時の様に朱筆で訂正して下さい、一人感激して退室した。

教授室を出て、外来の上の古い木造の廊下のきしむ音、足取りがなつかしく思い出される。

もし私の外に岩原先生を第一助手にして手術した経験を持つ同窓の諸賢があれば、共にその思い出を語り合いたいものである。

## 思い出すままに

松井 明 (特)

名ばかりの我が院長室の一隅にある棚に、たしか還暦の祝いに銀座の有賀でお撮りになった上半身の岩原先生の写真が飾られてあります。特徴のある先太の万年筆でサインしてある字はやっと判読出来る程にうっすらしておりませんが、じっと手に取って見詰めていると、その風格に何となく背筋を正しくしている自分に驚き、珍らしく見開いている眼、野武士然とした精悍さに一瞬身構え

るような心理状態にさせるのも、何時になっても変らな  
い身に染みついた長年の条件反射なのでしょう。

昭和二十七年の暮、北里講堂で開催されていた国家試  
験講習会の壇上で力強く自信に満ちて話され、独特な雰  
囲気を醸し出されていた姿に魅せられて教室の門をたた  
きました。直接始めてお目に懸った日は当時別館二階に  
あった手術場で手洗いをなさっていた時でした。「君は  
背が高いね。どの位あるかね……。ほおう、五尺十寸か」  
と、こちらの緊張ぶりを見透して肩の力を抜いてくれる  
ような、何かほのぼのとした会話が耳に残っております。  
この一葉の写真の口許から「岩原は」の稟とした声が、  
二十数年の歳月が過ぎ去っているとは思わせない新鮮さ  
をもって甦って来そうになります。この一言に数ある学  
会で我々教室員はどんなにか勇気づけられ、尊敬したこ  
とか、そして大樹の許で勉強出来る幸せを噛みしめたも  
のです。

又、時にはこちらの耳を疑わんばかりに口笛を吹きな  
がら白衣の片側のポケットに手を入れ、胸を張って歩か  
れていたこともありました。きっと心の高ぶりがそうさ  
せたのでしょう。

正月元旦恒例の医学部新年祝賀会の後、毎年教室全員  
が先生のご自宅に招かれて大盤振舞いの心のこもった手

作りのご馳走に預り、宴が盛り上がるとやώρα十八番の

「湯の町エレジー」が流れ、興ずると耳にしたことなの  
い俚謡を聞かせてくれたものでした。その間幾度となく  
「高千よ」とオクターブの高い声で奥様をお呼びになり、  
気を配っておられた素顔を垣い間見たものでした。

我が家の庭の片隅に白い花を咲かせる珍しい沈丁花が  
もうかなり大きな灌木となつて茂り、毎年三月初めのひ  
んやりとした夕べに香ぐわしい匂いを漂わせております。  
先生から頂いたものです。誰もがご存知の事ですが、植  
木の手入れ、土いじりが、バラ作りがお好きで多くの面  
白おかしいエピソードが伝わっておりますが、或る日、  
「君これをあげるよ、持って行って植えておきたまえ」  
と言いつつ手早く掘り起し、くるくるっと根を包んだ節  
くれだった手捌きは本職はだしでした。その楽しげにな  
さっている姿には教室で見られない垣根を設けない人間  
臭さがありました。

先生が座右の銘としておられた言葉には幾つかがあり  
ました。和<sub>シテ</sub>不<sub>レ</sub>同<sub>モ</sub>、鬼手佛心、追いつき追い越せ、な  
どその時期その心境その立場から用いられたものでし  
ょう。特にしんみりと静かに語られる時は、運、鈍、根、  
でした。中央棟の地下にあった教授室であの細い目を一  
層細くされ、把手の無い急須にお好きな銘柄茶の葉を一

杯に入れて濃いめにだされた緑茶を味わいながら、教室創立時の大変だった事、又ご自身の歩まれた道程を断片的に語られる時決まって口にされる言葉がこの三字でした。今にして思えば記録にとどめておけばよかった、かけがえのない資料になったものと悔んでおります。

その後、何のきっかけからか日記をつけて二十年近くになりますが、三日間にわたり空白があります。それは先生が帰らぬ旅路についた三月十四日、十五日、十六日です。書き記してしまえばそれで終わり、無かった事にしておこうか、揺れ動いた複雑な胸中がそうさせたのかもしれません。

昭和六十三年三月十六日、先生の人生にピリオドが打たれ、ご家族の方々と泉田先生始め愛弟子たちの手によってお骨が拾われて最後の別れを告げました。

無情感と寂寥感がこみあげて家路につく頃、陽は西に傾き昔から美しい姿でただずむ大磯の高麗山はそのシルエットを浮かびあがらせつつありました。

## 恩師岩原寅猪先生との出会いから

榎田 喜三郎 (特)

昭和二十七年京都府立医大を卒業した私は直ちに上京して順天堂大学付属医院にて医師実地修練(インターン)に入った。各科一ヶ月毎のロテーションによって研修を受ける一方、終了時の医師国家試験に備えて勉強中、たまたま大学の先輩から教えられて国試のための講習会に参加した。その時の整形外科の担当講師が慶応の岩原教授であったわけで、この時が先生との最初の出会いである。講義は先生の御性格をそのまま表したもので、極めて簡潔、明快なものであり、私はこの講義を通じてすっかり整形外科に魅せられてしまった。府立医大における整形外科は教室初代教授の来須正男先生が昭和二十四年開講されて間もなくであり、しかも来須先生は第一外科助教授から移られた関係で、私の学生時代には整形外科本来の領域である骨、関節外科すなわち運動器を中心とする外科の講義は殆ど聴かれなかった。それだけに岩原先生のお話は殊更新鮮に映り、国試の準備にも最適と思われた。インターン時代には漠然と将来外科を専攻したいと考えていたが、この講義をきっかけに整形外科が自

分の性格や嗜好に最も適しているとの印象が強く、是非とも慶大整形外科に入局して岩原教授の教を請いたいと思うようになった。しかし何等のつても無く困惑していたところ、順天堂インターンで同期に松井明君（新潟医大卒）がおり、彼が慶応の整形外科医局長（当時泉田講師）を通じて入局する旨を知り、何とか慶応にお世話になれないものかと思案した。幸い慶応の皮膚科には横山教授がおられ京都府立医専卒の大先輩であることを知り、一面識も無いまま先生の教授室に飛び込み、事情を伝えて岩原教授へのご紹介をお願いしたのが入局の経緯である。昭和二十八年入局のfreshmanは慶応から木住野、小暮、増野の三君と松井、榑田、西村の計六名であった。岩原教授との始めての面接では京府医大からの初の入局者として、京都における京大との関係を、東京における慶応と東大のような立場ではないかといわれ、また将来は関連病院の医長さんなどはどうですかというようなことを話された。当時は先輩の診察や手術の見学、講義の聴講などがよく行われていたが、岩原先生の外来診察は独特で、初診時レントゲン無しの外診所見だけで殆どの例にペン字で力強く診断名をカルテに記入されるのには敬服した。小児の上腕骨顆上骨折や外顆骨折は勿論、骨膜下骨折などは限局性圧痛と硬結だけで診断され

た。特に脊椎疾患の際には患者を必ず上半身裸とし斜め後ろより姿勢を観察し、軀幹を全曲させる、あのRump-beugungすればSteifhaltungをゆるい、Beschreibung用の所見説明は甚だ印象的なののである。Kloppschmerzにしても複数で痛いというのは決して脊椎カリエスでは無く、Spinalirritationであると教えられた。昭和三十年代に入ってCervical spondylosisに関心を寄せられ、手指の巧緻運動については神経支配との関連で診察は入念であり、finger manipulationはjangeschickt、ungutgendと表現されていた。これが今日一般に普及している脊椎症性脊髄症や脊椎症性神経根症である。手術はラミネクによる後方除圧と齒状靱帯切離で、当時まだ閉鎖循環式エーテル全身麻酔の時代であり、術後覚醒まで数時間を要することも多く、事故に見舞われることも珍しく無かった。事実他学では同様手術で死亡事故が相次ぎ、手術の成功率は七〇％程度ともいわれた程であった。こと脊椎に関しては慶応は岩原先生によって他学より一步先んじており、毎月の整形外科集談会東京地方会では所属十一大学の教授方が第一列目に座っておられる中で、脊椎疾患の演題ではしばしば発言され、討論のSchlussをつけられたが、教室員は他学の人々に対しそれを誇りに感じていた。

岩原先生は明治の気骨の感じられる土佐のイゴッソウを地でゆく野武士的風格の持ち主であったが、若い時代に岩原先生門下にして頂き整形外科医の初めから教えを受けた慶応時代の思いでは懐かしく、後に私が教職に身を置くようになってからもどれほど役立ったことか感謝に耐えない。

東邦大学に講師として出向して間もなく、何かの学会参加の途上、列車内で「学の道」をこんこんと諭されたのが印象的であった。一つの学問の芽がふきだすと、次に本幹ができてそれに枝、葉がついてくる。研究もこれと同じで新芽を摘み取るようなことをしてはならない。一つの枝から更に新たな若葉をつけるように、研究もそれで終わってしまうようなのはむしろつまらない。結論には次のステップを予期するような新しい疑問を投げかけるような研究こそ将来伸びるにたる優れた研究だと。慶応時代に有給のままアメリカ留学をさせて頂いたのも、また東邦大学へ移籍後五年を過ぎた頃私が臨床、研究ともに伸び悩んでいるのを心配され、丁度その頃お誘いのかかった母校への転職を薦めて下さったのも岩原先生である。これらのことはその後母校の整形外科講座を担当するに至る基礎を作ったものと受けとめている。

## 岩原先生の思い出

今井 望 (32)

我々三十二回生が入局した昭和二十九年の頃、岩原先生は教授として最も気力の横溢した五十歳代前半ではなかったかと記憶する。新人歓迎会の席で、張りのある、やや高調子の美声で「湯の町エレジー」を歌われた姿が昨日のように思い出されるのである。

我々の入局当時整形外科は医局員の数の上でも科の力の上でもまだまだKleine Fachuそのものであった。岩原先生はかつて外科から整形外科に移られたのであるが、外科に対する対抗意識が何時も頭の何処かに残っていたようで、それが言葉の端はしに現れることが少なからずあった。ほろ酔い機嫌になると、よく「外科は癌の薬物療法が解決すればやるのが無くなる。そこへ行くと整形外科は外傷と先天異常を対象とする科だから、世の中が進めば進むほど繁盛する科なのだ」と言われたものであった。幸か不幸か癌の治療が解決して外科が衰えたという話は聞かない。しかし先生の言通り、整形外科は急速に勢いをつけ大発展を遂げたことだけは確かである。そしてこの間整形外科学会の長老として会の発展、分科

会、研究会の設立に多大の尽力をされたことは多くの方々の知るところである。

当時医局員の論文に対する先生の校閲は峻烈を極め、提出した原稿は先生の朱筆で真っ赤に染められたものであった。あの当時は言うまでもなく原稿は手書きである。整形三悪筆の一人と言われた私などは、原稿を差し出すのも恐ろしく、いつもそっと提出してはさっと逃げ帰ったのであるが、早速翌日ぐらいいは克明に添削して返して頂き恐縮したものであった。幸いに悪筆についてはついに一度もお小言を喰わずにすんだのは、言っても直るはずはないと最初から諦めておられたためであろうか。ただ一度だけ、「君の字も年をとれば、いつかはそれなりに風格が出るだろうよ」と気の毒そうに私の顔を見て言われたことがあり、身の竦む思いをしたことがあった。今私も同じような立場になって、医局員の原稿を読んでいる。すべてワープロで清書された綺麗な原稿である。読みにくい筈はない。しかもなお、かつての恩師と較べて原稿を添削するさい、いま一つ気迫を欠くことを自覚せざるを得ない。ときどき師の面影を思い出しては自戒しているこの頃である。

私は約十年間先生の膝下で整形外科学を学び、そのあと足利日赤病院、国立栃木病院へと転出したが昭和四十

九年東海大学に就職が決まったときには非常に喜んでいただき、「学校の教師とは金には恵まれないが、また別な喜びがあるもんだよ」と言われて、新しい教室が栄えるようにと大きな棕櫚竹の鉢を頂戴した。その後いくつかに根分けして大事に育てている。そして教室もそれなりに育ってきている。

年月が流れ私も恩師の教授時代とほぼ同じ年頃になってきた。その目で当時の先生の人間像を思い返してみると、偉大さと同時に、またいかにも人間的な、あるいは稚気に満ちたところが少なくなかったように思う。それ故にこそいま岩原先生を、そしてあの当時の教室を心から懐かしく想い出すことである。

### 雑感（岩原先生を偲んで）

道山新一 (32)

昭和二十九年五月、数人の友人と共に当時木造の粗末な教授室に岩原先生を訪ねて、入局の挨拶を申し上げた事があった。その時、先生曰く、「君達はこれから新しい整形外科を勉強して、いつかは大半の者が開業医とし

て医療を行う事になるが、先股脱と筋性斜頸さえやっていたら食うには困らないよ。」これが初めて先生の警咳に接して頂戴した言葉である。この言葉だけは遠く三十有余年を経た今日でも印象深く耳に残っている。

当時の日本国民は戦争に敗れ、廃墟を眼の前にして、貧困と窮乏と絶望感の中に彷徨しながら、復興への光明を模索していた。以前より整形外科では先天性疾患殊に先股脱と筋性斜頸は最も重要な疾病としてとり扱われて来たが、とりわけこのような時代を背景にして、この二つの疾患が大量に発生した。

事情があつて在局期間は短かつたが、済生会宇都宮病院で金井司郎先生、国立栃木病院で上牧恭一先生の下で先股脱、筋性斜頸について、みっちり指導をうけた。昭和三十年代前半の勤務医時代、両疾患はやはり整形外科の花形で、圧倒的に多かつた。教室では直接ふれる事の出来ないような事例でも、眼で見、手で触れて、自分のもととする事が出来た。こんなにも多いものかと驚くと同時に勉強意欲にかりたてられた。岩原先生の先見の明に頷きながら、「これなら開業しても充分食えるだろう」と明るい希望を持ったものである。

三十四年春、いざ開業して見ると確かに当初は先股脱と筋性斜頸が我が家の台所を支えてくれた。この頃は我

が郷土のような小都市の人達には整形外科がどんな疾患をとり扱うのか、内科、外科のように明確に理解されていなかったけれども先股脱と筋性斜頸に限っては整形外科をたよつて来た。然し骨が折れていると言つたら、接骨院に行かれると言ふ、今日では信じられないような事もあつた。

先股脱、筋性斜頸全盛時代には色々な事例に回り合つた。先股脱と筋性斜頸を共有している患児も多く見た。又兄弟姉妹で先股脱であつたり、筋性斜頸であるものもあつた。双生児で共に先股脱であり、共に筋性斜頸であるものもいた。双生児の通院は大変で、母親と姑の共通の仕事となるわけだ。筋性斜頸の患児を数多く経験すると家族の者が的確な診断を下して治療に訪れるものもあつた。三人位までは「又です」とバツの悪そうに言ってくるが、それ以後は恐ろしくなつて生産をストップさせるのか、来院が絶える。とにかくこの種の疾患では「ムンテラ」に気をつかつた。市街地に少なく、周辺の農村地帯に多く発生する事実は粗食で過重労働をせざるを得ない農村の女性の宿命を感じさせた。「遺伝でしょうか」と真剣にたずねる母親にうっかり「そう言う可能性もあるかも知れない」などと答えでもしたら離婚問題にも発展しかねないので、「働きすぎてなるんだよ」と話すと

殆どの母親は納得して帰って行った。又診察に来た母親に先股脱である旨を告げると翌日その姑が「うちの孫に限ってそんな病気であるわけがない。元氣もいし、手足もよく動かすし、食欲もいい」と怒鳴り込んでくる事もあった。いくら説明しても納得しない。こんな患者は二度と来院しないが、他医に行ったのか、放置してしまっただのか、後者でなければよいがと願う事もあった。

開業生活が長くなると患児が母親となつて自分の子を診察につれてくる機会にめぐり合う事もある。その子が先股脱であったり、筋性斜頸であったりして、皮肉にも親子二代に亘つて治療した事もあった。

ともかく開業医生活を無事にこなして、今日に至る迄、数百例とも言える二つの疾患を診て来た。然し愈々、四十年代に入つて、日本も敗戦のショックから完全に立ち直り、復興、繁栄の道を歩みはじめ、国民生活が豊かに安定する頃になると先股脱、筋性斜頸は減少の一途をたどり、汐の引くように、次第に姿を消しはじめ、今日では殆ど待合室に見られなくなつてしまつた。過去一年の間、検診で見落とすような軽症の筋性斜頸一例と軽度の亜脱臼一例を診るのみ。数日前、当医師会の整形外科医の集りがあった。私とは二廻りも年令の若い会員が久しぶりに「コリック」のある先股脱を診たと鬼の首でもとつ

たように得々と話し始めた。昔の事を思うと老兵は消え去るのみかと考えさせられた。

最近、肺結核が減少したと言う。胸部写真の読影が出来ない内科医が出来つつあると或る新聞記事を読んだ。近き将来、先股脱、筋性斜頸を知らない整形外科医が出現するのではあるまいか。岩原先生の「先見の明」も見事に打ち碎かれて、この二つの疾患では食えない時代がとうとうやつて来た。黄泉の国の先生も苦笑されておられる事だろう。

とは言うものの世の中の流れはよくしたもので、潮の満ち引きの如く、一方が引けば、一方で満つる。人生八十年、長寿社会の到来によって、長寿なるが故に起こる疾病即ち、老化による運動器障害が年々増加の傾向を辿り、再び外来を賑わすようになった。殆どが腰痛か、膝関節痛、肩部痛と相場がきまつている。以前、乳幼児が泣き喚く声で喧騒を極めた待合室は今では高齢者に占領されて、時折嫁の悪口を囁き合う声が聞かれる昨今である。ここにも老人医療が社会問題の一つになっている事がうかがわれる。

栃木県には岩原先生の教え子が多くの病院に勤務、或は開業しているが、現職の教授時代に先生は毎年のように塩原で行われる研修会に顔を見せられた。夜の懇親会

では必ずと言ってよい位、奥さんを同伴され、温顔を綻ばせながら、酒盃を傾けられていた。御夫婦の情愛の濃やかさが同席した者の心にしみ入るような光景を屢々拝見した。先生に接する時、自づと体からはどばしる気骨と風格に頭の下がる思いがした。明治維新、近代国家の夜明けを切り開き、短い生涯を終えたある土佐人の血潮と情熱を受けつがれたものであろうか。

人の心には二面性があり、殊にはつきりと区切りをつけているのが政治家。本音と建前を上手に使い別けて、選挙戦に勝って行かなければ大成しない。これが政治の世界の生き様である。クリーンな筈の人がリクルートに汚染され、泥沼の中でもがいているのがよい例であろう。

先生は一面性の人であつたと信じている。整形外科一筋、大慶大整形外科教室の基礎づくりと発展に全精力を注がれた。本音と建前を巧に使いわけられるような器用な人ではない。とても政治家の真似事等は出来ないだろう。私達はその人に教えを受けた。これからも先生の心を心として生きて行きたいと念じている。

晩年、不治の病魔に侵され、長い闘病生活を余儀なくされた先生の心の中を偲ぶ時、感慨一入無量なるものがある。又奥さんが常に寄り添うように看護にうち込まれた御様子を書面等で推測し、多年の御心労に対して、お

慰める言葉もありません。

先生逝って、早や一年有余、心安らかにお眠り下さいと只々御冥福を祈るのみです。

## 思い出・あれ・これ

奥村守彦（特）

私が慶応の整形外科教室にお世話になったきっかけは、岩原先生と私の一番上の兄（内科）とは慶応の第五回卒の同期生だったという御縁からです。同期生には教室の大先輩、山内吉雄先生（現在活躍されている山内健嗣先生のお父上）もおいでになり、「ふるさと」六十周年記念号には「五十年前の整形外科の教室」と題して、教室の成り立ちと共に、岩原整形外科教授誕生の一こまを記されています。その山内先生も今は故人となられましたが、私の兄は山内先生や岩原先生より、ずっと早く昭和二十年、終戦の年に遙かブラジル・サンパウロ市で個人病院設立後まもなく胃癌で亡くなりました。兄は昭和七年、鐘紡の嘱託医として渡伯したのですが、亡くなるまで日本は戦争にあけくれしていませんでしたし、兄の生来の筆

不精もあって、慶応とのつながりも切れていて、三四会名簿には、兄の生前も死後も、兄の名前は名簿から消えたままでした。このことを知られた岩原先生は「卒業生を名簿に載せないのは、けしからん」と大変激怒されて、三四会に申し出をして下さって、私の兄を「故人」として名前だけでも、三四会名簿に、それ以後、載せて頂けるようになりました。その時の激怒された先生の御言葉の中にも、また先生のお顔の表情にも、同期生を思う、そして友人を思う厚い熱情を感じ、感激して思わず私は涙ぐんでしまったこと覚えています。亡くなった兄に岩原先生の、この厚い友情を伝えることは出来ませんでした。母にこの経緯を伝えましたら、先生の御厚意に手を合せて感謝申しあげておりました。このことから判るように兄とは学生時代からの親友であったようです。岩原先生が学生でいられた昭和の初期は、私の家は北海道旭川市近くの貧しい農村で父が開業していました。先生の学生時代には、夏休みや冬休みに兄と一緒に東京から北海道の私の家によくおいでになりました。先生も兄も登山が好きで山岳部員でいられたようです。私の家はその当時から有名だった層雲峡に近く、大雪山系の連峰を朝夕眺めうるところにありましたから、山のお好きな先生には気に入られたと思われれます。こんなわけで私と

先生との最初の出会いは、私が幼児であった北海道時代ということになります。幼くて記憶もはっきりしません。が、格別に小さかった私は先生の、あぐらの膝の上のせられて、チビ子、チビと、ひやかされ乍ら可愛がって下さったことだけは、はっきり覚えています。その後二〇年もたってから、弟子として先生の教室にお世話になるなどとは夢にも思いませんでした。これらのことは「ふるさと」六〇周年記念号にも記したところですが、その他に、先生を含めて雪山に登山した兄たちが、山頂でお金がなくなり、兄から「カネスグオクレ」のウナ電がきて、母が、こぼし乍らも、山小屋宛に電報為替で送金していたことを思い出します。学生時代は、先生をはじめ登山などして遊べば、みなさんフトコロは淋しかつたように思われます。このような学生時代の、或る時々貧しさが、そうさせたのかどうかは私には判りませんが、先生や兄たちが、昭和初期当時の、いわゆる「無産党」に興味を持たれていたかのように、当時その方の運動家であった「大杉榮」を研究したこともあるというお話を聞いたことがあります。それを裏づけるかのように、みなさんが東京に帰ったあとの北海道の私の家の押入れの布団の奥には、赤い表紙や黒い表紙の左翼関係のものと思われる本が、かくされていたことがあります。左翼

関係に弾圧のきびしかった当時としては、そうせざるを得なかったようです。その後、兄たちがその方面の道に深入りしなかつことは言うに及びません。岩原先生や兄から、このような関係のことは全く想像も出来かねる話ですが、私の亡くなった母に云わせると、その当時、大杉榮たちに深酔した人たちは、極端に貧しかった人たちか、すばらしく頭のいい人間かであったと申して、先生や兄たちは後者に属していたと少々自慢気な話をしてきたことを覚えています。母の云っていたことが当たっているかどうかは別として、先生をめぐる知られざる逸話の一つと思われれます。母と云えば岩原先生は、私の母を大変尊敬していて下さいました。「あなたのお母さんは教育に熱心な、すばらしいお母さんだ。だから君も私のもとで勉強してお母さんの期待に答えなさい」とよく云われました。未熟なままに開業を始めようとした時に、丁寧な御手紙を戴き「開業は邪道である、僕の教室で、もっと勉強しなさい。僕は引き受けたからには責任を持って君の一生の面倒をみる」とまで云って戴きました。不肖の弟子であった私は今更らのように自分を恥じ、弟子を思う責任感の強い先生に感激した次第です。教室では、きびしい、こわい先生とのことでしたが、私はどういふわけか先生には余り気を使うことなく何でもお話が

出来たように思いますし、先生も至らぬ私の話を聞いて下さいました。たまたまお話が「学位」のことに及び私が生意気にも「学位などいりません、それよりもむしろ臨床に力を入れたい」という意味のことを申しあげましたら「君のいうことも判るけれど学位はあっても、足の裏に、くっついた米粒ほどにも邪魔にならないものだから勉強して御らん」と悟されたことがあります。また慶応病院の院長時代に、院長室に先生をお訪ねして「医局員の大半が無給というのはいかがかと思ひます。慶応は世間ではお金持ちと云われています。何とか全員有給に出来ないものでしょうか」とお尋ねしたことがありますが、先生は「そうしてあげたいのは山々だけれど、学問研究にはお金がかかる、日本は学問・研究に国の補助が少なすぎる、アメリカ人は無器用だけれど、お金があるから、ほとんどん研究が成果をあげている。器用な日本人にアメリカ程にお金があれば、日本の医学は、とうにアメリカの医学を追い越している筈だ。学問・研究のためにお金が、まだまだ不足している現状を認識して、君たちの目下の無給を我慢してほしい」と懇々と話されました。厚かましく全員有給制度を要求した私でしたが、先生の学問、研究に対する、ほとばしるような情熱には抗すべくもなく、理屈ぬきで従わざるを得なかったという

思い出もあります。

ここにのせて戴いた岩原先生御夫妻の御写真は、先生の新婚時代のものです。これは六〇周年記念号にものせて戴いたのですが、実は、この写真は親友であった私の兄が、新婚ホヤホヤの先生の家から、茶目つきで、そつと失敬していたという、いわくつきの写真なのです。ですから岩原先生御夫妻が後日この写真をいくら探しても見当らず、おかしいと思っていられそうです。それもその筈、この写真を失敬して、サンパウロまで持って行ってしまったのです。兄亡きあと五〇年ぶりに日本を訪ねてきたその姉が、サンパウロから持参し、先生御夫妻に五〇年ぶりにやっとお返しすることが出来たものです。先生御存命中にお返しすることが出来たことがせめてもの思いです。

先生が邪道ときめつけられた開業をしてから二十数年になります。不肖乍ら先生との思い出を大切に邪道の中に正道の光をみつめつつ勉強していきたいと思っ

岩原先生御生前、同期生として御親交戴いた亡兄の家内（サンパウロ市在住）の追憶の手紙です。

岩原先生がお亡くなりになりましたはや一周忌をお迎えいたしました。まことに夢のようでございます。先生は自然を愛され、山登りなどことにお好きでしたようでございますが、ある夏のこと「北海道めぐり」山歩きをされましたようでございます。北海道中部の比布村を知られ隣町旭川でアイヌ部落（北海道最大）を訪ねられ大雪山国立公園の層雲峡温泉に遊ばれました。原始森林、かれんな高山植物の美しさ、お花畑ではエゾシヤクナゲ、エゾサクラ、エゾツツジなどの群落、お花のお好きな先生はどんなに感激されたかと思えます。

大雪山には特有の蝶が各種おりおめづらしくごらんになりましたでしょうと思えます。動物ではどうもうな熊はもちろん、りす、うさぎなど、たくさんおりますし、その時分（大正十年頃）は登山者も少なくて、この大自然の雄大な状況の中で感慨ふかくあられましたかと存じます。次の町遠軽では留岡幸助先生の家産学校を訪問され、自然環境の中の青少年教育をごらんになり興味を持たれたかもしれせん。そこからオホーツク海方面に出られ、網走の町につづく小清水、斜理の湿原、砂丘地帯の原生花園をごらんになりましたことと思えます。六月、七月、八月の最盛期にはハマナス、エゾキスゲ、エゾスカシユリなど一せいに咲き揃い壯観な眺望、これ

が果てしなくオホーツク海岸辺りを北の端までつづいて  
いると申します。先生のお目を楽しませたことと思いま  
す。北辺の海オホーツク海は南の海に比べていかがでご  
ざいましたでしょうか。

美幌、弟子屈と進み、大雪山系の阿寒湖、屈斜路湖、  
摩周湖、ここで摩周湖の神秘の美しさに思わず息をのま  
れたことと思います。

この辺りはここかしこに湖あり沼あり山あり谷あり温  
泉あり原始の森林ありの大自然、夏でも空気は冷えびえ  
とする中に野鳥のさえずり、蟬の声、虫もすだくの自然  
の音楽もきかれましたと思います。

森林野山を歩く時、熊の襲来がおそろしかったとのこ  
とでございます。

太平洋方面の登別温泉は有名な大温泉、設備もよく旅  
のつかれを十分にいやされましたと思います。室蘭市、  
洞爺湖、支笏湖、小樽、札幌を見物され札幌近くの定山  
溪温泉にも立寄られ、ご無事出発点比布村にお帰着にな  
りました。

北海道の盛夏、七・八月は豊かな農産物にめぐまれま  
す。上川平野の肥沃の土地に産しましたとうもろこし、  
すいか、メロン、ばれいしょなどたくさんお召上り下さ  
いましたかと思っております。

岩原先生に最近お目にかかりましたのは今から十二年  
ほど前になります。整形外科医二男夫婦と一緒にござい  
ましたが「なつかしいナー」と申され、大そうよろこ  
び下さいました。色々とお話を承りまことにうれしく存  
じました。奥村が元気でおりましたならどんなによろこ  
びましたことでしょうか。

お宅は閑静な広々とした地域で先生はのうのうとお幸  
せにお暮しのご様子で、まことにお元気でございました。  
お庭のお手入れはもちろん、大きな木々の枝はらいなど  
遊ばすのではないのでしょうか。このお家は奥様がおつく  
りになったと申されました。お一人で何も彼もとりしき  
られ先生を少しもおわづらわせずすることなく完成されま  
したそうでございます。「知らぬ間に家ができて上がって  
いたので」と申されました。奥様は何でもよくお出来  
になり、先生はご自身のご活動に専念されたようござ  
います。先生は奥様を深くご信頼のご様子でございます  
。奥様はお料理がまことにお上手でお客様のおもてな  
しは奥様が一切を引受けられていらっしゃいますようで、  
外国のお客様も大そうおよろこびになりますそうござ  
います。私共も奥様のお料理を頂戴いたしましたがかまこ  
とに結構なもので、あのお味は今でも忘れられません。

毎日美味しいお食事をされます先生は何とご満足の御

事かとおよろこび申し上げます。

一九八二年六月の頃かと存じますが、はからずも病床の岩原先生をお見舞い申し上げます。「親友が来た」「親友が来た」と大そうおよろこび下さいました。私のかたえに亡奥村の姿をごらんになりましたのでしょうか。「ブラジルに行きたい、ブラジルに行きたい」ブラジリアの病院のリハビリテーションをみたいと何度も何度も申されました。どんなにかブラジルにおいてになりたくいらっしやいましたのでございましょう。ご病床の身をどれほど残念に思いになりましたでしょう。涙を流されました。

一日もお早くおなおりになり是非ブラジルにおいて下さいませお願い申し上げます、ご来伯の日をお待ちいたしました。先生は遂に永遠の眠りにつかれ先生をこの地にお迎え申し上げますことは空しいものとなりまして、まことに残念の極みでございませ。先生のご平安とご冥福を心からお祈り申し上げます。

昨年七月ご来聖中の富士川恭輔先生にお目にかからせて頂き、その折岩原先生ご生前の御事どもつぶさに承わらせて頂きました。先生は岩原先生の最後のお弟子さまであられます由。岩原先生の数々のエピソードはいづれもほのぼのと心温まる佳話で先生は時に「クックッ」と

おわらいになりながら、いかにもなつかしそうにお話し下さいました。岩原先生は無邪気でお心の温かいお方でいらっしやいますと思えました。

多くのご病人、学生さま方、ご友人の方々のよき師、よき友としてよいお働きを遊ばし、多くの方々から愛されました先生は、まことに偉大なお方と感銘いたしました。在天の岩原先生の御霊のご平安とご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成元年六月 奥村和 記

## 岩原先生の笑顔

宇井 恵 治 (34)

此の題を見て「おやっ」と思われる先生方も居られるものと思えます。それと云うのも先生の学問・診療・研究に対する態度は厳格そのものであり、余り笑顔など思いつ出されないのではないかと思います。

私が佐原市に整形外科を開業して十年余り経ち、建物も老朽化したので、新築し、昭和五十二年二月十三日新築披露宴を成田のホテルで催し、岩原先生御夫妻の御臨

席を頂きました。開宴の前、丁度開港前の新国際空港を御案内し喜んで頂きました。宴の最後に、慶応医学部卒業生数名(各科)で私の下手なアコーディオン伴奏によって『岡の上』を唄う事になりました。舞台上がって用意していると、遙かむこうに居られる岩原先生が、やおろ降りて来られ、私共の中に加わり、一緒に唄うと云われ、私が用意した歌詞をお渡しすると、『歌詞は覚えているからいらぬ』と云われ、オクターブ高い先生の張りのあるあの独特のお声で、一緒に唄い出されました。一番だけで終わりにしようとしますと、私の顔を見て、二番もやれという合図をされましたので、続けて弾き、唄い終えると、『我が塾も大したものだ』と、童顔の様な笑顔をされ、その面影が、私が先生との思い出に残る最後でありました。帰りに成田駅迄お送りする車の中で、『宇井君は流石佐原市長の兄さんだけあって挨拶が上手だ』と褒められた事は、余り褒める事をしなかつた先生に云われた事で、今でも嬉しく印象深く残って居ります。

また。側の岩原先生に軽く会釈をして立たれますと、岩原先生は頭に手を乗せ苦笑いをされ、その苦笑いは、私が初めての発表であり、果して上手に答えられるかと云う不安を持ったものと感じました。質問には無事答えられ、ほっとした訳ですが、翌日病棟でカルテを整理して居ると、後からボンと肩を叩かれ、びっくりして振り返ると、何と先生がニコニコして立って居られ、『昨日はよく出来たぞ』と褒めて頂き、改めて先生の人柄に深く感銘を覚えました。そして私の主論文の発表は第三十四回日整会の北大で発表し、終ってアトラクションが盛大に催されました。その時、岩原先生も上機嫌で酔って、可成り顔を紅潮させ、その時のコンパニオン北海道の女性を、褒めて居られましたので私が『先生、北海道の女性はすれていませんね』と云うとすかさず『そうだ、すれていないんだ』と云う言葉が返って来ました。その時の先生のお顔は本当にニコヤカそのものでした。

又、私が病室の患者でギブスを巻いた時に太った女性を胴から足迄巻いたズンドウのギブスをみて、その不格好なスタイルに病状を聞かれるどころか、指をさして大笑いをされ、反対に恐縮し当惑したことを覚えて居ります。

又、私が岩原先生の外来診察のムンテラ係になった時、

診察の円滑化に心を配って居るのを、他の先生に「宇井君は、随分僕の診察に気を使って居るな」と洩され、改めて先生の人情味に頭の下がる思いでした。

そして年移り、昭和三十九年七月浜松日赤の整形外科医長として初めて勤務し、関聯病院医長会に出席した時、たまたま、トイレで先生と相並ぶ仲になり、先生から「新医長さんどうですか」とニコニコと声をかけられ「ハア何とか頑張ってます」とトイレ談義をした事が懐かしく想い出されます。

そして私が整形外科医局を辞する時に、先生に書いて頂いた「鬼手佛心」を見るにつけ岩原先生の笑顔の面影が二重写しになって見える感じのする今日此頃であります。謹んで先生の御冥福をお祈り致します。

### 三方原の大根

月村 泰治 (35)

入局して三十年も過ぎますと、昔のことが懐かしく思い出されます。私が入局した頃の岩原先生はいわゆる天皇といわれる程の権力者であったと思います。教授室に

入るだけでも大変恐れ多い事であったように記憶しています。はじめて論文のお墨附（原稿用紙を3cm巾位に縦切りにして、題名が4B位の濃い鉛筆で書かれていたもの）を戴きに教授室に入った時は足が震えたものでした。主論文のテーマは当時一連の骨長径成長に関するシリーズの終わりに近いものでした。終末成長まで経過をみるのに、仲々兎が生きてくれず、苦労したものでしたが、そのために兎もかなり使いました。昼食会の席で伝票に印をおされながら「兎を使い過ぎるぞ」とおこられた事もあります。先輩の先生方にそれは仕方がないよと慰められたのが救いでありました。

年が立つにつれて岩原流の論文の書き方を覚え、余りお小言を頂戴しなくなる様になると主論文が合格するという次第でした。

先天股脱治療以後のO脚の推移を調べるようにといわれて、ロングフィルムを放射線科で初めて採用してもらったのが私ですが、先生には申し上げなかったところ「教授会で整形から長尺フィルムの請求が出ていると春名教授から言われたが、ワシは知らなかった」とおこられ、こんな事でも教授会にかかるのかなとびっくりしたものでした。

そうした一面、教授室で御自分でお茶を入れて下さっ

たり、いろいろとお教え下さったりしました。また、椎後方固定の手術が少し長びいて、外科の島田教授の手術が遅れるというので、外科の医局長に怒鳴られた後、松井医局長と先生のところにお詫びに伺った際に、逆に慰められて胸をなで下したもので、松井先生から「オヤジさんはそういう人だよ」と言われ、そうだなと感じたのをはっきりと覚えています。

頑固で厳しい一面、弟子思いの優しいところも多く、私が重心図の研究で日本肢体不自由児協会から高木賞を受賞した時、お知らせをしなかったのですが、わざわざ会場において下さり列席され、祝会の帰りに「一杯飲もうか」と言われ、お宅まで連れて行って下さり、奥様のお手料理で御馳走をして祝って下されたことは、私のこれまでの人生の中で最もうれしかったことであります。ほんとうに喜んで下され、先生の好々爺の面を充分みせていただきました。帰りにはジョニ黒にサインをしてプレゼントをして下さいました。奥様はもともと優しい方ですが、岩原先生の優しさ、温かさがつくづく身にしました。

私が浜松に赴任してから、一度、奥様とお出掛け下さいました。楽しい一日を過ごして戴きましたが、三方原の大根の話が出、これが沢庵漬には一番良く合うよ、

という事で、それから毎年年末にお届けしましたが、御馳走になり、帰りには先生のお漬けになった、どこにも売っていない味の、ほんとうにおいしいタクアンをいただき、また四国の名物などをお土産にいただいでくるのが恒例になっておりました。「誰それ君にあげたよ」、「喜んでいたよ」という沢庵の自慢話の中に偉い先生方の名前がでてきたり、楽しい一時を過ごさせていたのだいものでした。今ではそれもなくなり、いささか寂しさを感じているところであります。三方原の大根の中に岩原先生の思い出が入っており、懐かしさを感じているこの頃であります。

鬼手佛心という書を学位授与のお祝いにいただきましたが、先生の厳しさと優しさの両面が思い出され、日本一の立派な恩師に育てていただいたという幸福感を少し感じていますこの頃です。

### 岩原先生の学生から見た印象

野末 洋

(36)

今から三十余年前、私が医学部に入りたての頃、今の

雑誌で云えば「現代」にあたる月刊誌があった。それに全国の医学部の評判記の連載があった。

東大医学部の次に慶応の医学部の記事が第二回目として載っており、まるで自分の事のようにむさぼる様に読んだ記憶がある。

その中に慶応の関東における勢力ぶりや、名物教授の評判記がつづいていた。その中で生理の加藤元一教授や、臨床では岩原教授の名前があった。

これが、恐らく私が岩原教授と縁があった原点ではないかと思う。

脊髄外科の大家、頑固な名物教授等の形容詞が並んでいたものと記憶している。

実際にお目にかかったのは学三か学四かの臨床講義であつた。

大勢の医局員をしたがえ、ニコニコと白衣で決して端正な学者の顔ではなかったが、威勢のよい恰好で臨床講堂にお出ましになるのは私の目にまだ残像がある。

講義は陽気なハッキリした口調で始まる。その内容は先股脱あり、頸上骨折あり、分娩時骨折等であつたと思うが、内容は余りはつきりとは思ひ出せない。余り興味をひく学科でなかったからなのだろうか。

やはり学生時代は面白論理にひかれる。私の場合、女

性ホルモンと対応する肉体的変化は面白かつたし、解らない内科の方が面白そうだとも思った。又当時アメリカから帰って来られた脳外科の工藤教授が、ほとんど毎週脳腫瘍の症例供覧して下さつたし、よく毎週症例があるものだと関心もしていた。

それにひきかえ、整形の題材は決して派手なものではなかった。別館の臨床講堂は暗くて旧式だつたせいもある。

でも今だに、はっきり覚えている一連の岩原教授の言語なり印象がある。

「整形外科は将来拡がりこそすれ、小さくなる事はない」

「原子爆弾がおちれば、奇形はふえるし、交通事故がふえれば、骨折もふえる」

「この岩原がいうのだから間違いないのだ」  
と整形外科は陽の登る帝園であり世界を支配するのだとばかりに、響く御託宣は私にとって神の声と聞こえたのである。私が整形外科を志した直接動機は又一寸と違うのだが。

いづれにせよ、私はあの当時から岩原教授の「現世御利益」を説く岩原教授に感染したのだろうと思つている。又こういう印象が一番残るのだから自分自身現世に一番

強い執念があったのだろうと思っっている。

加藤元一教授のいささか古いが情熱が伝わる講義や、より学問的でありたいとした教授が多かった内で、「金にもなるぞ」だから整形を選べと、私はとったが、「学問も金もあるぞ」と説かれた姿は珍しかった。

当時は池田首相の所得増政策が始まる前ではなかったが、戦後のある貧しさを終わりにしたいとする私達の耳をひっかけたものだったのだろうと思っっている。

実際昭和三十年代から整形の入局者はふえ始め、整形外科がマイナーとは言えなくなり、現在のこの様な隆盛になった姿の土壌として高度成長期の社会発展があった事は否めない事実であろう。

今から見ると全くうなづける事で「この岩原が言った通りだろう」と墓の中からニコニコしながら、腰に手をあてながら演説する姿が映像としてダブって来る感がある。

## 岩原先生を偲んで

藤野豊美 (36)

人の価値は、死んでから分かると、良く云われる。

先般、岩原先生の一周忌が小田原のお寺で催され、その後の会が大磯プリンスホテル別館（旧吉田茂邸）で行なわれた。どちらも多数の参加者があり盛会であった。

一方、先頃形成外科のある先生が亡くなられたのでお葬式に行った。多数の方が会葬に見えた。しかし火葬場には雨天だったせいか形成外科関係者は四名、お骨を拾って差し上げたのは部外者の筆者一人だった。岩原先生の時とは雲泥の差がある故に、これだけの大家にして、と意外であった。私学と国立の差なのか。いずれにしても我々の生活環境からは釈然としない出来事であった。だから一周忌のときはどうなんだろうと他人ごとながら心配をしている。こんな訳で今更ながら岩原先生の功績は大きかったんだなーと意を強くした日でもあった。形成外科の創設もその一つである。

現在あらゆる分野でのコンピューターの進出は目覚ましい。形成外科では我々が一九七四―七五年に初めてコンピューターを使用して眼窩床骨折の発生機序を二次元、

三次元モデルで解析し座屈骨折説を確立した。その後、三次元CTによる頭蓋顔面外科でのシミュレーションが開発された。整形外科では関節外科や脊髄外科での研究報告がある。その他心臓外科、耳鼻科、腎臓外科などでも研究が盛んになりつつある。これらを総合してシミュレーション外科simulation surgeryという概念conceptを提唱した(日外会誌九〇(八):一一三七—一一三九、一九八九)。来たるべき二一世紀の医学の発展を考える時、この概念は避けて通ることはできないと思う。今後一層発展を遂げるものと思われるが、その功罪は後世に委ねられることは云うまでもない(平成元年八月一日記)。

## 不肖の弟子の弁

富田 恭弘 (37)

学四の時、病院の廊下で、友人等が向こうから来るガツシリとした観骨隆々の白衣の男性におじぎをする「何を卑屈に、ペコペコする」とからかったら、「バカ、あの人は整形の教授だ」といわれた。その頃には整形の単位はみな終わっていたから、サボって一回も出なかったことがばれた。入局も口頭試問で「入局しますから」と月並なことをいったら、泉田前教授が講師の頃で、パスしてくれただけ。約束を守って入局。新人が始めて教授のお宅へおよばれた夜、ビールパイ位いただいて「お先へ失礼します」と帰って来てしまった。実状は当時恋愛中の現家内が、翌日手術をする予定だったのだが、「ああいうのは初めてだ」と、おっしゃったとか。その夜奥様手作りのカツオのタタキをいただき、東京のサシミしかしらない者には、目から鱗が落ちる程うまかった。(あんなうまいタタキは、あれ以来お目にかかっていない)。もっとも入局してすぐ王先生(三十三回)に、北京ダックをこれも生まれて始めて、ご馳走になった時も鱗が落ちる思いをした。単純だから高尚なものでなくても、す

ぐ目の鱗が落ちるのである。社会人になると、やはり美味いものがくえるのだなあと痛感した。仕事のテーマをいただいても、グズグズしているから出張先まで催促が来る。泣き事を書きつらねて弁解の手紙を出した。ところが、教室へ顔を出すと「エイコ、病気だろう」とか「ギックリ腰したろ」とかみんな、いやにこちらの家庭の内情にくわしい。倭約の先生は手紙の裏を教室員の連絡メモがわりに使われるので、特徴のある僕の字では、すぐ判ってしまうわけ。

同級生がみな、仕事を完成してシマイ、語学試験を受けるのみとなった。「一緒にうけよう」とさそわれたので、こちらは何もできていないのに、肝だめしのつもりで受けたところ、どうした風の吹きまわしか、僕だけ受かってしまった。相手がいないのに結婚式場を予約したみたいになったので、語学試験の有効期間内にと、大車輪となって、まとめあげた。先生はまさか前後関係が逆とはご存知ないから、めずらしくほめられた。

時効だから書くが、その時出張先での仕事の経費を黙って慶応の伝票を切ってくれたのが、平塚で開業している当時の松井（デカ松）医局長である。体も肝もデカいと今でも頭が上がらない。

教授室へこいといわれて、先生の前へすわるとお茶が

でる。このお茶が玉露なのはいいが、先生はあくまでも正攻法でいれてくださるので、ぬるい湯を何回もかけて時間がかる。「君はこの頃勉強しすぎだ、体に悪いから少し遊べ」、などと絶対いわれっこないから、待っているこの間がづらい。たいていの重大犯罪なら自白してしまう雰囲気である。

夏の日、一計を案じアイスクリームを買って行った。「先生、これを買って来ました」とさし出すと、さすがに少しおどろかれたが、すんなりめし上がってくれた。もっとも奇襲作戦だから、二番せんじはきかなかった。

今は他の大学の方と会う機会も多いが、岩原門下と名乗ると我々より上の世代は学会での先生の勇姿が脳裏にあるので、何となく一目おいてくれるような気がするし、自分でも、九代目団十郎におどりの手ほどきをうけた六代目が、もっていた矜持みたいなものが身内に息しているのがわかる。

## 不肖の弟子

村尾 眞 俊 (特)

私が慶応に入局したのは昭和三十四年四月二日の事です。フレッシュマンの六カ月の研修が終わる十月の中頃、十一月一日から高岡に出張するようになると、当時の木住野医局長に命令を受けました。高岡市民病院は渡辺治夫院長以下、整形の医長は野間清邦先生、その下に一年先輩の細川昌俊先生がおられました。細川先生の交替として鈴木邦夫先生が十二月からお見えになり、現在もそのまま居らっしゃるのは皆様ご存じの通りです。

余談はさておき、岩原先生の大変お嫌いであったゴルフの話に移りたいのですが、その前に私のゴルフとの係わりを述べてみます。

さて私の実家は福岡県の南端にある大牟田という地方都市で、産婦人科病院を開業しています。父は戦前からのゴルフアード、家の敷地の中にインドアアの練習場を作り、仲間も呼んで毎日仕事の合間をみて練習していました。私も小学校の五、六年生になった頃、見よう見ねでボールを打ってみたところ、最初は空振りばかりでしたが、そのうち何とか当たるようになり、ひまな時に

はクラブを振り回して結構いい当たりをするようになっていました。

昭和十八年頃から戦争が激しくなり、ゴルフなどするのは非国民ということで、父は隠れてコースに出ていましたが、昭和十九年になってからはコースが閉鎖され、最後は食料生産のため、芋畠になっていました。

いよいよ戦争も終わりに近づき、ゴルフどころではなくなってきましたが、父は俺も戦争で死ぬんだから、ということでもゴルフ道具は疎開しないで、床下にほうり込んでいました。そして大牟田の町も昭和二十年七月に二回の空襲をうけ、二度目の空襲のさい全焼しました。戦後その焼け跡から、真っ赤に焼け錆びたゴルフのシャフトが大量に出てきて、生きのびた父がそれを見て嘆いたのはいうまでもありません。

昭和二十三年には、インドアアの練習場を再び作り、皆でゴルフの練習を始めました。戦後の混乱が終わわり、昭和二十五年の正月に家族で雲仙に旅行に出掛けただけ、父が兄と私を雲仙ゴルフコースに、つれて行くことになるようになりました。なにせ二人共コースに出るのは初めてなので、それはもう大騒ぎでした。何とか皆借り物でコースに出て、途中まではなんとかあったのですが、ギブアップしたホールがあったりして、残念ながら最初

のゴルフのスコアの記録はありません。

その後ときどき父に久留米のブリヂストンGCに連れて行ってもらったり、また昭和三十年からは町外れに出来たパブリックのコースで、月一回程度コースにでていました。

さて、昭和三十五年当時の高岡市民病院には、誰もゴルフをする人はいないと思っていたところ、渡辺治夫院長が呉羽カントリーのメンバーで、ゴルフをなさっていることを職員に教えてもらいました。フレッシュマンのぶんざいで言いだしにくかったのですが、上司の野間、鈴木の両先生に無理にお願いして、月一回だけゴルフのために休みを下さいと申し出たところ、まあ仕方ないだろうと言うことで、お許しができました。然し、考えて見るとゴルフはかなり高い遊びでして、当時の月給が月一万二千円位なのに、呉羽GCまでのタクシー代とプレー費で三千円近くかかりました。当時の下宿代が四千元、病院での食事代が千五百円程かかり、一回ゴルフに行くともう後何も遊ぶ資金もなく、その後の生活に苦労しました。それでも十二月まで毎月一回呉羽GCに通いました。最初はこんな雪国に、ろくなゴルフ場はあるまいと思っただけで驚きました。九州のコースより遙かに綺麗に整備された、フェアウエーとグリーンがあった

のです。芝が良いのは九州などと違って、芝の弱った時期に雪が積もり、寧ろ芝を守っているからだと思います。出張が終わる頃には月一回ゴルフのせいで、ハーフ四五前後で廻れるようになっていました。

昭和三十六年十二月でフレッシュマンの出張も終わり、また慶応に帰ってきたのですが、当時の医局ではゴルフの話など話題に出来ませんでした。蛇の道はなんとやらで、数年前に無くなられた米谷先生や高橋昭先生、城所先生等がゴルフをされる事がわかり、一つ何とか隠れてゴルフをしようという事になりました。

米谷先生のお世話で三十七年春のある日曜日に、藤沢のパブリックで初めてコンペを行いました。スコアのほうはおおよそ米谷先生が四十の前半、私は四十五前後、城所先生がその中間ぐらい、高橋先生は五十五前後だったとおもいます。慶応にいた時は時間も金もないので、年二〜三程度しか出来ませんでした。その後山根、並木先生等も加わり段々仲間が増えてきました。小生は昭和三十七年から中南国保病院（現平塚市民病院）に出張になりました。ここでもゴルフをする人は誰もいませんでしたので、パブリックの大磯ゴルフコースや平塚ゴルフクラブなどにでかけ月一回程度楽しんでいました。

昭和三十八年に慶応に戻りましたが、その頃の土曜の

会食の際などでの世間はなしで、岩原先生はテレビとゴルフは絶対よくないということを、時々言っておられました。理由はおっしゃらなかったので良くわからないのですが、恐らく勉強の邪魔になるという事だったと思います。さすがに教授の前ではゴルフの話は全然出来ませんでしたが、教授がいっしょじゃない時は、テレビ同様ゴルフの話はそんなに秘密ではなく、出来るようになっていました。然し未だ隠れてゴルフをしている感じは否めず、これを改善？するにはまず講師を仲間にいれるしかないというのが仲間内の結論でした。

オリンピックが終わり、昭和四十年になると医局には、松井先生が講師としておられました。先生は皆さんご存じのように、スポーツマンタイプとは少し違うので、先生にゴルフを教えるのは大変な難事業と思われました。然し話は着々と進み、恐らく故米谷先生が世話されたのと思いますが、まずゴルフクラブのセットを松井先生に買わせることに成功し、練習場にもお連れして可なり早い時期に、コースに出られる程度に上達され、同好者一同まずはひと安心したものです。

確か四十年の春頃、藤沢バブリックに二組のスタートがとれて、米谷、高橋、田中、並木、山根の諸先生に私といったメンバーで御一緒しましたが、何せ先生は背が

高いのでクラブが小さく見えて、背を丸めて球に向かっていられる姿は、可愛らしいものでした。その後は一挙にゴルフ仲間が増えていきました。

昭和四十年夏に私は足利日赤に出張を命ぜられました。桜田先生が退職された後に、今井先生も当時新しい部長になられ、現地では大変なことでした。当時の足利日赤は小野院長以下ゴルフが盛んで、年数回コンペが行われていました。私もすぐ参加したかったのですが、困った事に今井先生がゴルフをされないのです。これは何としても今井先生にゴルフを教えて、仲間に入れるしかないと思えました。幸い病院の駐車場の隅にネットを張っただけの練習場があり、昼休みになるとみんな練習をしていました。

初秋の或る日、今井部長に先生も一つ球を打って見ませんか、と何となくすすめた所、試しにじゃあ打ってみようという事になりました。グリップ、スタンス、ティクバック、インパクト、フォロースルーなどを教えられました。なかなか初めてにはお上手でしたが、時には空振りダフリもあるものの、何とかゴルフを初めて頂かねばならぬので、皆でほめそやし、激励につぐ激励をして練習を続けて頂きました。河原の打ちっぱなしの練習場にもお連れして、ゴルフの面白さを理解して頂くの

に、そんなに時間はかかりませんでした。なんとかこれでおおっぴらにゴルフができる、当時一緒だった石下先生、樋口先生達と喜びあったものです。二ヶ月もたった頃には病院のコンペに参加して頂き、なんとか一人前のゴルフファーに成長され、ほっとしたものです。

そのうち病院のコンペにも参加されるようになり、半年ほどたって行われた伊香保国際でのコンペでは、先生の研究と努力の結果が表り、見事優勝されました。

ご存じのように先生はすべて学究的な方ですので、ゴルフに対しても理論的に考えておられ、球を打つ前にグリップはどうか、スタンスは正しいか、テイクバックはどうとるか、左の肘はトップで良く伸びているか、腰は回っているか等などチェックしてショットされます。だからショットまででどうしても時間がかかるのです。あるときのコンペで御一緒した時、いつものようにじくじくと時間をかけてチェックしておられるので、それは失敗した後いろいろ考えるより、打つまえに良く考えるべきだと思えますと、一言私が申し上げたのですが、先生はそのひと言を以後忠実に守っていらっしゃるようで、まわりの諸先生からお前の教え方が悪かったからだと思われ、全くその点は私の責任であると恐縮しているしいであります。

たしか昭和四十年に軽井沢で東日本整形外科学会が行われ、そのとき学会主催のゴルフコンペが挙行され米谷先生が参加して、実力が物をいみごと優勝されたのです。ご本人も回りもそれを隠していたのですが、よその教授からそのニュースが岩原教授に伝わり「米谷君きみはゴルフがうまいそうじゃな」と突然言われてびっくりしてさすがの米谷先生も返事に窮したという事があったようです。これは松井先生らかお聞きした話ですが或るとき高橋（昭）先生もゴルフをしている事がばれたらしく、たしか会食のおり岩原教授から「君もゴルフをしているんだって？とうとう功なり名を遂げられましたか……ハハハ」といわれ高橋先生も返事に困り、まいったまいったと言っておられたという事です。

さて岩原教授が昭和四十二年に引退され池田教授に変わられてからは教室でのゴルフは解禁され、教室主催のゴルフコンペが行われるようになって現在ではゴルフをしない先生が珍しいような状況になってきました。中国での民主化は失敗したようですが、医局でのゴルフ改革は大成功をみたようです。このごろではゴルフをしない先生の方が珍しいのではないかと思われます。

このように盛んになったゴルフを見てこのごろ思い当たったのですが、岩原先生は今の状態になるのをあの当

時から予見されていたのだと思います。だから亡国の遊びだとか、若い者のする遊びではないとか、功なり名遂げてからするものだ等などと言う言葉に、今こそ耳を傾けなければいけないように思えるのです。私自身このころ出張でみえる若い先生がたに、ゴルフをしますか？とは聞きますが、ゴルフを始めなさいとか無理に教えることはしなくなりました。まれにゴルフをしない先生にあって、「それは結構なことです。ゴルフなんかは若い人にとってはほとんど運動にならないし、走れなくなった時に始めたらよい遊びです。」などと二十年前と全く違ったことを言っています。

亡くなられて一年余、増え過ぎたゴルフファーを見るにつけ、岩原先生の言われたことは本当だったとおもいます。テレビに関しては多少同意できない所もあります。私も言いたい「ゴルフは亡国の遊びだ！若いものがするもんじゃない！」と。

岩原先生の指導を守らなかつた不肖の弟子とこれからゴルフの衰退を願ひ、このつまらない一文を先生の霊前に捧げます。合掌……

(かなり古い話で事実と違っている所もあると思います。がご容赦のほどお願いします)

## 追悼 岩原寅猪先生

平林 冽 (39)

先生は、昭和五年整形外科教室への入室を機に、前田和三郎先代教授から「脊椎・脊髓」領域の担当を命ぜられ、以来それがライフワークになったという。脊椎・脊髓の学問的分野のみに留まらず、応召中に経験した数多くの脊椎戦傷における実績から、世界で初めての脊椎損傷の専門施設である国立箱根療養所所長の兼任を命ぜられ、パラプレジア患者の社会復帰や福祉の面でも多大の貢献を果たした。

研究面では、先代から受け継いだ骨折の保存療法、その中でも特に牽引療法の裏付けとなる基礎的研究を始め、仙腸関節外科、腰椎椎体前方固定術、頸椎症性脊髓症、脊髓外科と整形外科との橋渡しの研究ともなった麻痺域における移植の問題、その潜在活力に瞠目した骨端線ならびに滑膜の研究などに多大の新知見をもたらした。

脊椎・脊髓外科の研究をもって出発した先生は、終段では再び脊椎外科の研究に戻って研究面での終着としようとした。昭和三十年代後半にいち早く学際的な研究方法を取り入れたcinematographyや光弾性学的研究、猿

を用いたbiomechanicalな研究などがそれらであり、今日の生体工学的研究の魁となった。それらは昭和四十一年の日整会総会における退職記念のさよなら講演となった映画“Disc Lesion—clinical entity of patho-logical conditions of the intervertebral disc”に結実したのであった。

先生は昭和四十一年、定年を待たずに退職されたが、記念の業績集出版に際して「得てして大部分はすぐ捨て去られる。そのような無駄はして欲しくない」と固辞されるのを、「先生の研究の歴史を辿り、その発想と発展過程を先生ご自身に解説して頂く」という企画を樹て漸く出版の許可が得られた。そして表装はことさら質素とし、内容はひと味違った教室業績集を先生にお渡しすることができたのだが、その時「こうして私の全業績がまとめられてみると、一つ一つができた時とまた異なった感じがして可愛い。子供達を世におくる思いがする」と、大変に喜んで頂けた。

事実、先生はわれわれ教室員を高千夫人ともどもわが子のように可愛がって下さった。折に触れて、ご自宅で先生ご自慢の、夫人の手による土佐料理のご接待にあずかった。元日には教室員は大学してお邪魔し、土佐の銘酒で文字通り身も心も温めて頂くのが常であった。

とはいえ教室では、高知出身の「いごっそう」そのままに、眼光炯炯としたあのいかつい顔と周囲を圧する大声は、われわれを震え上がらせるのに十分であり、総回診や症例検討会や予演会で落とされる雷は熾烈をきわめた。とくに最小の労力で最大の効率を上げようとする風潮を嫌われた。「自分は機転のまわる方ではない。しかし遠泳とボートで鍛えた根性だけは人に負けない」と、ご自分の仕事がそうであったように、一つのことをこつこつと地道にやり遂げるスタイルを好まれた。

先生が教職四十年の中で、これに割く時間のないことを最も嘆じておられた学生の教育、そんな先生の平易明解な臨床講義の魅力にひかれて先生の門を叩いた学生は私以外にも多いときく。付和雷同を嫌い、毀誉褒貶を意に介さず、自分の信念を貫く「いごっそう」ぶりから、いつしか“天皇”の威名を奉られていた先生も、患者や学生には実に情愛あふれる態度で接せられ、その誠実なお人柄がじかに伝わったきたものであった。それは又、教室員に敬愛されるだけでなく、他大学にも沢山の隠れたファンをもっておられた理由でもあった。

先生は「鬼手仏心」という言葉を好まれた。これこそが外科医の真髄であると信じておられた。脊椎・脊髄の外科をライフワークとしていた先生の病苦に悩む患者さ

んに対する熱い思いをそこにみる思いがする。

手術中には、神中先生の神技ぶりをよく話されたが、先生の脊椎・脊髓の手術も又、おそらくはそれに近いものであったと思われる。というのは、私などは当時、先生の手術をレジデントとして垣間みても名人芸の名人芸たる所以を理解する眼力など到底もち合わせている訳もなかったが、後年になって池田先生や泉田先生のリュエルやメスさばきを介して想像できるようになったからである。

しかしそれでも当時の医療レベルですべての手術がうまくいく訳はなく、そのような時、先生は「心の中で申し訳なかったと謝る。そして次の患者さんで必ずその反省を活かすようにしますから許して下さいと頼む」のだと、打ち明けて下さったものである。

先生は、無類の植木や土いじりの好きな方であった。地下足袋と軍手で木によじ登り、土に這う姿を誰れが高名、篤字の名医と判じえたであろうか。枝を切り、土に肥料をやりながら、その木に教室の姿をだぶらせつつ、その成長を楽しんでおられたのに違いない。小鳥や犬もこよなく愛された。

寒い冬の日、この植木好きが仇となり、庭の手入れのあと脳卒中に倒れられたのは七年前のことであった。幸

い失語症は免れ、もともと記憶力抜群の先生のことではあり、発作後もわれわれ以上に鮮明な昔語りをされ、びっくりさせられたこともしばしばであった。つい昨年末にも先生の監修になる弟子達の集大成『脊椎の外科』について早く改版を出すようにとのお小言を頂いたばかりであった。

古きよき時代の最後の教授として、手塩にかけた弟子づくり、教室づくりに満足され、晩年は常に周囲の人に感謝できるご自分の幸せを喜んでおられた。人の生きざまとして、これほど満ち足りた幸せはあるうか。

先生が確立した「脊髓の易損性」の概念と「脊椎のうしろには脊髓がある」の警句、そして脊椎外科研究会をはじめ数えきれない多くのものをわれわれに残して、心の師であり、学問の師であった巨星は逝ってしまわれた。今頃は天国で、互いに敬愛されていた故井上駿一先生と再会され、せぼね談義に花を咲かせておられるかもしれない。先生の御霊に対し、生前の大きな恩を感謝し、心よりご冥福をお祈りし、追悼の筆を擱く。

合掌

(雑誌『整形外科』39巻6号(一九八八)より転載)

## 岩原教授追悼号に寄せて

田 辺 硯 (40)

岩原先生の学問的な側面については、多くの方がお書きになると思うので、私は先生の医局員に対する厳しい態度の裏にも、常に大変優しいお心をお持ちであったことを幾つかの例を示してお話したい。

教授室にうかがうと、大変美味しいお茶を入れて下さったこと。「若林君お茶を入れましょう！」と、当時高校に在学しながらアルバイトをしていた若林さんに言われて、われわれ四十回生がフレッシュマンの頃、こちらになって恐れる恐る地下の教授室にうかがうと、外来診療や、教授回診、カンファレンスでは大変怖い先生であったが、みずから何やら古めかしい急須で美味しいお茶を入れて下さったものである。話題もこちらの困らない程度のもをお選びになって頂いたように記憶している。

土曜日の昼食会では、池田亀夫先生、泉田重雄先生、松井明医局長などお揃いで、岩原先生を囲んで昼食を取ったものであるが、他の先生方は一刻も早く抜け出そうとしておられたようであったが、それを知っておられ

たのかどうか、岩原先生お一人が楽しんでおられたような印象を受けた。

当時ゴルフは禁句であったが、それでも要領のよい先生方は、昼食会を抜け出してはゴルフを楽しんでおられたようである。ときたまそのような先生のお一人が話題に上って、その先生がおられないのに気づかれると、大変ご機嫌が悪くなったことである。もしかするとおられないのを御存じのうえでわざと話題に出されたのかも知れない。

毎年フレッシュマンを自宅に招かれて、土佐名物の鰹の叩きを中心に大変なご馳走をして下さった。間もなく退官されたので、四十三、四回生までしかこの美味しい家庭料理の恩恵にあずかっていたはずではないはずである。

初めての出張が国立塩原温泉病院であった。どういうことだったか、上野から先生ご夫妻のお供をして塩原に向かった。その列車の中で先生と奥様は何とフレッシュマンの私のためにもお弁当を用意して下さいだったのである。奥様手造りのお弁当であつたらうか、大変美味しい関西寿司のお弁当を大変恐縮しながら頂いたことを印象深く思い出す。

どうも意地が汚いのか、食べ物の話ばかりになってしまったが、岩原先生追憶のきっかけにでもなればと思ひ

付くまま筆をとりました。

改めて、岩原先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 岩原先生の想い出

阿久津 壽 一 (特)

私が岩原先生に初めてお目にかかったのは、昭和三十七年の秋頃だったと記憶して居ります。当時、私は海上自衛隊横須賀地区病院外科（整形外科を含む）で修練中で、長野政雄診療部長（現麻醉科教授）の下で、胸部外科、一般外科等の臨床及び、静脈移植等の実験など充実した日々を過ごして居りましたが、週一日の大学研修が認められることになり、日大歯学部教授だった加藤信一先生の勧めもあり、長野先生のお口添えもあって慶大整形の門を叩いたのが最初でした。教授室の扉をノックし、中に入りますと、にこやかな岩原先生の笑顔がそこにあがり、取敢えず専攻生として私の外来に付きなさいということでした。この先生が、『岩原天皇』かとコチコチになって居りましたが、先生曰く「私は、慶大出身の人に厳しいが、他大学出身者に対しても差別はしないが、

母校出身者には判らない気疲れ、苦勞が色々あるからね、他校出身の人には優しいんだよ」と本当に思い遣りのある御言葉頂き私もほっと安堵したことを想い出します。その後、毎週木曜日だったと思いますが、教授の外来日に横須賀から通ったものです。さすがにその日の夕方にはどっと疲れが出たものでした。昭和三十八年初夏、遠洋航海の前に、白の制服で教授室に挨拶に伺った際、私も陸軍中尉だったんだよと励まされて帰って来たのも良い想い出の一つであります。昭和三十九年十月、宇都宮航空基地隊勤務を最後に自衛隊を退職し、助手として岩原先生の下で研修させて頂くことになり、又新たな希望に燃えたのもついこの間のような気が致します。岩原先生の指示かどうか、オーベンに矢部先生（現教授）になって頂き、先づは本格的に整形外科の勉強を始めた訳でその後、警友、川崎市立、大田原日赤と勤務致しましたが、その間、岩原先生、池田先生、泉田先生と三人の教授に教えを受けたのであります。未だ医局に居りました頃、丁度四月の学会時期で、教授はじめ上の先生方が皆留守の時、たまたま肩鎖関節脱臼の患者が入院して来まして、これ幸いと、手術（Burnell法）をやったわけですが、あとで教授より大目玉を食ったのを思い出します。又やはり学会で北海道に行った時のこと（出発直前に、池田

教授が倒れたとの報が入る）、岩原先生にお逢いしましたら、<sup>ママ</sup>が倒れたのに、何で今頃こんな所にいるのか！と吐られ、早く帰れということでした。やはりなかなか厳しい、弟子思いの先生でした。

又、岩原先生はこよなく新芽の頃の塩原温泉を愛され、旅館は泉様太郎（詩人）氏の経営する「いずみ屋旅館」がお気に召して定宿として居られました。毎年一度は何かと理由をつけては、浅葉先生を中心にして、岡田先生、富田君などと先生をお招きして、親しく先生のお話を伺ったものです。先生が倒れた前年迄お出で下さったと思います。又、私が最も肝を冷やしましたのは、私の所の開院式の時、午后より雪が降り出したのですが、先生御夫妻を塩原温泉迄お送りして行く途中、関谷宿の大曲がりという坂道で一時停車後発進時、スリップして後輪は空転、後続車の人に押しつ貰い、かろうじて動いた時のことであります。私も、雪路は自信があったのですが、先生もさぞ心配されたのではないかと思つて居ります。今考えても、冷汗が出る思いであります。先生にお逢いした最后是慶応に入院されて居られた時、息子と一緒にのお見舞いに伺つた時でありました。好物の鮎を持って行きましたが、あとで奥様のお便りで先生も食べられたとのことで安心したことを覚えて居ります。私の

亡き父も明治三十四年生まれ、岩原先生、昭和天皇も同じく明治三十四年生まれで、本当に時には厳しく又時には優しく親父のような気がする思い遣りのあつたいい先生でした。御逝去残念でなりません。心より御冥福をお祈り致します。

### 恩師岩原寅猪先生を偲んで

吉沢英造 (41)

昭和三十八年に入局した私が接した先生は岩原天皇といわれて畏れられていた頃の先生とは異なり、既に功なり名とげられて大分穏やかになっておられたと先輩から聞いております。それでも回診の時などにしばしば雷を落とされ、往時の片鱗を垣間見では恐れておりました。一旦不機嫌になると軒並みにお兄さん達が叱られるので、当時はプレゼンテーションの要領を先輩から何度となく指導された覚えがあります。入局してもしばらくは医局員として全く認知されず、病院の廊下ですれ違つた折に挨拶をしても先生は知らんふりということがしばしばでした。これはずっと後になって奥様からお聞きしたこと

ですが、先生はほとんど毎晩のように時間さえあれば机の上に教室員の履歴と業績の一覧表を拡げて考えておられたということです。教室を預かるものの務めとして人事を最重要課題と位置づけておられたものと思います。知らんぷりをしながらも先生は教室員一人一人のことを詳しくご存知だったのだと知りました。

私の主論文テーマが光弾性実験であった関係で一年間理化学研究所に派遣して頂き、光弾性学の草分けであり權威であられた西田正孝博士の指導を受けました。西田先生は岩原先生に負けず劣らず学問に厳しく頑固で気難しい先生でした。部屋に居られるのに「君、今忙しいんだよ」と云われてなかなか会って頂けず、実験を先に進めるわけにもいかず悶々として何日間も無為に過ごしたことがしばしばでした。大谷清先生（現国立村山病院副院長）をはじめ先輩教室員が光弾性実験の指導を受けてきたこともあって、岩原先生が西田先生をご招待するという形で何度か料亭で食事をされました。若造の私にはどんな料亭がよいのか解らず、「東京うまいもの一〇〇店」とかいいう本で探したり、他人に聞いたりして先生の気にいる料亭をみつけるのに苦労しました。お蔭で私もそれまで一度も足を踏み入れたこともないような一流料理屋さんでお相伴にあづかりましたが、末席から両巨

頭が楽しそうに学問の話にうち興じておられる姿を緊張して見守り、お二人とも満足されて帰られるとはっとするといった具合でした。かかる努力をした甲斐もあって何とか学位が取れましたが、それにも増して岩原先生・西田先生という尊敬する師と親しく接する機会に恵まれて、学問の厳しさを教えて頂いたことは私にとって大きな幸せでした。

岩原先生の思い出のなかで一番印象に残るのは昭和四十七年に先生がご夫妻で私の留学先であったオーストラリアにおみえになられた時のことでもあります。私は当時教室の先輩方の好意で *Leverhulme Research Fellowship* としてメルボルンの *Mr. Crook* の元に留学しておりました。Crook という得がたい師に巡り会えたのも岩原先生の紹介状があったことでした。先生ご夫妻がオーストラリアに来られることを知ってからは、約三週間に亘る外遊を何とか有意義なものとして頂くべく一生懸命で、あまりにもしつこく先生の滞在スケジュールの件を持ちだすので Crook も苦笑いしていたことを覚えています。先生は御巫教授他の一行とシドニーで開かれた国際ハビリテーション学会に参加されたのですが、私の一存で計画を変更して頂きシドニーではほとんど学会に出席せず、*Mr. Dwyer* と *Prof. Taylor* を訪問して頂きました。

た。

Dwyerのところでは麻痺性側弯症の手術が用意され、先生は手を洗いませんでしたがお陰で私が手術に入れて頂き、はじめてDwyer先生の助手を勤めさせて頂く機会に恵まれました。手術は朝から始まり、またDwyerの第一助手がアプローチを行い、椎間板別出の段階からDwyerが入って来られ、Instrumentationが終わると後は又第一助手が創を閉じるといった具合で、手術は午後の三時頃までかかりました。皆途中で交代し食事をしていたようですが、私だけは最後まで出ずっぱりで、おまけに朝食抜きだったためにひどく疲労しました。手術が終わってやっと手術場内休憩室に行くと岩原先生とDwyer先生達は昼食を終わりデザートを食べているところでした。岩原先生は術直後のX-TPをご覧になっていたと感心されておられました。翌日はDwyer先生の息子さんが出場するラグビーの試合と一緒に観戦し、夜はシドニータワー最上階にあるレストランで夜景を見ながら新鮮なエビやカキをご馳走になり、このほか美味しかったことを記憶しています。岩原先生の「大谷君をぜひDwyerさんのところへ派遣したいから通訳せよ」というお言葉で一生涯Dwyer先生に岩原先生のお気持ちをお伝えしましたが、幸いにも心よく引き受けて頂

き、後に大谷先生は三ヶ月間シドニーに行かれ、Dwyer法導入の口火を切られました。私達がお邪魔した当時Dwyer先生はまだ五〇代でしたが、私には「もう側弯症の手術はあまり興味がない。もう疲れた。後は若い人達がやってくれればいい。」と云っておられ、肩関節や足関節の手術に興味を持ち始めておられたようです。また脊椎では骨移植に電気刺激を加える独自の装置を試作使用されておられました。今から思うとDwyer先生は当時既に体調を崩しておられたようです。大谷先生が帰国されて間もなくDwyer先生は食堂癌で亡くなられ、岩原先生も大変悲しまれ、雑誌に追悼文を書かれました。Dwyer先生にとって大谷先生は日本人ドクターとしては最初にして最後のお弟子さんになったと思います。オーストラリア訪問当時の岩原先生は既に慶應を定年退職され、村山療養所長であられました。先生の先見の明と決断の速さは慶應の教授現役を退かれて高齢になられてからも衰えをみせず、云うまでもありませんが先生の学問に対する飽くなき情熱には全く頭の下がる思いでした。

シドニーでは当時オーストラリア唯一人の整形外科教授であったProf. Taylorにも会って頂きました。格式の高い大学のクラブのDinner roomで夕食をご馳走に

なり、岩原先生はいたくご満悦の様でした。ご存じのよう  
に「Taylor」教授は軟骨の生化学的研究をされておられ  
たのですが、ここでも岩原先生の即断がなされ、当時慶  
應の生化学班を確立しつつあった新名君（現防衛医大助  
教授）をぜひここに派遣したいからおまえ通訳せよとい  
う命令でした。私は一瞬躊躇しました。CrookやDwyer  
を通して聞くTaylor教授の評判は特にその人柄におい  
てあまり芳しいものではなかったからです。三〇代の若  
さでオーストラリアはじめての整形外科教授になったこ  
とが色々の意味で問題であったようです。岩原先生には  
正直にこのことをお伝えしたのですが、先生は「若くし  
て教授になったのだから少しぐらいい角があっても可笑し  
くはない」とのことで否応なく通訳させられました。新  
名君もさぞかし当惑されたことと思いますが留学に踏み  
切られ、「Taylor」教授の研究面を預かっていたPeter  
Ghoshと一緒にされた組織培養の仕事を通して、その  
後の研究に何らかの役に立ったのではないかと勝手なが  
ら推測しております。いづれにしても気にいったら即断  
し、実行する岩原先生のあの迫力には敬服するばかりで  
した。

先生はシドニーからパースのSir Bedbrookのところ  
に行かれた後に私達の待つメルボルンに来られCrook宅

に約一週間滞在されました。メルボルンでは主に休養を  
して頂き、市内観光の他郊外へバーベキューに行ったり  
しましたが、Crookや私達家族と一緒に毎日でしたので  
先生ご夫妻も大変寛がれた様子でした。Crookには一  
卵性双生児の弟であるProf. Crook（メルボルン大学  
眼科学教授）がおられ、岩原先生が全々区別できなかつ  
た時は皆で大笑いしました。奥様も狭い私どものアパ  
ルトに來られて魚（鯛）を煮て頂いたり、豚の角煮を造っ  
て頂いたりして先生も大変喜んでおられたのがつい先日  
の事のように思い出されます。近寄り難かった先生とこ  
のように親しく接せられたのも海外に居てこそ有りえた  
ことで、私にとって一生忘れられない楽しかった思い出  
であります。

名古屋への赴任の話が持ち上がった時、真先に相談し  
たのが当時既に名誉教授になられておられた岩原先生で  
した。先生は「昔はよくわしの目の黒いうちはなどと云っ  
たこともあるが、今はそんなことを云える立場にはない。  
自分はこれまでの人生に悔いはないし満足しているの  
で、自分が歩んできた道について君に話すから」と云われ、  
はつきりとした意見は何もおっしゃらずに、先生が何一  
つ無理して道を選んだつもりのないこと、他人に敷いて  
もらった道をただ無我夢中で一生懸命歩んできたことな

ど、過去を振りかえりつつ私にお話しされたのでした。

私は矢部先生から誘われた名古屋行きを自分の前に敷かれた道と解釈して保健衛生大学への赴任を決心し、間もなくメルボルンへ留学したのですが、名古屋赴任直前になって先生は「矢部君と君との年齢差を考えると賛成で きん」といわれて反対されたのでした。私のためを思っ ての先生の温かい思いやりを感じましたが、一緒に行く と約束した矢部先生や赴任するがゆえに色々無理を聞 いて頂いた教室の先輩方を裏切ることは憚られ、留学よ り帰国後間もなく赴任致しました。

矢部先生が慶應に戻られたことから図らずも保健衛生 大学整形外科の教室を主催させられる羽目となり、責任 の重さに苦悩の毎日ですが、岩原先生が折にふれて述べ られた数々のお言葉を思い出し、道を誤らぬよう心掛け ております。良き師に巡りあえた自分の仕合わせを噛み しめるとともに、岩原門下生の一員であることを誇りに 思い、先生の真の偉大さを今になってあらためて強く感 じております。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

## パリシヨック

石井良章 (41)

一九七三年秋のある日、何んの合図もなしにLondon を離れた列車は、緩やかな起伏を示す麦畑の間を北へ北へと進んでいた。岩原先生、伊勢亀先生、私の三人は Londonでの Biomechanical engineer & orthopedic surgeonの Joint meetingを終えて Leedsへ向かったの だった。車中でイギリス北部の歴史、人文、地理、料理 の特徴、旅の心得など留まることのない伊勢亀先生の講 義を聞き終えないうちに、列車はLeeds駅へすべり込ん だ。プラットホームに降り立つと間もなく、刑事コロン ボのCopyよろしく、よれよれの淡いグリーンのコート、 ぼさぼさの髪の下に、見覚えのある眼鏡と人なつっこい優 しい目が微笑んでいた。慶大整形外科から初めてLeeds大 学 University of Leeds教授の下へ留学した津布久雅男君であつた (四十三回生、現銚子整形外科)。見ると皺だらけのお 世辞にもきれいと云い難い青い風呂敷包みを持ってい るのが気になった。しかし彼独特の無頓着さで、Leeds 大学へと私達を導いていた。とうとう我慢しきれなくな った？伊勢亀先生が「その大事そうなのは何？」

と尋ねた。「あっ、これはOrangeですよ。この辺ではOrangeはイスラエルから輸入するので、とても貴重なんです。岩原先生が来られるので買ったんです」とロンボ氏。いかにも彼らしい素朴で人情味溢れる心遣いに、岩原先生いたく感激された。「あっ、これはうまい、岩原は幸せだ」と云いながらOrangeを頬張っていられたのが昨日の事の様に目に浮かぶ。津布久君は膝関節モデルを用いたContact areaの計測と分析をDr. Sheehornを相手に行っていたが、十六年も前の事で彼も若い貧乏な研究者であった。その後Sheehornの病院を訪ねたり、イギリス中部での旅を終えてLondonへ戻るまで津布久君は同行した。この道中は、車中や歩行中、食事中でも「イギリスを食」と私達が命名したコロソボ氏と「物知り博士」の伊勢亀先生とのやりとりが間断なく続き、限りなく面白く、岩原先生は時々御自分の御意見を挟まれながら、脇で大笑いしたり、にこにこしながら如何にも楽しそうに、この可笑しな弟子達を眺めていた。岩原先生は既に七十代半ばと思われるが、楽しい会話と雰囲気を楽し養分にして、実にかくしゃくときかれており、はつらつとして旅を続けられていた。

コマンタレブー、事件はパリで起った。当時パリ大学で外傷学を勉強されていた鈴木三夫先生（三十八回生、

現国療村山病院）の案内で、私達は夕食後パリのとある街角を散策していた。花の都パリ！魅惑に満ちた都よ！人も街も夜の帳帷に浮かれだした妖精の様に華やき、男性達を誘い込む甘美で怪しげな雰囲気の一部に小さな書店があった。鈴木先生が何んと云われたか記憶は定かでないが、兎に角店内は私達を魅了させるのに十分なその筋の文献、図、写真が所狭しと在った。皆若かった？時間がどの位経過したか不明であったが、「おい石井、爺さんが居ない、見てこい」と物知り博士に云われて表へ出た。途端に見慣れた茶色かかった植木屋風の細長い顔が天を仰ぎ、体は大の字になってひっくり返っている。顔面はやや青白く見え意識はない。私は一瞬ばかり驚いた後、「大変だあ、岩原先生が死んじゃう！しかもパリのこの変てこな所で!!」と腰を抜かささんばかりに驚いて、いまだ学問に熱中している先輩達の所へすつとんだ。三人で脈拍や呼吸を診ていたのでろうか。何をしたらか夢中で全く覚えていないが、間もなく先生はっ、と目を開かれた。きよろきよろ周りを見られてから、やおら立ち上がられた。御本人は何んの記憶もなく、気分も爽快で直ちに快適に振舞われたが、私共はびっくり驚天した後なので疲れ果てた。物知り博士の診断は「刺激過度によるTIA」だったか？

瞬時の出来事であったかもしれない。ともかく岩原先生に心底から実の子の様に尽くされていた伊勢亀先生的好リードにより、楽しい旅を続けていた最中に起こったパリでの強烈な事件として、私にとっては生涯忘れ得ぬ出来事なのである。

## われわれの入局当時の岩原先生と医局

有馬 亨 (42)

此の度の故岩原先生特集号にあたり我々が入局した昭和三十九年以降、先生のご在職の数年間について医局の様子と合わせて思いつくまま二三書かせていただく。

そもそも私が整形外科へ入局した動機の基盤には学生時代の先生の名物講義の影響があった。「不肖岩原骨医者三十余年……」の口調に魅了されて結構よく出席していたが、ある日臨床講義で我々のグループがその日の題材の確か股関節結核の患者の前で質問を受け、その答で先生から褒められ気を良くしていたこともあった。先生は医局員には厳しかったが学生には煽てるような技術も持っておられた。その後、インターンをした当時の済生

会中央病院の田中先生の勧誘が決定的となり入局した。我々の入局同期生は外部からのものも多く十五名いた。当時の松井医局長より先生へ紹介され、めでたく門下生とさせてもらった訳であるが、学年としてはブービーに相当するものと思われる。

一、外来のこと

岩原先生の診察には通常三人位医局員が付いており、三年生が書記係、四、五年生がムンテラ係、五、六年生がカルテ配分をしていた。患者さんはいろいろバラエティーに富むように配分し、年寄りはあまり多くならないように、又若い女性も必ず含めることが担当係のコツでもあった。また診察室には関連病院から医長さんなどが時々ご機嫌伺いに見学に来ていた。先生の診察は患者さんに対してかなり口が悪かったのを覚えている。

ある日、田舎から出て来たという感じの娘さんが足を痛めて来院したが、先生は患者を見るなり「山から出て来よってハイヒールなど履くからだ」と一喝したため患者さんは泣き出す始末であった。後でムンテラ係がカルテに記入された処置のサロメントだけで話す訳であるから苦勞も大変であった。

しかし先生から学ぶべきものはどんな患者でもX線診断をする前に臨床病名をご自身の独特のペン字で丁寧に

書かれていたことであり、先生の診断に向かう姿勢には卓越したものが感じられた。

## 二、教授回診のこと

我々は入局した頃は木造病棟「ろ」号棟も回診に含まれていたが、そのうち主病棟は6号三階に定着した。毎週水曜日の朝九時から回診が始まった。岩原先生はブカブカの白衣を着て病棟の入口より入って来られると、医局員は病室前で待ち構えており、主治医は先々の患者へ回ってカルテを持って準備していた。先生は主治医が見られたくないような患者の毛布を時々剥いで、ギプスの巻き方や牽引状態をチェックし巻き直しを言い渡した。とくに斜頸のギプスにはうるさかった。

また診断未定の患者に直観的に診断を下すこともあった。ある日自分の患者で下肢しびれや時折腹痛などを訴えがあり診断に困っていたが、回診で先生は「この顔はジファイリスだ」と言われた。後で脊髄瘍と判り畏れ入った次第である。

## 三、研究論文のこと

私は先生から二つの副論文と一つの主論文のテーマをいただいた。主論文は椎間板に関するものであるが、先生の出された門下生の最後かも知れない。先生はテーマを紙切れに書いて渡されたが、エンピツ書きであり、家

の中でゴミかごに捨てられてしまったことがある。二年生のとき最初にいただいたネーベンは目茶目茶に手厳しく直された思い出がある。当時は出来上がるまでは決して発表学会を決めてもらえなかった。

主論文をもらってから「は」号棟の研究室で仕事を夜遅くまでするようになり、先輩達の仲間入りをした。その頃は四十回、四十一回位の学年が仕事をしており、福田、橋爪、宮本、土方、石井の各先生がいた。狭い研究室なので各自のスペースは引き出しが一個ある程度であった。方法論が決まって実際集中してやれる期限は一年間位であるため、皆が毎日遅くまで仕事をし、早く脱出する日が来ることを願っていた。今考えると全くタコ部屋生活であったが懐かしい思い出である。

## 四、医局でのこと

我々が入局した頃は医局は別館三階にあったが、後で四階に移った。

岩原先生は毎週土曜日に医局員との昼食会にお出になった。各自出前をとり数人が弁当を持って来ていた。先生も何か持って来られていたように思う。医局は狭いので全員座れずフレッシュマンは立って話をきいていた。当時、野口先生、矢部先生、赤坂先生がおり話題提供をしていた。

また学位が通過すると医局で夕方より祝賀会が行われ、当人がビールとすしを用意した。この時は岩原先生もお見えになりしばらく話をしておられた。二人一緒の時はご当人の経済的負担が少なく済んだということもきいた。我々が入局した頃は医局にはまだ冷蔵庫がなく、病棟から氷をもらって来てビールを冷やした。これはフレックスマンの仕事であった。夕方五時から大体飲み始める訳であり、今ほど交通規制もうるさくなかったので医局は賑わっていた。この時に先輩からきくことが出来る失敗談は最も為になるものであった。

##### 五、新年会のこと

毎年正月元日に先生のご自宅で新年会が行われた。通常整形外科の外来で医局の新年会が行われた後に烏山へ伺った。私はフレックスマンの頃から連れて行ってもらい、以来毎年伺うことが楽しみであった。先生は大学での厳しさはなくサーブに専念されていた。またここでは医局では会えないような遙か上の諸先輩に会えることも大変プラスであった。この会は先生が退職されてからも病気になる迄続いていたが、人数は段々と少なくなっていた。しかし盛んな頃は人数も多く、料理などで奥様はじめご家族は大変であったと思う。とくに先生のお宅の鯉のたたきは逸品であった。そして何よりも先生の人

間性や、奥様のすばらしい内助の功に感激した次第である。

以上、我々が入局した頃およびその後先生のご退職する頃の思い出したことであるが、多少時代が前後して間違いがあるかも知れない。しかし我々は先生の晩年の頃の門下生であるため本当の厳しさは薄らいでいたものと思われるが、門下生の末席に入ただけでも幸せである。先生の学問に対する厳しさは常に忘れることなく受け継いでいきたいものである。

## 村山療養所での先生と私

津布久 雅 男 (43)

岩原先生にはじめて、お近く接したのは、私が学部四年の時で懇親会の顧問になられた時でした。当時頼りの父親が急逝しまして、先生の厳しい中にも愛情にあふれた様子は、自分勝手ですが、親代わりの様な気がしたものです。私が整形外科教室に入るのを決心したのも部の先輩達がおられた他に、多分にこのことが関係しているかもしれません。

最初の論文のテーマは『椎体後部カンテンアプトレンヌング』の症例報告でした。標本が極めて大きく、髄核が椎体後角にくいこんでいく状態がまざまざと見えるのです。神経根や硬膜管はどういう具合になったのか、不思議なほどです。訴えの多い患者をフォローアップすることは、自分で直接治療にあたったとは別の意味で大変勉強になりました。この論文は三回ほど校閲をうけて、一年余りのあと発表、投稿しましたが、先生の直接の御指導にあづかるはじめての機会となりました。その後先生は慶応を退職され、国立村山療養所の所長となられました。

私は池田教授の指導の下で、小林（慶）君と頸椎損傷の実験にとりくみました。この間いろいろなことがありましたが、大学院を修えて立川共済病院に出張しました。当時、多摩整形外科懇談会が定期的に開かれて、岩原先生も毎回出席していました。会でお会いすると先生が私達の上位頸椎損傷にも関心をもって居られることや、M. S. Abel の「Occult Traumatic Lesions of the Cervical Vertebrae」は面白くよよよって奨めてくださいました。論文は渉獵しつくしたつもり私にも、全く知らない本でしたので、大変ショックでもありました。有難くもありました。改めて先生の学識におどろかさ

国立村山で勉強できればよいがなと心ひそかに思いはじめました。

昭和四十五年から五十五年にわたる国立村山療養所で

の生活は私にとっての黄金期の十年でした。はじめの一年は狭い三鷹の公団住宅から自動車通いでした。仕事のあと医局での一杯が日課で、野町先生を助手席にのせたポンコツ車のエンジンは運転者以上に快調でした。今から思うと一度も検問に合わないのが不思議でした。大きな官舎ができたので所内に住むようになりました。上位頸椎損傷の仕事を一息していた時、所長室に呼ばれて『リウマチか麻痺の外科治療』をやってみないかといわれました。当時、脳血管障害や慢性関節リウマチの患者は、運動療法と理学療法が主として施されて、手術的な治療は殆んど行われていませんでした。それから半年ほどは、リウマチ関節の拘縮除去や滑膜切除・麻痺足の関節や腱手術を試行したり、手伝ったりしていました。熟考のあと『リウマチの治療』を試してみたいと答えますと『君もいよいよリウマトロジストか』といい『もう頸椎の仕事は一切忘れなさい。あとは未練を残さず、小林君にまかせなさい』と言われました。それから間もなく『国内留学の方法があるから、慶応の本間教授のところまで内科を、神戸大学の柏木教授のところ

関節外科を勉強して来るように』といわれました。折角の機会でしたので、これに英国からチャンレー人工股関節手術を紹介した京都大学の長井先生と整形外科医として長年リウマチと取組んでおられた岡山大学の児玉教授を加えていただきまして、昭和四十七年の夏から秋にかけて、それぞれ一カ月前後の留学が始まりました。こういう時の先生の助言は極めて適切で、私の自発性を重んじて、決して自分の意見を強制するところがありませんでした。

この年の秋、国際リウマチ学会が京都で行われリーズ大学のライト教授が招かれて来たとき、岩原先生は京都までおいでになって、私がリーズ大学に留学希望しているのもよしくお願いしますと挨拶をして下さいました。翌年昭和四十八年六月から四十九年二月にかけて、英国リーズ大学に留学しました。私はこの留学の間、デボンシアホールに寄宿していました。昭和四十八年秋、ロンドンで国際人工膝関節会議があり、岩原先生にお伴をして、伊勢亀先生と石井先生が来られました。私はリーズ大学から、ライト教授、シードホーム博士等と共に参加して、先生御一行を迎えました。先生方は丁度、三戸黄門と弥次、喜多の旅行の様で、日頃、人の面倒をみることの多い先生も、この時ばかりはお伴の両先生の御世話

を心よく受けて喜んでいました。会議のあと、リーズに来られて大学の研究室を見学されたあと、学生寮に来て私の部屋で玉露を入れて下さったことを今でも忘れません。

私のリウマチの仕事は村山と塩原で始まりました。ねたきりとなる身障リウマチの治療は、療養所という長期入院のできるところが最適の所と思います。そして病因が今尚不明な全身病ですから、全科的な治療が必要なのですが、現実的には内科が主体になって治療をしつつ、外科が最大限あるいは最小限の協力をするということがよいでしょう。先生もそこをよく御存知なので、本間先生のところへ私を勉強にやり、また村山でもリウマチ内科に期待をよせていたのだと思います。しかし私はいっしょにこれらのことを忘れて、勝つことのありえない戦いに挑戦する、ドンキホーテの英雄気分、孤軍奮闘をしていたのでした。先生は時々『誰か一緒に仕事をする人がいれば』と助言を下さいました。しかしこの辺は私の無思慮、無能力が災いして、それ以後もよい協力者が得られませんでした。

先生が在職中はそれほど重荷とは感じられなかったリウマチ患者の存在が、退職されてからは、何か大変な重圧となって私にのしかかって来るのに気づきました。手

術をして少しばかりよくなったからと言って、退院させたり転院させたりすること自体が自分のエゴの満足であり、患者をむしろ不幸にしているのではないかと思ひました。

結局自分は先生の手厚い庇護のもとで仕事を自由にさせてもらったといえるでしょう。いわば虎の威を借る狐だったのだと思います。先生は狐であることを承知の上で面倒みてくださったのでしようが、誇り高いドンキホーテは自分が狐であることを認めることはできなかつたようです。こういうわけで村山では皆様に大変御迷惑をかけ、岩原先生の御期待にもそえませんでした。

私は今銚子で開業し、毎日診療にあげられています。今後仕事の上で先生から教えられた医師としての生き方は大切に守っていきたいと思っています。

To cure at times, To relieve often, To comfort always.

## 昭和六十二年度前田賞受賞論文

マウス骨肉腫 (Dunn Sarcoma) の  
組織培養——培養株 (DSK) の確立  
とその細胞学的特性——

(日整会誌 第56巻、37—49、1982)

大崎 康 正

浜松より帰局した昭和四十九年、パート先の北里研究所病院で北村憲治、海村昌和両先生にネズミの骨腫瘍の継代移植を手伝うように言われたのが骨腫瘍研究の道に入るきっかけとなりました。その頃大学病院ではLCCのフィルム整理を手伝っていました。芝田仁先生に組織培養を試みてみたらと示唆され、整形外科の分野ではライバルも少なく、面白そうなのでやってみようと、器具洗い、培養液作成等から始めました。幸い産婦人科の伊東正昭先生や北里研究所の熊沢義雄先生のアドバイスを受けて実験も軌道に乗り出しました。ヒトの骨腫瘍の組

織培養から始めたのですが、数代しか発育しません。並行して継代培養していたC3H/HeマウスのDunn Osteosarcomaの方は順調に行き、培養経過や培養株を用い種々と研究した結果を発表出来ました。

以下論文の要旨を報告させていただきます。

悪性腫瘍の増殖性を解析するには、腫瘍細胞の動態を観察する必要があると考える。腫瘍細胞を適当な増殖状態におき、しかも各種の関与因子を任意に調節することが可能な方法として組織培養法がある。この方法は各分野で積極的に試みられてきているが、こと骨腫瘍に関してはその細胞の性質や手技上の困難さから長期継代培養はまだ少数の研究しかなされていない。

C3H/Heマウス尾椎に自然発生し同系マウスに長期継代移植しているDunn osteosarcomaの腫瘍細胞を用いて組織培養を試み、長期間にわたって増殖状態を観察し、in vitroにおける安定した実験系を確立した。

## 実験方法

Dunn osteosarcoma の 1) 継代移植、2) 継代組織培養、3) 培養細胞の形態観察、4) 染色体観察、5) 戻し移植、6) 細胞周期の測定、7) 腫瘍特異性移植抗原の証明を行った。実験結果ならびに考察

1) Dunn osteosarcoma 組織をマウス右後肢皮下移植後、2 週間で腫瘍発現率 100% であった。

2) 継代組織培養は代を重ねるにしがいが次代への継代に要する時間が短縮していった。

3) 細胞形態をみると培養早期に小球状の膨化細胞が浮遊し、次第に紡錘形細胞に変化し、突起で周囲細胞と集合、架線しつつ増殖を続けた。ついで紡錘形細胞は減少し上皮様細胞の占有率が増え増殖能も一段と向上した。

核所見では N/C 比の増大、核小体、mitosis の増加が認められた。巨細胞は 8、9 代頃に大きき、核数とも最高であった。16 代頃より細胞形態は一定してきた。

4) 培養細胞の染色体数は 10 代前半まで 2 倍性から低 3 倍性と変動があり、11、12 代頃一時的に 2 倍性となったが、16 代以降は高 2 倍性と安定してきた。

5) 継代培養で得られた細胞の *in vivo* への戻し移植によって再び原腫瘍と同一の組織像が得られた。17 代以降 *in vivo* への戻し移植は 100% 可能で腫瘍の大きき発

育速度のバラツキもなくなり、この傾向は代を重ねても変らなかつた。

6)  $H^3$ -Thymidine ( $H^3$ -TDR) を用いて計測した Dunn osteosarcoma の *in vitro* の細胞周期は 11 時間 *in vivo* の 13 時間よりも短縮していった。

7) 培養細胞を刺激細胞として行った正常 C3H/He マウス脾細胞の one way mixed lymphocyte-tumor culture reaction (one way MLTR) の結果、分子にこの MLTR における *sup take* をとり、分母に脾細胞および不活化培養細胞のそれぞれの *sup take* の和をとるとその値は各培養時間共に 1 以上となり正常 C3H/He マウス脾細胞は本培養細胞の腫瘍特異性移植抗原 (TSTA) を認識していた。

以上から、この培養細胞には腫瘍起原性があり、組織培養 17 代頃より固定株に達し、*in vitro* での実験系を確立したものととして樹立株を DSK (Dunn sarcoma *in vitro* KITASATO) と命名した。

他に培養株を用いてマウス免疫応答に及ぼす嫌気性コリネバクテリウム (CD) の効果と *in vitro* 制癌剤感受性試験を報告しました。C3H/He マウス脾細胞を標的とした *iso* MLR に比して B57BL/6 マウス脾細胞を標的とした *allogenic* MLR は  $H^3$ -TDR の *sup take*

は数倍となるが、2日前Cp投与マウス脾細胞で行うとAllogenic MLRにおける $^{3}H$ -TdR uptakeの増加は抑制された。また、DSK細胞とPrimary Cultureの腫瘍細胞使用とのin vitro感受性試験の結果には殆んど相違がなかった。

最後に受賞のきっかけを作った下さった芝田仁客員講師と御指導、御校閲を賜った池田亀夫名誉教授、泉田重雄前教授、そして埋没しそうになっていた論文に対し学問的精神的支援をして頂いた矢部裕教授に心から感謝をいたします。

## 昭和62年度前田賞受賞論文

### 手指先天奇形発生に関する実験的研究 — 枝芽の局所障害と多趾について —

(日整会誌 第61巻 49〜92 1987)

飯 島 謹之助

はじめに

昭和六十二年前田賞をいただきましたことを御報告申し上げますとともに、対象となりました論文の要旨を紹介

させていただきます。

多指は手の先天異常のなかで最も頻度が高い疾患です。本疾患の成立機序の解明のために、従来より種々の実験的研究が行われてきましたが、それらは主に実験動物の妊娠母体に催奇形因子を全身投与する方法でした。しかしながら、これらの方法では胎仔の枝芽局所における障害と催奇形因子との因果関係を明確にすることは不可能でした。そこで著者はニワトリ胚の下肢原基である枝芽に局所障害を加えることにより多趾を発現させるといふパラドキシカルな実験を試み、多趾を高頻度に発現させることに成功しました。そして、局所刺激と枝芽局所における因果関係を明らかにし、多趾の発現条件および成立機序について検討しました。

材料および方法

白色レグホンの受精卵を一七〇〇個使用し、顕微鏡下に、受精三〜七日卵の胎仔の枝芽に双極微小血管凝固器を用いて焼灼刺激を加えました。その後孵化を続行し、十六日卵で表現形を観察しました。また、分化の各ステージでの組織学的観察を行いました。

実験一 多趾が発現する時期を検索する目的で三〜七日卵の枝芽に焼灼刺激を加えました。

実験二 多趾が発現する最適刺激強度および部位を探索する目的で、三日卵の肢芽を軸前、軸後部にわけ、三〜六ワットの各種刺激をそれぞれの部位に加えました。

実験三 三日卵における多趾の発現する最適時期を詳しく検索する目的で、三日〇、六、十二、十八各時間、そして四日〇時間を加えた五つの時期において、軸前部に五ワットの刺激を加えました。

#### 結果および考察

多趾は三日卵の各時期および四日〇時間にのみ発現し、なかでも三日の後半十二時間に集中していました。発現した多趾のほとんどが軸前部多趾（第一趾多趾）でした。最適刺激強度は五ワットでした。したがって多趾発現には最適刺激強度下において、時期および部位特異性が存在することが明らかになりました。

組織学的観察では、三日の後半十二時間の肢芽先端部の外胚葉は細胞が数層の円柱状配列よりなる外胚葉頂提（AER）といわれる特徴的な帯状隆起を形成し、その直下の未分化間葉細胞群は辺縁静脈洞周囲で特に活動性を増している所見を呈しており、他の時期に比べ、活発かつ急速に肢の分化を行っている状態にあるという所見を得ました。

さらにX線所見からは、発現した多趾の全例に中足骨の異常が認められ、焼灼時期が未分化間葉細胞の中足骨原基への分化時期にあたるのがわかりました。そして、この中足骨原基への障害が軸前部多趾発現に関与している可能性が考えられました。

一方、同時期に多趾との関連が示唆される減形成的複合奇形が多数発現し、趾数的には多趾と異なるものの、肢芽の修復分化過程は極めて類似している形態のおよび时期的特徴を有していました。これらは障害が多趾発現条件の範囲内であれば、肢芽の修復機転の結果として第一趾多趾を形成することを示していました。すなわち、多趾はこれらの減形成の表現形の一つとして存在することが判明しました。

おわりに

昭和六十二年前田賞をいただきましたことを心より感謝いたします。本研究に際し、並々ならぬ御尽力、御指導を賜りました矢部裕教授、ならびに終始、直接の御指導を賜りました内西兼一郎講師、伊藤恵康前講師、そして御支援をいただいた多くの方々に、本紙上をおかりして改めて深謝いたします。

## 昭和63年度前田賞受賞論文

Serine proteinase and serine Proteinase inhibitors of normal and degenerate knee joint menisci

(Biomedical Research 4, 25-32, 1983)

中川 智之

今回の前田賞受賞論文は、昭和55年より56年にかけて留学していた豪州のシドニー大学レイモンド・パーブス研究所での研究結果をまとめたもので、ヒト半月由来セリン系タンパク分解酵素およびそのインヒビターに関するものである。留学した当時は我が教室は混乱の極致にあり教室において生化学研究を続けることはほぼ不可能であった。当時講師として在席しておられた新名正由先生の防医大での研究生としてのポストも種々の原因により不可能となり四面楚歌の状態の中から生じてきた豪州留学であったが、忘れられないのは留学の機会を与えて下さった新名先生とともに、何処からも推薦状がもらえなかった私に快く書いて下さいました故岩原寅猪名誉教授のことである。生化学といっても多糖生化学を多少かじったばかりで、軟骨基質破壊に関する酵素などほと

んど知らない不安に満ちた私を自宅にまで招待して下さい、御自分の米国留学の経験をまじえながらはげましていただき、更心何かの足しにと100ドル札まで頂戴いたしました。このお礼は今でも大事にとってあります。

その時、最後まで言っておられたのは、今後臨床と基礎との接点で仕事をされる様にということで、これが不幸にも御元氣なうちにいただいた最後の御言葉となりましたが、現在でも岩原先生の遺言として胆に命じております。

さて、私が留学しました豪州は当時3年来の旱魃と国際収支の悪化による不況下であり、グラントが削減され多くの研究者が失職するといった状況で、日本の繁栄に対する嫉妬と大戦以来の反日感情とあいまって日本人研究者として非常に厳しい日々でした。研究室の設備も悪く、同時期に来豪された東京医歯大難治研の永井裕教授もあきれられた次第でしたが、宿舍がなかったので私の下宿に投宿されることになり、文字どおり寝食を伴にして世界有数の生化学者から考え方や研究姿勢を吸収することができたのは誠に幸運でした。

本来、私の研究目的は半月のコラゲナーゼとそのインヒビターの動態を明らかにすることでしたが、不幸にもこの実験系はうまく作動せず、結果として永井教授の残された文献を中心に種々の文献を検索し、当時としては

新手法であったのでラベルしたゼラチンを自力で作製し実験を進めることとしました。その結果、幸運にもセリン系タンパク分解酵素とそのインヒビターの動態とヒト半月変性との関連を明らかに出来たわけでありませう。

当時は現在ほど酵素学も進歩しておらず、抽出および精製法も確立されたものが少なく、留学後約8ヵ月目にはやっときれいな結果を手にした時は、苦しみばかり多い生化学研究がすばらしく楽しい仕事であると実感がしめじみと湧いてきました。

研究結果は、これまで発表してまいりましたから御承知のことと思いますが、正常時存在したセリン系タンパク分解酵素インヒビターが変性に伴い消失し、逆に酵素活性が著明に亢進するという至極あたりまえのことでしたが、これを臨床（ヒト）の系で明らかにしたのは、本論文が世界で最初であろうと自負しております。

日整会も基礎学術集会在今年で4回目をむかえ、生化学を中心にますます基礎研究が盛んになると考えられますが、今後につづかれる若い研究者には、研究手段を指導してもらおうという受動的な態度を捨てていただくことを希望します。どの様な研究でも必ず壁にぶちあたるもので、これを突破するのはその研究者の熱意以外にないと思えます。もちろん、研究課題の大前提が誤ってい

れば論外ではありますが、そうでなければ必ず道はひらけるものと思っております。

今後、我教室の若い研究者達が種々の雑音にまどわされず、真理を求めてごまかさず前進できる様な体制を一日も早く確立することが教室の将来に一番必要なことかと思えます。教室で運営の任にあたられる諸先生方に今後の舵取りの程、よろしくお願いいたします。

### 昭和63年度岩原賞受賞論文

脊髄刺激による伝導性誘発脊髄電位に  
関する基礎的研究——脊髄内伝導路と  
起源について

(日整会誌 第62巻、535—549、1988)

添 田 修 一

このたび、「脊髄刺激による伝導性誘発脊髄電位に関する基礎的研究、——脊髄内伝導路と起源について——」で第一回岩原賞を戴いた。まことに身に余る光栄であり、論文の御校閲を賜った矢部裕教授、御指導頂いた平林湧助教授、里見和彦博士に改めて感謝申し上げる次第であ

ります。

研究対象となった伝導性誘発脊髄電位(以下、*conduc. - ESCAP*)は、1972年黒川、玉置によりほぼ時期を同じくして開発された脊髄伝導機能診断法である。E M G、F波、H波が前角細胞以下のあるいは反射弓が係る経路の電気活動を捉えるのに対し、*conduc. - ESCAP*は脊髄の頭尾方向における伝導機能を反映するものとして、脊椎・脊髄手術中の脊髄機能監視目的や脊髄症における病巣診断にその応用が広がっている。

*conduc. - ESCAP*の電位起源と脊髄内伝導路については、今井卓夫博士(東大)の秀れた研究(1976)がある。それによると、背側硬膜上から脊髄を刺激し、他の高位の背側硬膜上から記録した電位は二つの陰性棘液から成り、伝導速度70 m/secの第一電位は主に後側索を、40 m/secの第二電位は後索を伝導するというものであった。以後、今井の論文をparadigmとして、さらに精確な脊髄内伝導路と電位起源を探る研究が続けられたが以下の疑問点は依然として未解決のままであった。それは、先づ第一に硬膜上から脊髄を刺激した場合の刺激効果の拡がり方、第二に*conduc. - ESCAP*の個々の陰性棘液が複数以上の索路を伝導する可能性、第三に刺激と記録電極の関係を逆にした上行性電位(脊髄を求心

性に伝導した電位)と下行性電位(遠心性に伝導した電位)が同じものであるのか、である。

成猫を用いた研究結果から結論的に云えば、第一に背側硬膜上からの刺激効果は局所に停ることなく一度に脊髄表層の比較的大きい領域に拡がり(電位が出現する刺激域値の約2倍で後索と後側索が同時に刺激される)域値の15倍では脊髄腹側索路も刺激を受けていた。第二に、構成電位はN<sub>1</sub>、N<sub>2</sub>、N<sub>3</sub>の三つの陰性棘液となり、ガラス管微小電極を用いた単一神経線維の活動電位から背側硬膜上記録のN<sub>1</sub>電位の85%は後側索線維、15%は後索線維の活動により、逆にN<sub>2</sub>、N<sub>3</sub>電位の85%は後索線維、15%は後側索線維の活動電位で構成されていた。第三に上行性電位と下行性電位は伝導路と同一であるが上行性電位にはシナプスを経由した電位が多く含まれていることが判明した。

さて、以上の基礎的知見を臨床応用にフィードバックするとどうなるのであろうか。*conduc. - ESCAP*で検知し得る伝導路障害は、後索、後側索、脊髄腹側索路に関して可能となる。このうち主に後側索を伝導するN<sub>1</sub>電位は背側脊髄小脳路が電位起源の中心と考えられている。強い刺激強度下で脊髄腹側から記録されるN<sub>1</sub>電位は、その後の研究で前庭脊髄路と網様体脊髄路の錐体

外路系索路がその電位起源であることが判明している。さらに上行性ニ電位に含まれるシナプス經由電位は中心管周辺に位置するCorti柱を經由したものと考へてはば間違ひなく、上・下行性ニ電位の比較から蛋白質への障害領域の拡がりがある程度探ることが出来る。

錐体外路系の機能診断の可能性に対し、錐体路機能の診断はどうであらう。残念ながら錐体路線維の解剖学的な特殊性の爲に、充分な大きさの活動電位を発生できず、conduc. ESCAPにその活動電位が反映されることのないことがわかっている。錐体路の電気診断をどう開発してゆくかが今後の最大の課題と云える。

さて、脊髓損傷やミエロパチーの病態解明においてconduc. ESCAPを含めた電気生理学的手法が今後どのような応用を計られるであらうか。第一は脊髓損傷におけるSpinal Shockの発生機序の解明である。conduc. ESCAPをモニターとした定量的な脊髓漸増圧迫下で脊髓反射に生じる変化を観察すれば、何らかの回答を得られる筈である。 $\alpha$ 運動細胞とそれに連絡する介在ニューロンの変化については鎌田修博君(61回)が研究中であり、すでに興味深い結果が得られている。また $\alpha$ 運動細胞の変化については丸岩博文君(65回)が近々研究着手の予定である。第二は圧迫性ミエロパチーにおける脊

髄内応力分布を索路の電位変化からみようとするものである。これまで微小血管造影による形態学的研究や光弾性モデルがあるがそれ自体が神経組織の機能変化を直接的に示すものとは言い難い。conduc. ESCAPは直接的な解答を与えてくれるが、CSMやOPLLにおける慢性漸増圧迫条件の作成方法が一つの課題となっている。第三は脊髓症における歩行障害に脊髓内錐体外路機能障害の関与の有無をみようとするものである。即ち、四肢筋肉、関節からの深部知覚を介したフィードフォワード情報は後索、後側索を上行したのち、supraspinalにレベルで解析、絡合を受け再び体平衡維持情報として四肢筋肉、関節へフィードバックされる。このフィードバック経路として注目されているのが前庭脊髓路を中心とした錐体外路系索路であるらしい。

最後に、少し巨視的に今後の研究活動をみてみよう。現在、脊髓やミエロパチーの病態解明において神経伝達物質が有力なパラメーターとして研究され始めている。里見先生をリーダーとする脊髓班電気生理学グループも今後、神経伝達物質との関連で研究を進展させなければならぬところである。さらには、脊髓損傷における神経組織の可塑性の問題においては神経成長ホルモンの研究と伝導遮断部位への容積伝導体としての遊離神経移植

の可能性などを極めて大きな研究課題が山積している。

この問題を切り崩すには研究テーマを一度モザイク状に分割した後、全体的な視野から再総合することが必要であり、裾野の広い研究発展へ繋がることが期待される。今後、後に続く若い研究者に対し、電気生理学的な研究手技の伝達のみならず、研究の大きな方向性を示してゆくことが我々の重大な責務であると考える。

この後、岩原賞が回を重ねてゆき、過去の受賞論文を振り返った時、今回受賞対象となった拙著がいささかの光を残すものであれば望外の幸せである。

## 教室だより

### ●教室人事

#### (1) 医長人事

S 62年7月堀内行雄君 東京専売病院部長

7月塩尻邦彦君 佐野厚生病院医長

9月若野紘一君 川崎市立井田病院部長

10月添田修一君 慶大月が瀬リハセンター医

長

S 63年4月松林経世君 至誠会第2病院医長

10月藤田享介君 浦和市立病院部長

H元年4月佐々木孝君 済生会神奈川県病院長

7月彦坂一彦君 光が丘総合病院医長

#### (2) 教室幹事

S 61年9月～S 62年12月 内西兼一郎君

S 63年1月～S 63年12月 伊藤恵康君

H 1年1月～ 藤村祥一君

#### (3) 副院長就任

S 63年2月岩田清二君 済生会神奈川県病院

S 63年8月細谷俊彦君 太田病院

#### (4) 大学関係

S 62年4月持田讓治君 東海大講師

S 63年4月藤村祥一君 慶大講師

S 63年4月岡 義範君 東海大助教授

H元年8月石井良章君 杏林大教授

### ●留学

吉 峰 史 博君

Department of Orthopaedics and Rehabilitati-  
on, University of Miami.

P. O. Box 016960, Miami, Florida 33101, U. S. A.

菅 沼 淳君

Hospital For Joint Diseases Orthopaedic insti-  
tute

Bernard Aronson Plaza 301 East 17th Street

New York, New York U. S. A.

212-598-6000

### ●慶弔のお知らせ

#### ○御結婚

S 62年4月 上石 聡君

5月 増本 項君

12月	12月	12月	11月	11月	11月	10月	10月	10月	10月	6月	5月	5月	5月	5月	4月	3月	S 63 年 2 月	12月	12月	11月	10月	9月	6月
小柳	小野	依光	持田	吉田	松本	児玉	和田	福井	徳永	吉峰	武田	市川	中村	渡辺	渡辺	渡辺	眞木	高山	池上	岩本	鷲谷	栗村	
貴裕君	陽二郎君	悦郎君	郷君	篤君	守雄君	隆夫君	信裕君	康之君	祐二君	史博君	将毅君	亨君	雅也君	雅彦君	理君	元裕君	眞一郎君	博泰君	靖彦君	一郎君	誠君		

○御逝去

3月	2月	1月	S 63 年 1 月	12月	9月	8月	7月	6月	S 62 年 4 月	6月	6月	6月	6月	4月	3月	3月	3月	3月	3月	H 元 年 2 月
岩原	吹本	臼田	三倉	長谷川	丸谷	蕪木	松本	梅沢	野町昭三郎君	梅沢	鈴木	丸岩	大平	早川	橋本	西村	松村	豊田	大熊	
寅猪君(5回生)	武憲君	正雄君	勇閔君(53回特)	善吉君	真君	初枝君	源一君(16回生)	文彦君	御令室	文彦君	克侍君	博文君	孝之君	武憲君	健史君	正智君	崇史君	敬君	一成君	

3月 米山 芳夫君 御母堂  
 4月 藤村 祥一君 御母堂  
 5月 高瀬 佳久君 御尊父  
 6月 高野 守夫君 (40回特)  
 8月 今井 望君 御尊父  
 8月 伊勢亀富士朗君 御母堂  
 10月 野崎 寛三君 (10回生)  
 11月 浅葉 義一君 御母堂  
 H1年1月 加藤 哲也君 御母堂  
 1月 野間 博君 (19回生)  
 2月 吉井 新一君 御尊父  
 3月 中西 忠行君 御尊父  
 4月 斎藤 彊君 御母堂  
 4月 淵上 寛治君 御尊父  
 6月 西村 正智君 御尊父  
 7月 吹本 武憲君 御尊父  
 8月 岩上 哲郎君 御尊父

○御開業および退室

S 62年10月 道振 義治君  
 10月 比嘉 良博君  
 S 63年3月 磯崎 秀明君

H元年1月 伊藤 惠康君  
 1月 安藤 千博君  
 1月 崔 文錫君  
 2月 原 貴君  
 4月 樋口 正隆君  
 4月 伊藤 敬一君  
 4月 宮川 準君  
 5月 三枝 憲成君  
 7月 小林 慶二君  
 5月 近藤 信和君  
 6月 中邨 裕一君、山田 久孝君  
 6月 富沢 和夫君  
 7月 張簡 俊添君  
 10月 田中 耕一君  
 11月 平松 正光君

以上S 62年4月よりH元年8月までの移動を掲載しました。

● フレッシュユマン紹介

66回

有野 浩 司

生年月日 昭和三十五年四月三日

出身大学 慶応大学 出身地 兵庫県

スポーツ医学、外傷学に興味があり、整形外科学教室に入室しました。

入室して各分野のトップの先生がそろっているのに驚きました。

六十三年一月より大田原赤十字病院、元年七月より平塚市民病院勤務で足立先生、石黒先生の下で勉強させてもらっています。毎日が発見の新鮮な日々を送っています。昨年よりゴルフに参加しはじめました。

今後とも御指導お願い申し上げます。

井 口 理

生年月日 昭和三十六年十二月三十一日

出身大学 慶応大学

趣味 テニス、カメラ

クラブ 硬式テニス部

昭和六十三年一月より稲田登戸病院に出張し、早くも一年半が過ぎようとしています。毎日の発見が非常に面白くなってきた反面、人間相手の仕事の難しさを痛感しております。整形外科は、自分の工夫を生かせる点が多く、興味が少しずつ増してきています。

今後とも御指導宜しく願います。

今 本 雅 彦

出身大学 慶応大学

クラブ 籠球部

入局して二年半になりますが、ようやく整形外科の奥深さをチラリかいま見れるようになりました。済生会神奈川県病院に一年、足利日赤に来てすでに半年間たちますが、諸先生方の厳しい御指導のもと充実した日々を送っています。ともすれば惰性でもすごせてしまう毎日ですので何か一週毎にテーマを決めてやってみようと思うのですが、『思うは易し』でしてグラス片手にマイク握っている自分にふと気付く日々（複数）も度々。

それでも七月からはネーベンが来るとの事ですので、

内心ビクビクしながらも積極的に頑張っていく所存です。  
今後ともよろしくお願いいたします。

徳 永 祐 二

生年月日 昭和三十六年四月二十五日

出身大学 慶応大学

趣 味 ゴルフ・スキー

クラブ ゴルフ部

昭和六十二年、迷うことなく整形外科学教室に入局した。この選択は間違いなかったと確信している。

慶応病院での約一年二月月のフレッシュマン生活は有意義なもので、多くの先生方から御指導いただき、その上コンピュータも学べた。

慶応病院で蓄積したものは、最初のフレッシュマン出張先の済生会神奈川県で生かされた。そこでの一二年間は決して楽なものではなかったが症例が非常に多く、上の先生方から多くのことを学んだ。この忙しい病院で充実し、かつ勉強になった一年間を過ごせたという自信は他のどんな病院に行っても通用すると確信している。

中 澤 秀 夫

生年月日 昭和三十六年七月四日

出身大学 慶応大学

趣 味 飲酒

Freshman出張で一年一ヶ月静岡日赤にお世話になり、現在はお伊勢参りにきております。海の幸、山の幸に恵まれた地への出張で、日に日に全身に肉がついていくようです。

今秋、結婚することになりました。お世話になりました先生方に心より深謝いたします。

中 村 雅 也

生年月日 昭和三十六年七月二十六日

出身大学 慶応大学

クラブ バスケットボール部

第一線の地域医療に直面し、自分の無力さを痛感しながらも、日々新しい発見に満ち溢れており、充実した日々を送っています。

依光悦郎

出身大学 慶応大学

クラブ ラグビー部

教室に入局して、はや二年が過ぎさってしまいました。現在は佐野厚生病院に出張し、塩尻先生の御指導のもと、充実した日々を送らせて頂いております。

入局する以前は、整形外科というのは生命の危機にかかわることが少なく、どちらかと言うと気楽な分野と考えておりましたが、最近は骨格系の機能を再建するのは大変難しいことだと痛感しております。

今後とも精進して医療に取り組みたいと思っております。

渡辺理

生年月日 昭和三十六年十月二十七日

出身大学 慶應大学

クラブ 三四会硬式庭球部

趣味 油絵、美術鑑賞、スキー

入局してはや二年が経ち、現在は専修医として練馬区医師会立光ヶ丘総合病院に勤務しております。諸先生方の御指導の下、外来に手術にと充実した毎日を過している。

ます。ひとつひとつの症例を大切にして、一日も早く一人前の整形外科医になる様努力するつもりでおります。

渡辺雅彦

生年月日 昭和三十七年八月十日生

出身大学 慶應大学

クラブ 馬術部

現在、伊勢原協同病院に勤務しております。毎日毎日か無知との遭遇で、これを二日に一度にするのが、今の目標です。

どうぞ、よろしくお願い致します。

相羽整

生年月日 昭和三十七年十一月十七日

出身大学 北里大学

クラブ アメリカンフットボール部

昭和六十二年の五月に慶大整形外科に入局してから早や二年が過ぎました。毎日がめまぐるしく、月日がたつのが非常に早く感じられます。現在私は大田原赤十字病院にて勤務しておりますが、諸先生方の御指導のもとト

レーニングに励んでおります。今はまだ半人前ですが、一日も速く一人前の整形外科医になるように精進していきつもりです。

葉山 雅 貴

小林 一

生年月日 昭和三十五年十二月二十七日

出身大学 福井医科大学

クラブ テニス部、スキー部

趣味 スポーツ

現在、立川共済病院に勤務しております。昨年の4月にフレッシュマン出張で当病院に来てからはやくも一年が過ぎてしまいました。桜の満開の季節に立川に来まして、ついこの間のことのように思っていましたら、今年の桜も散ってしまいました。時の流れのはやさに驚きつつ自分が責任ある立場におかれていることを痛感しています。幸い上司の先生にもめぐまれ適切な御指導をいただき有意義な経験をしたと思っております。これからは後輩に恥じぬようにますます努力したいと思います。また、ゴルフの腕ももう少しあげたいと思っております。

關 美世香

生年月日 昭和三十七年十一月四日

出身大学 杏林大学

クラブ 水泳部・少林寺拳法部

趣味 音楽鑑賞他

昭和六十三年七月より社会保険埼玉中央病院に出張に出ています。諸先生方に御迷惑をお掛けしながら無夢中で働くうちに、早くも一年がたととしていきます。七月からは、佐野厚生病院に出張する予定です。「いき遅れ」という世間の冷たい視線も気にせず、澄んだ空気のもと、仕事（と時には遊びにも）に熱中したいと思います。

中村 光 一

生年月日 昭和三十五年七月十九日

出身大学 広島大学

趣味 ジョギング

最近思っていること……はやく一人前になりたい。

王 東

生年月日 昭和三十六年七月十二日

出身大学 北里大学

クラブ バスケットボール部

趣味 スポーツ、睡眠

入局して早くも二年を過ぎ、現在、東京歯科大学市川

病院に勤務してから、一年半を経過しようとしています。

現地での医療の場で、初めて働いてみると、いろいろと

新しいことばかりで、毎日が新鮮です。

仕事以外にも、多くの人々と知り合うことができ、遊

びに、勉強(?)に忙しい日々を送っています。

## 67回

岩部 昌平

生年月日 昭和三十九年三月八日

出身大学 慶応義塾大学

クラブ バスケットボール部

趣味 バスケット、スキー、酒

今年一月より済生会神奈川県病院に出張してきて四カ

月、目の回るような忙しさにも慣れてやっと思が回らなくなってきました。入局よりはや一年経ち、厳しい?先輩医局員の指導の元で少しは整形外科医らしくなっかなと思ふ今日この頃です。

臼田 修二

生年月日 昭和三十八年十月十七日

出身大学 慶応大学

趣味 ドライブ、スキー

入局してあつと言う間に一年過ぎてしまいました。一

年前から、どれだけ進歩したか、疑問符の三乗位付くところ

です。いよいよフレマン出張の時期になりました。

まだまだ未熟者ですが、今後も御指導よろしく願います。

豊田 敬

生年月日 昭和三十八日十月四日

出身大学 慶応義塾大学

クラブ アイスホッケー

趣味 キーボード、ゴルフ

昭和六十三年四月に入局して以来はや一年が過ぎ、現在は光が丘総合病院に勤務しております。三月に結婚したばかりでまだ落ち着きませんが、充実した毎日を送っています。個性派人間のひしめきあう医局には、大変魅力を感じております。一日も早くまともな整形外科医になれるよう努力する所存であります。

### 中村 俊 康

生年月日 昭和三十八年十月二十日

出身大学 慶応大学

クラブ 競走部

大学時代は、いつも授業にも出ず、走ってばかりの日でした。整形外科教室に入局以来、大学病院内を掛けずり回っていたにもかかわらず、各オーベンの先生方にかわいがって頂いているうちに、スリムだったボディラインも無残に崩れ去り、体重計にのれば、昨年度より八キロの体重増加、今まではいていたズボンがこことくはけなくなり、自己管理能力のなさにあきれかえっています。もう走れない体になってしまう、というところで、川崎市立川崎病院に出張となりました。今後はやせるぞ、と思っていたのですが、すでにズボンのウ

エストは一センチメートルほど増えたようです。このままいくと、どうなってしまうのかと思っていながらも、そんなことはすっかり忘れて、元気に仕事（食事）をしています。

### 西澤 隆

生年月日 昭和三十八年八月二十八日

出身大学 慶應大学

クラブ スケート部（アイスホッケー）

慶應病院整形外科教室に入局して以来、早いものでもう一年が過ぎ去ろうとしています。去年の今頃は右も左もわからぬ“ひよっ子”でしたが、一年間慶應で鍛えられ、やっと医者らしい出来栄にはなつたと思います。これも全て諸先輩方の公私にわたる御指導のおかげと、心から感謝しております。五月一日からは伊勢原協同病院に出張することが決まり、これからは医者らしい真似事ではなく、本当の医療を行なっていかなければなりません。それだけに、今までは違った意味で責任感もち自分の立場を自覚し、患者さんの身になって仕事をせねばならぬと痛感しております。臨床の第一線に出ることになり、多々わからないこともありますが、こ

れからもよろしく御指導下さるようお願い致します。

逸見 治

出身大学 慶應大学

趣味 スキー、ドライブ

クラブ 三四会野球部

昨年四月整形外科入局以来、慶応病院にて整形外科を十カ月間、埼玉医大総合医療センターにて麻酔科を四カ月間研修しました。この間、素晴らしい諸先輩の先生方に御指導いただき、また、毎日が新しい発見の連続で、とても充実した一年間を過ごすことができました。

この度、七月より総合太田病院に勤務することとなりましたが、これからも諸先生方に一步でも近づくことができるよう、努力して参りたいと思います。

吉田 祐文

出身大学 慶應大学

クラブ 柔道部

63・4に入局して、麻酔科での研修を含め一年三カ月が過ぎました。スタッフ、レジデントの先生方からは外

来で、病棟で、手術室で、そして当直の際に様々な事を教えていただいたのですが、その1/1000も吸収できていないのが残念です。H1・7より済生会宇都宮病院に勤務しますが、ひとつひとつの症例を大事にしたいこうと思っています。

片岡 公一

高橋 一弘

鹿児島大学医学部卒

現在 済生会横浜市南部病院整形外科において、老人専門医、Amputia専門医としての腕を磨いております。八十才以上であれば、どしどし紹介して下さい。すべてOpe適応です。

私は、micro surgeryの腕をつけようと、はるばる九州より上京し、東京警察病院形成外科に入り、目標通りの勉強を続けていましたが、自分にむいていない事に気づき、慶応大学整形外科に、入局させて頂きました。

慶応大学在勤中は、公私共に、諸先生方には大変御迷惑をおかけしました。(退院総括の遅れ、突然の結婚等)

これからは、諸先輩方を目標として、がんばる所存でございませう。

月村 泰規

生年月日 昭和三十七年五月十九日

出身大学 日本医科大学

クラブ ヨット部

趣味 音楽鑑賞、飲酒、睡眠、ゴルフ

昭和六十三年五月、当初から「常に何故かを考える。」と言われ、既にボケさ加減を見破られ、「一日四時間以上寝るな。」と人一倍努力が必要であることを指摘されていた。しかし、持ち前の体力で人並にはこなしてきた。・・・つもりではある。当直すれば「今日は付くわよ。」と行く先々の看護婦さんに囁かれ、また眠れなかったと思いつつも、また酒を飲む・・・こうして慶應病院にて、既に一年が過ぎてしまいました。こんな私ですが、この度七月から出張になることになりました。一年間有り難うございました。出張先の先生方、よろしくお願いいたします。

仁平 高太郎

生年月日 昭和三十八年五月三十日

出身大学 群馬大学

趣味 スキー、麻雀

クラブ バレーボール

昨年四月入局した頃の、クルズス予定表に「ディスク」とあり、それを勝手に六本木あたりのディスクを想像し、くだけた医局だと感心していた頃と比べると、少しは成長したかなと思うこの頃です。これには諸先生方の苦言、金言によることも大と思われませう。術中解剖を答えられないでいると「先生、内科へ行ったら」と転職を勧められたり、膝の疾患について答えられないと、「寝ちゃだめだよ、はって病院にこなくちゃ」と某藤川先生にお叱りを受けたりとこの一年間そのようなことの連続でした。今日七月一日より立川共済病院に出張が決まり、気持ちを一段と引きしめて頑張る所存です。今後、出張して、諸先生方に何かと御迷惑をおかけると思いますがよろしく御願いたします。

森岡 秀夫

生年月日 昭和三十七年七月二十八日

出身大学 山梨医科大学

趣味 ゴルフ、テニス

クラブ ゴルフ部

慶大整形外科に入局して、早くも一年がたち、平成元年七月より埼玉中央病院に出張に出ることが決まりました。この一年間、私にとっては厳しい戦いの連続でしたが、今となってはすべてよい思い出として私の頭裏に焼きついています。その中でも、特に強烈だったのは、医局旅行のO先生、膝のカンファレンスのF先生、S先生のカルテチェックetcでした。また、初めての春の医局コンペでは大たたきをしてしまったにもかかわらず、平林先生に、フォームがいいと、お誉めのお言葉をいただき、これ以後、ゴルフの調子も上向きとなり、平林先生の神通力を思い知りました。出張に出て、またゼロからの出発になるかと思いますが、御指導、御鞭達の程よろしく願います。





